



神奈川県  
衛生研究所

平成 14 年

# 神奈川県感染症

---

平成16年3月

## はじめに

平成 11 年 4 月に施行された「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」は、明治 30 年以來 100 年ぶりに感染症対策の枠組みを抜本的に改正し新しい法体系に統合しました。現代の感染症の脅威と感染症を取り巻く状況の変化に対応するため、平成 15 年 11 月 5 日には「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律及び検疫法の一部を改正する法律」が施行され、感染症の類型の見直しと重症急性呼吸器症候群、痘そうなどがあらたに追加されました。しかし近年の社会環境の変化は目覚ましく、結核、マラリア、ウエストナイル熱、重症急性呼吸器症候群、鳥インフルエンザ、炭疽菌によるバイオテロなど時代の変化とともに常に感染症の脅威にさらされています。

神奈川県では健康危機管理の観点から、ウエストナイル熱を疑うカラス大量死事件や炭疽菌を疑う白い粉事件を機に、マニュアルの徹底、適宜見直しを含めた体制の構築と、発生時の対応など感染症対策に努めております。

この冊子は、平成 14 年の本県における感染症発生動向調査、微生物検出情報、関連調査及び研究報告等を収録したものであります。

今後の感染症対策の参考に多少なりともお役にたてれば幸いに存じます。

最後に、本冊子の作成にあたり、関係各方面の多数の方々から、貴重な研究資料をご提供いただきましたことを厚くお礼申し上げます。

平成 16 年 3 月

神奈川県衛生研究所長

益川邦彦

# 目 次

はじめに

I	感染症発生動向調査	1
II	細菌性感染症	
1	腸チフス・パラチフス	
(1)	神奈川県内（横浜・川崎市を除く）チフス菌等のフェージ型別結果	21
(2)	横浜市の腸チフス菌等のフェージ型別結果	21
(3)	川崎市のチフス菌等のフェージ型別結果	21
2	その他の感染症	
(1)	横浜市における海外渡航者下痢症からの病原菌分離状況	22
(2)	散発下痢症からの病原菌分離状況について	23
(3)	川崎市の下痢症患者からの腸管病原菌検出状況	24
(4)	横須賀市の散発下痢症からの腸管系病原菌検出状況	26
(5)	相模原市内で分離された腸管出血性大腸菌	27
(6)	バイオテロに伴う炭疽菌検査	27
3	河川等の環境調査	
(1)	河川水腸管系病原菌調査（神奈川県）	28
(2)	腸管系病原菌検索（横浜市）	30
(3)	腸管系病原菌検索（川崎市）	33
(4)	河川水腸管系病原菌検索（横須賀市）	36
III	ウイルス性感染症	
1	日本脳炎	
(1)	日本脳炎感染源調査	39
2	インフルエンザ	
(1)	神奈川県が発生状況	39
(2)	神奈川県域のインフルエンザの動向	40
(3)	横浜市のインフルエンザの動向	40
(4)	川崎市のインフルエンザの動向	45
(5)	インフルエンザ感受性調査	46

3	その他の感染症	
(1)	死亡カラスのウエストナイルウイルス遺伝子検査について	48
(2)	神奈川県（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く）における麻疹抗体保有状況	48
(3)	神奈川県（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く）における風疹抗体保有状況	49
(4)	HIV 患者・感染者の状況について	50

#### IV その他の感染症

1	神奈川県で発生した恙虫病について	63
---	------------------	----

#### ～ 資 料 ～

1	平成 14 年分 1～3 類及び全数把握対象の 4 類感染症	66
2	細菌検出状況	68
3	ウイルス検出状況	73
4	予防接種実施状況	79
5	神奈川県感染症機関分布図	81
6	神奈川県感染症機関一覧表	82

# I 感染症発生動向調査

# I 感染症発生動向調査

## 1 類感染症

### エボラ出血熱

県内報告なし

### クリミア・コンゴ出血熱

県内報告なし

### ペスト

県内報告なし

### マールブルグ病

県内報告なし

### ラッサ熱

県内報告なし

## 2 類感染症

### コレラ

横浜市、川崎市、横須賀市からそれぞれ1例、計3例の報告があった。昨年同様海外渡航による国内持ち込み例で、横須賀市の菌型は、O139（インドからの帰国者）であった。

### 細菌性赤痢

県内では合計43例の報告があった。その内訳は、横浜市内13例、川崎市内11例、横浜市・川崎市を除く神奈川県内地域（以下「県域」という）で19例であり、昨年同様その多くは渡航者による国内持ち込み例であった。

### 腸チフス

県内で4例の報告があった。その内訳は、横浜市内2例、川崎市、相模原市がそれぞれ1例で、半数は渡航歴がない保菌者であった。

### パラチフス

県内では4例の報告があった。その内訳は、横

浜市内2例、川崎市、県域からそれぞれ1例であった。

### 急性灰白髄炎

県内報告なし

### ジフテリア

県内報告なし

## 3 類感染症

### 腸管出血性大腸菌感染症

県内で合計110例の発生が報告された。その内訳は、横浜市内33例、川崎市内16例、県域が61例であった。例年6～8月に多く見られる。大きな事件が見られなかったため、昨年の300例に比べ半数以下に減少した。

## 4 類感染症（全数把握対象疾患）

### アメーバ赤痢

県内で42例の報告があった。内訳は、横浜市内21例、川崎市内8例、県域が13例であった。

### エキノコックス症

県内報告なし

### 黄熱

県内報告なし

### オウム病

県内報告なし

### 回帰熱

県内報告なし

### 急性ウイルス性肝炎

県内では45例の報告があった。その内訳は、横浜市内18例、川崎市内5例、県域で22例の発生が報告された。

**Q熱**

県内報告なし

**狂犬病**

県内報告なし

**クリプトスポリジウム**

県内報告なし

**クロイツフェルト・ヤコブ病**

県内から 13 例報告があった。その内訳は、横浜市内 1 例、川崎市内 2 例、県域 10 例であった。

**劇症型溶血性レンサ球菌感染症**

県内で 3 例報告があった。その内訳は、横浜市内 2 例、川崎市内 1 例であった。

**後天性免疫不全症候群**

県内で 69 例の報告があった。内訳は横浜市内 27 例、川崎市内 21 例、県域が 21 例であった。

**コクシジオイデス症**

県内報告なし

**ジアルジア症**

県内で 11 例の報告があった。その内訳は、横浜市内 7 例、県域が 4 例であった。

**腎症候性出血熱**

県内報告なし

**髄膜炎菌性髄膜炎**

県内で 2 例の報告があった。内訳は横浜市内 1 例、県域から 1 例であった。

**先天性風疹症候群**

県内報告なし

**炭疽**

県内報告なし

**ツツガムシ病**

県内で 5 例の報告があった。その内訳は、横浜市内 2 例、川崎市内 1 例、県域 2 例からの報告であった。

**デング熱**

県内から 10 例の報告があった。内訳は、横浜市内 7 例、県域から 3 例であった。

**日本紅斑熱**

県内報告なし

**日本脳炎**

県内報告なし

**乳児ポツリヌス症**

県内報告なし

**梅毒**

県内で 24 例の報告があった。その内訳は、横浜市内 8 例、川崎市内 6 例、県域 10 例であった。

**破傷風**

県内から 3 例の報告があった。その内訳は、横浜市内 1 例、県域から 2 例であった。

**バンコマイシン耐性腸球菌感染症**

県域から 2 例の報告があった。

**ハンタウイルス肺症候群**

県内報告なし

**Bウイルス病**

県内報告なし

**ブルセラ症**

県内報告なし

**発疹チフス**

県内報告なし

#### マラリア

県内から 11 例の報告があった。その内訳は横浜市内 9 例、県域が 2 例であった。

#### ライム病

県内から 3 例の報告があった。全て横浜市内であった。

#### レジオネラ症

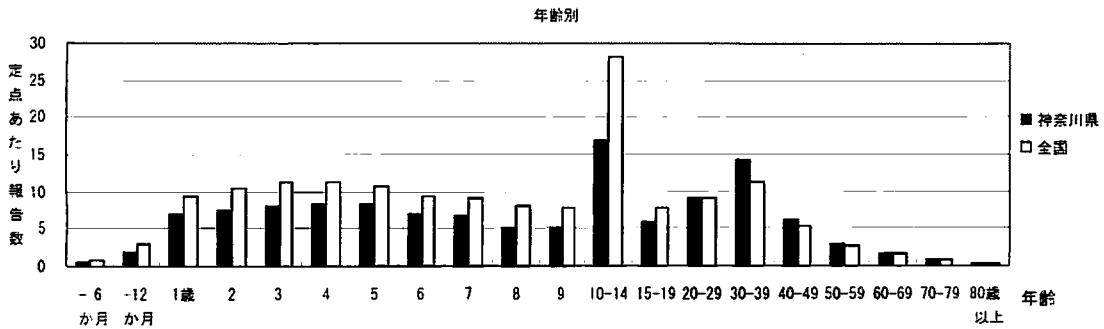
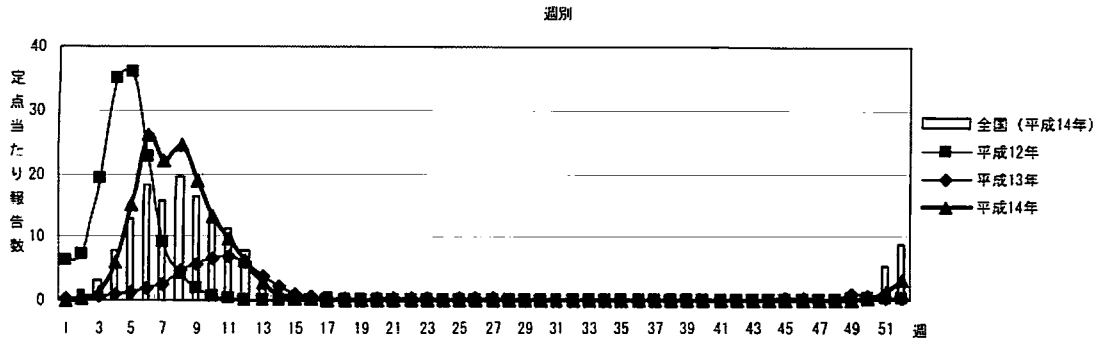
県内で 4 例の報告があった。その内訳は、横浜市内 3 例、県域 1 例の報告であった。



## 週報対象疾患

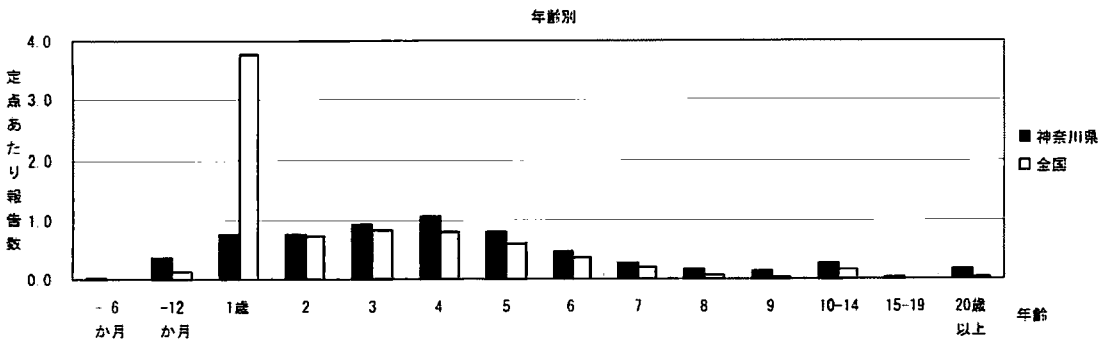
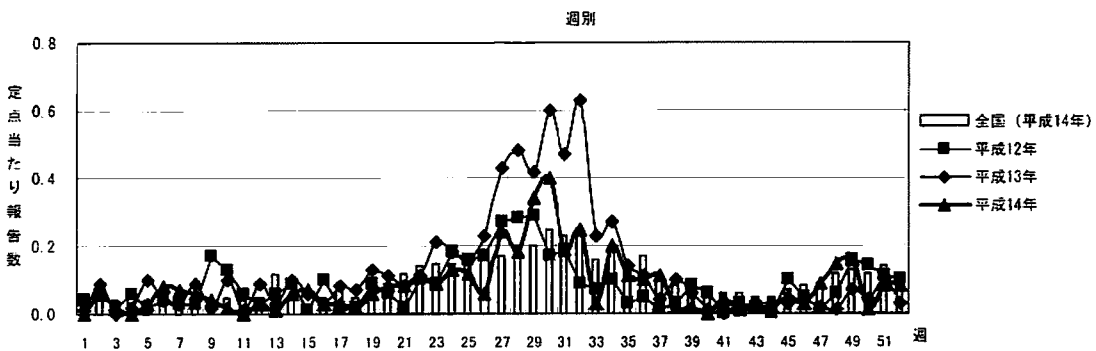
### インフルエンザ

平成13年の流行は過去3年間で最低の水準にあったが、14年は全国の流行のピークと同様に、5週から9週にピークがみられた。



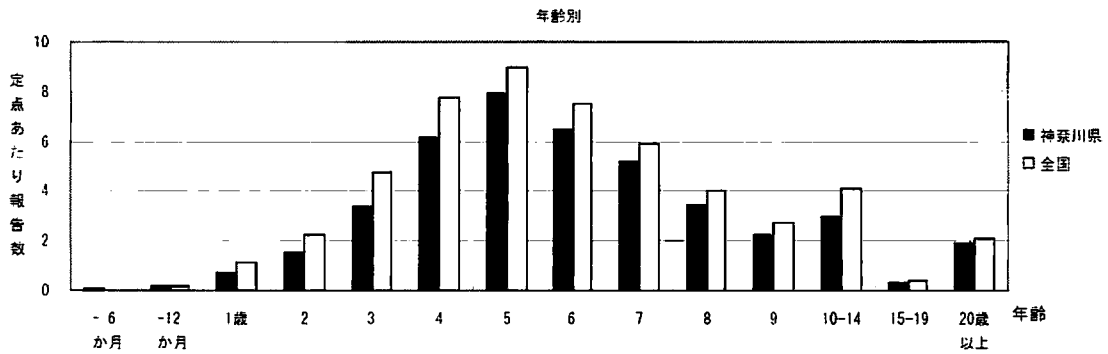
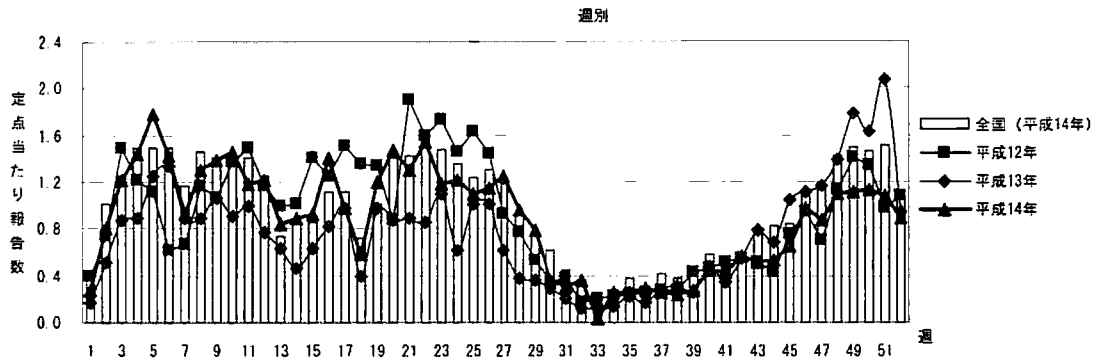
### 咽頭結膜熱

平成13年は27週から32週に流行がみられたが、14年は30週に定点あたり0.4を示した。年齢では例年同様6歳以下に多く報告がみられた。



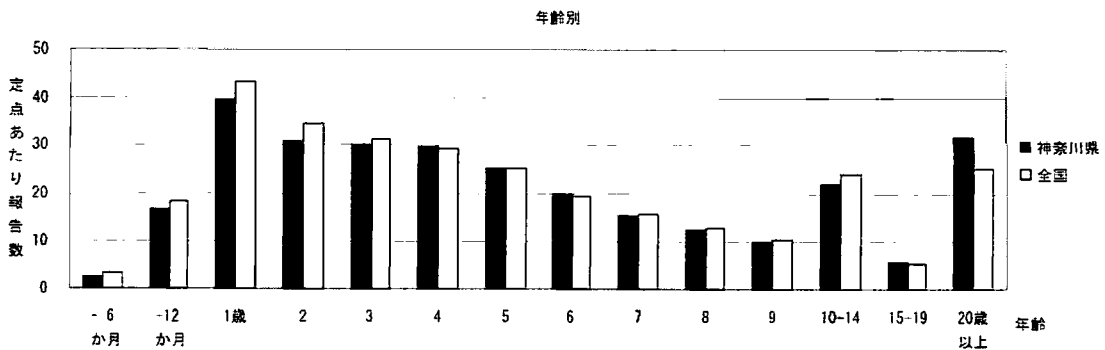
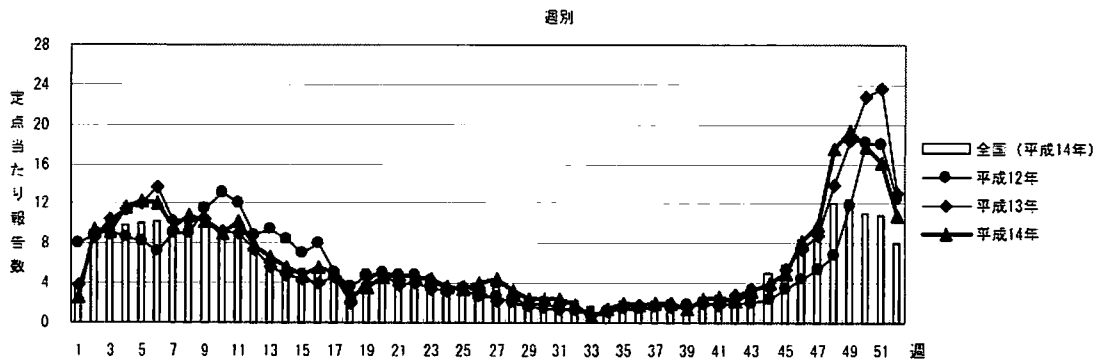
### A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

平成14年は5週から27週にかけて断続的な小流行がみられた。年齢は10歳代以下でほとんどが占められていたが、いずれも全国平均を下回っていた。



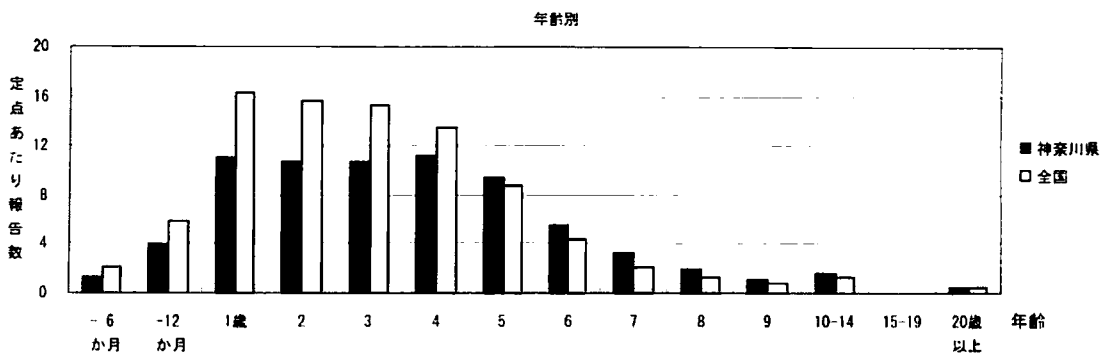
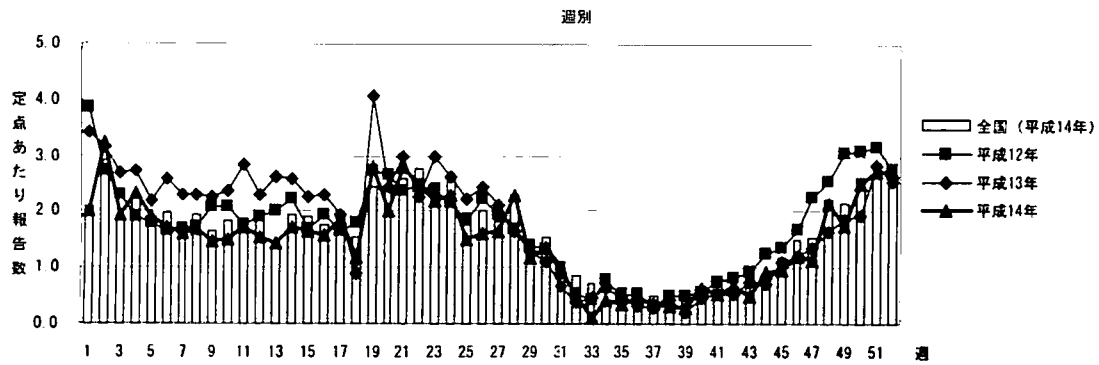
### 感染性胃腸炎

週別、年齢別とも例年同様の傾向がみられた。49週にピークがあったが全国状況とほぼ同様であった。



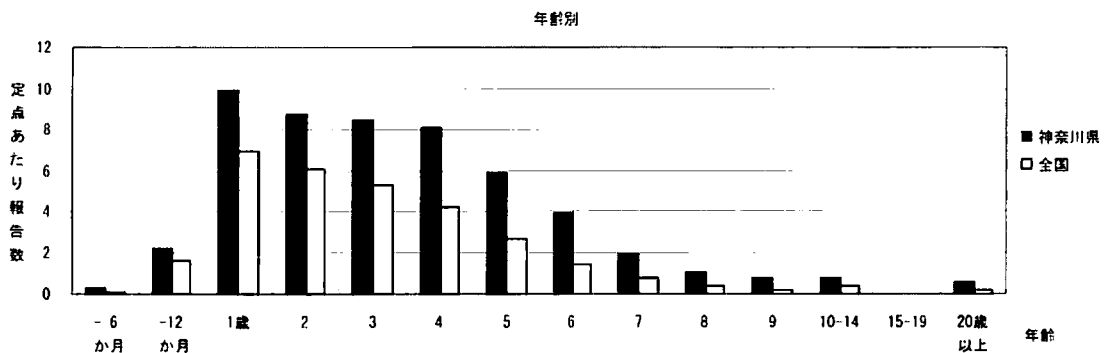
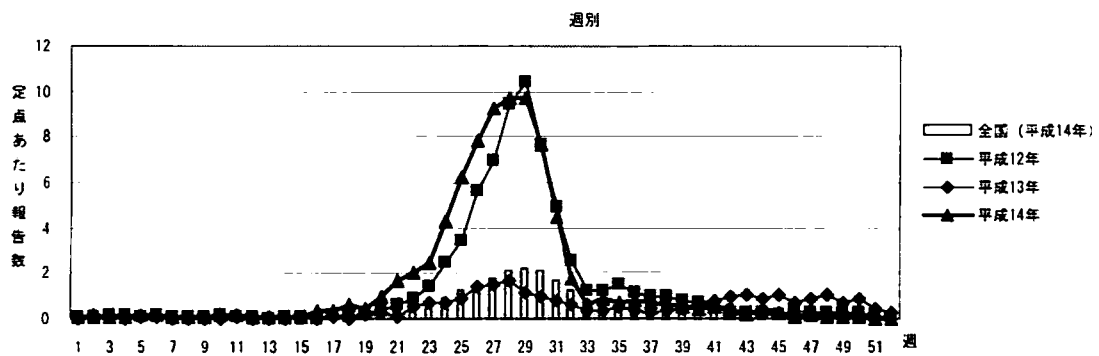
## 水痘

平成14年は全国とほぼ同様の発生傾向で推移した。例年、年末から初夏にかけて流行がみられる疾患である。



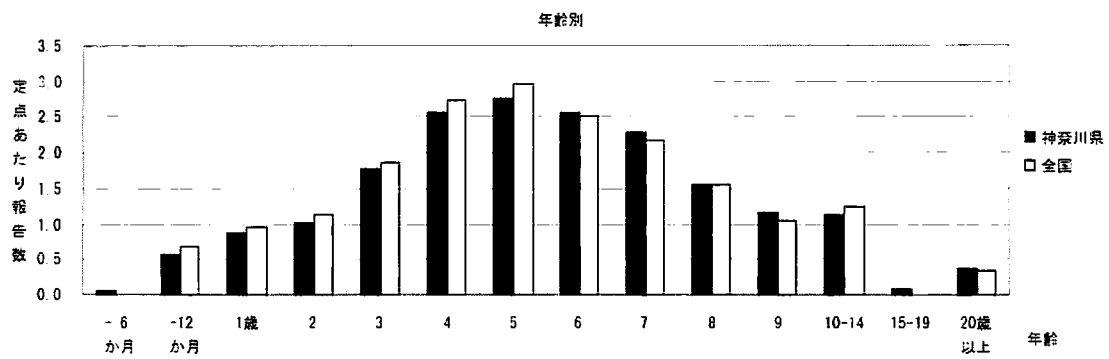
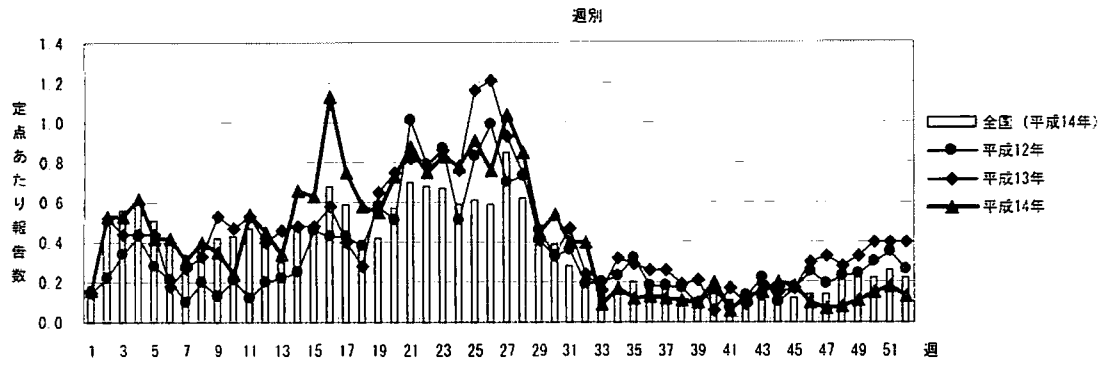
## 手足口病

平成12年に24週から30週にかけて流行し13年に沈静化したものの、14年に再び28週をピークとする流行がみられた。



## 伝染性紅斑

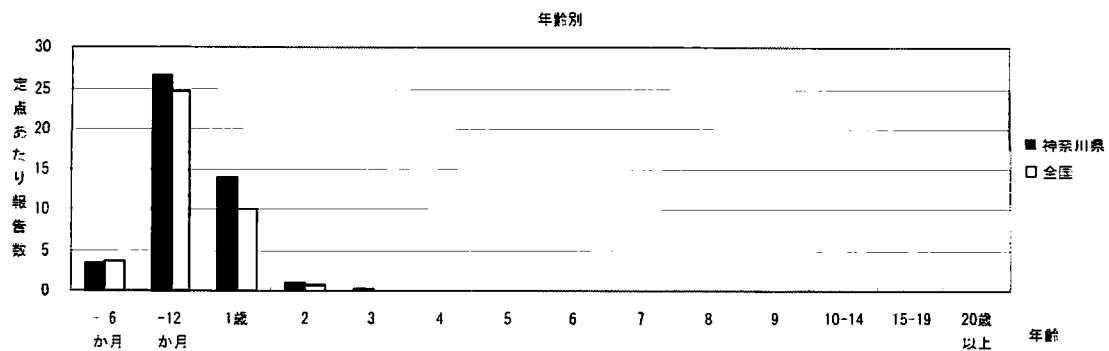
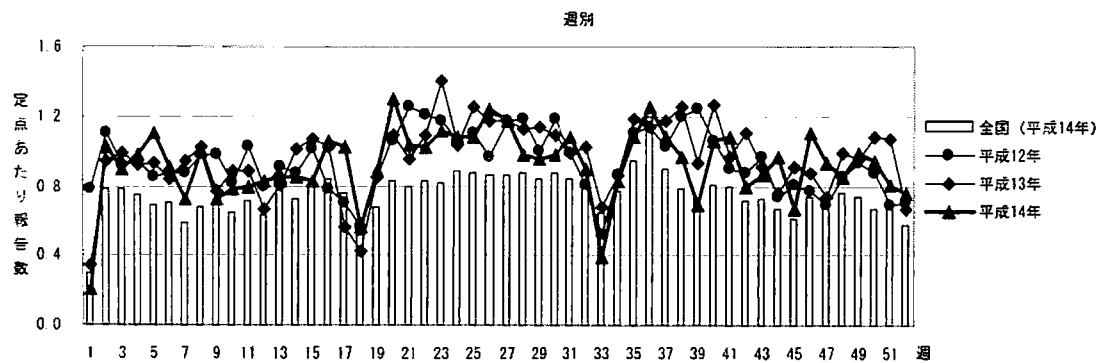
例年、春から初夏にかけて流行がみられる疾患で、平成14年には16週にピークがみられた。



## 突発性発疹

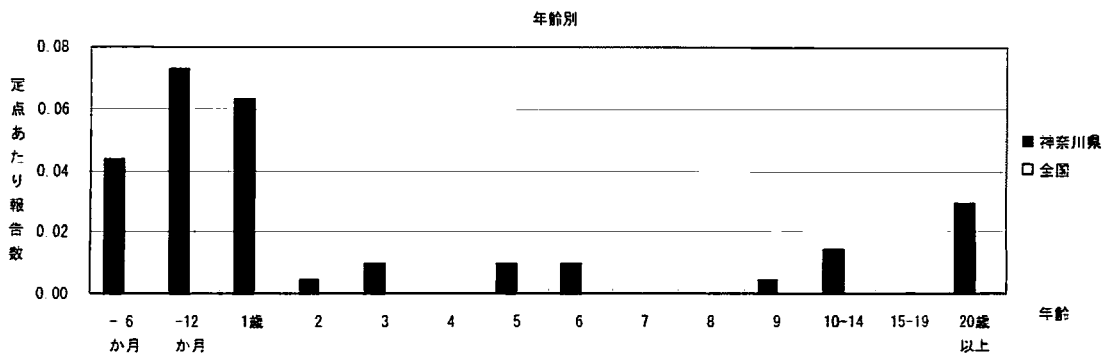
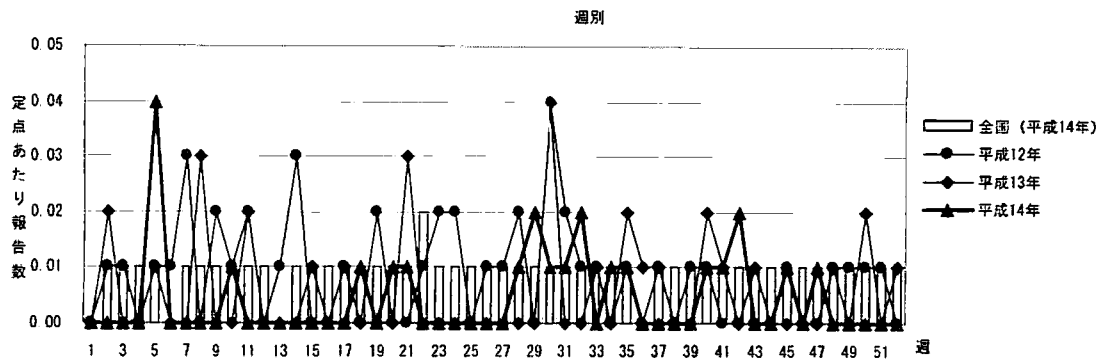
年間を通して流行がみられ、ほとんど季節変動はみられない。

全国に比べやや高い傾向がみられた。



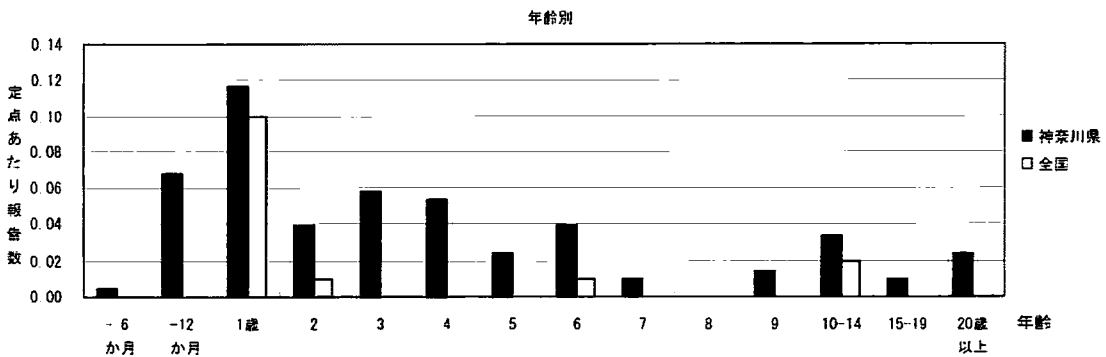
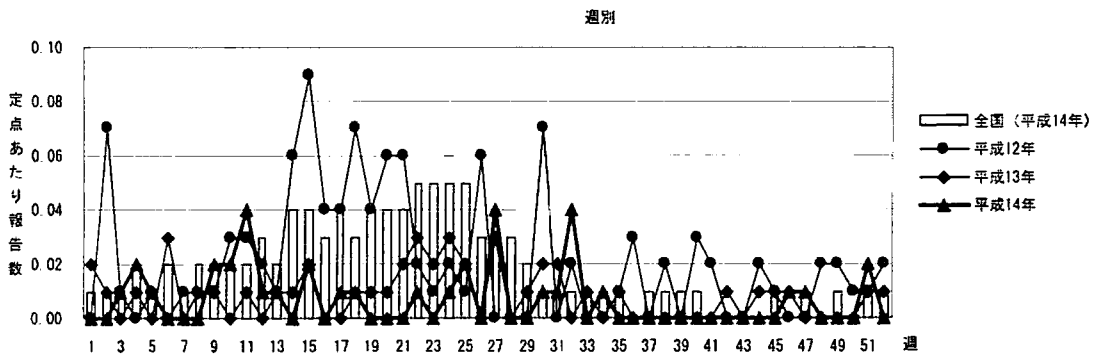
## 百日咳

年間を通じ散発的な発生がみられた。全国的にも低調な流行に推移していた。



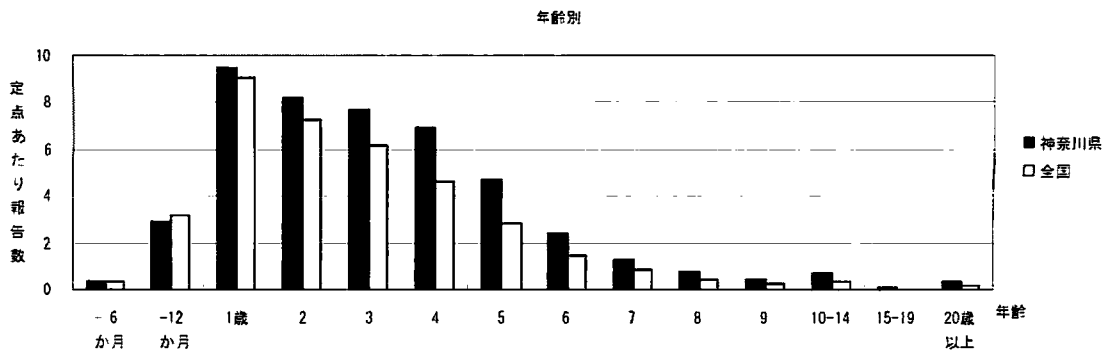
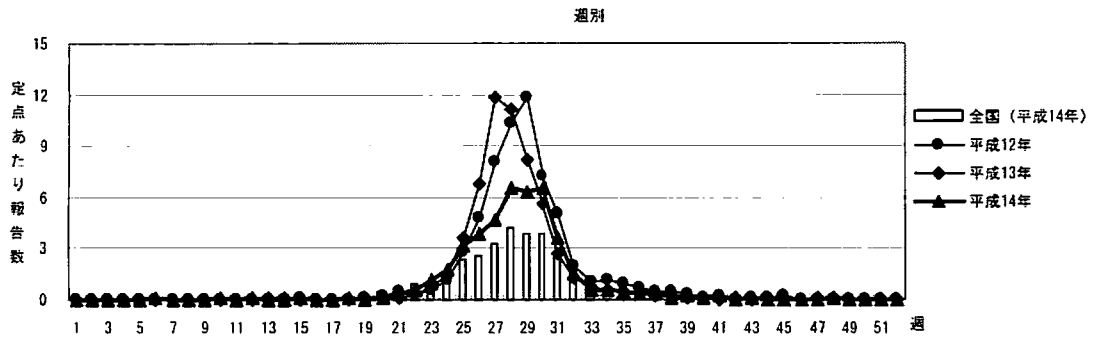
## 風疹

平成14年には目立った流行はみられなかった。



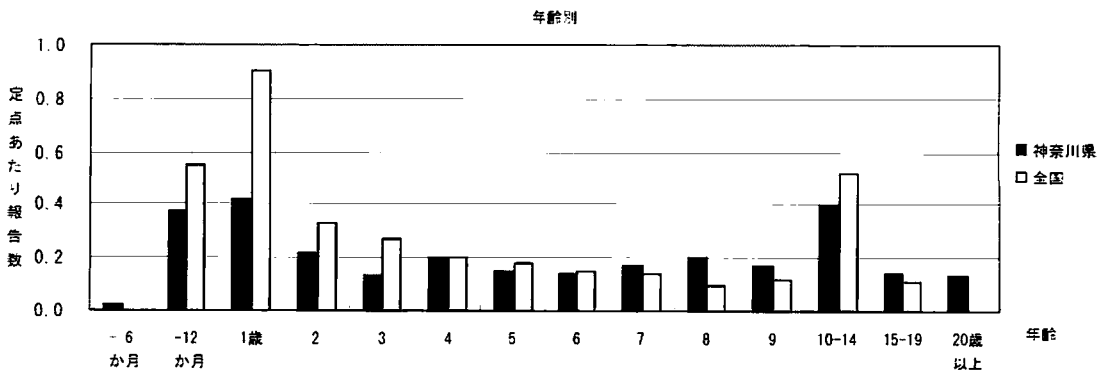
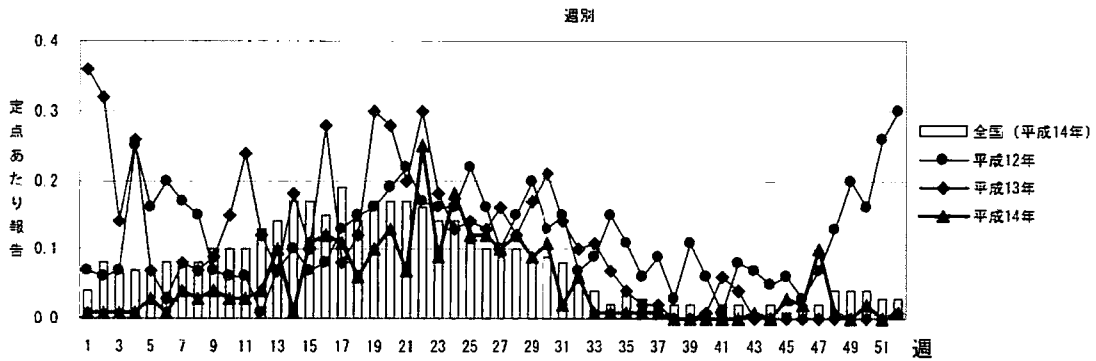
## ヘルパンギーナ

例年、夏季に流行がみられている。平成14年も28週にピークがみられたが報告数は例年の半数であった。



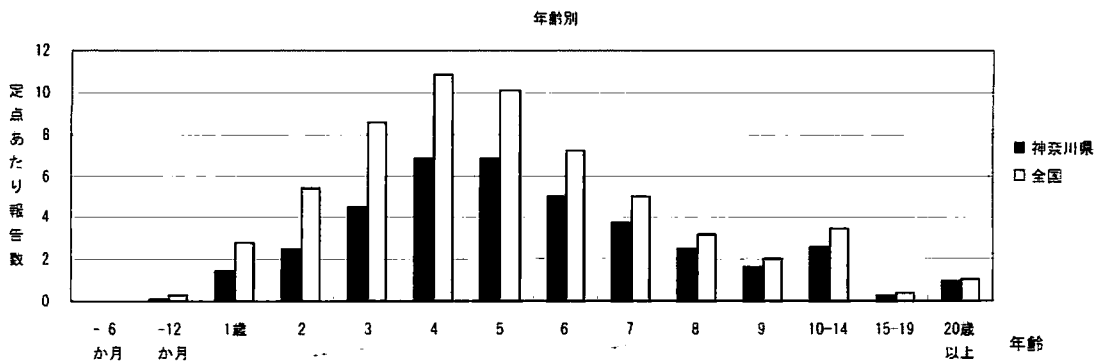
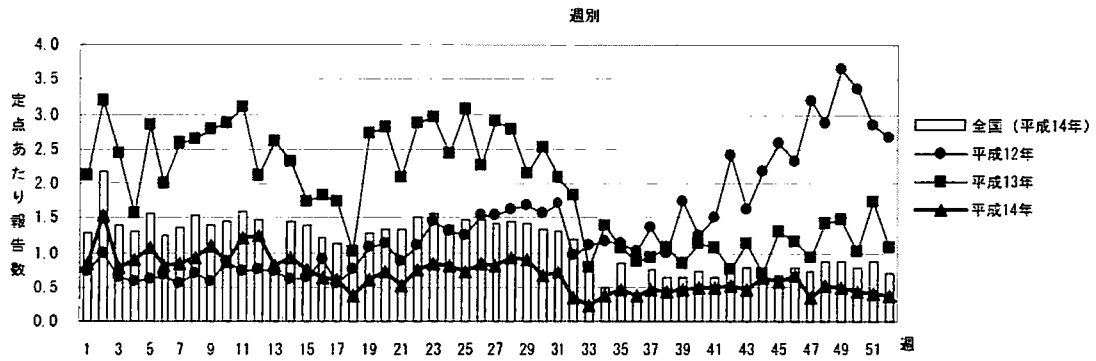
## 麻疹

平成13年に全国的に大きな流行がみられたが、14年には目立った流行はみられなかった。



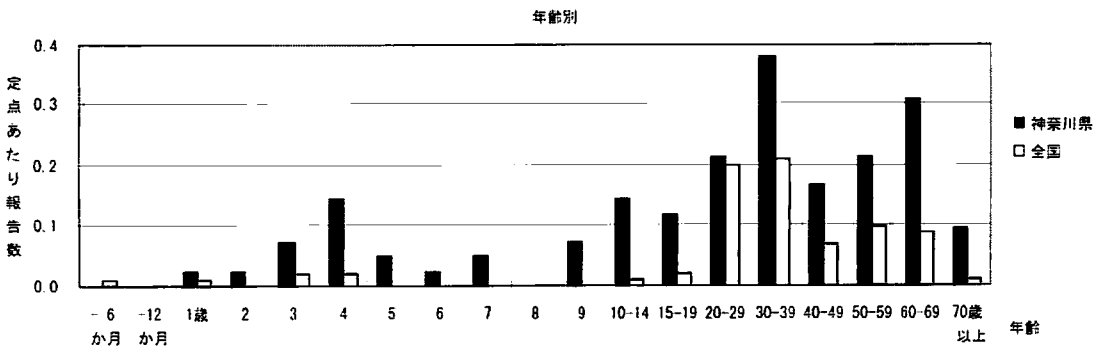
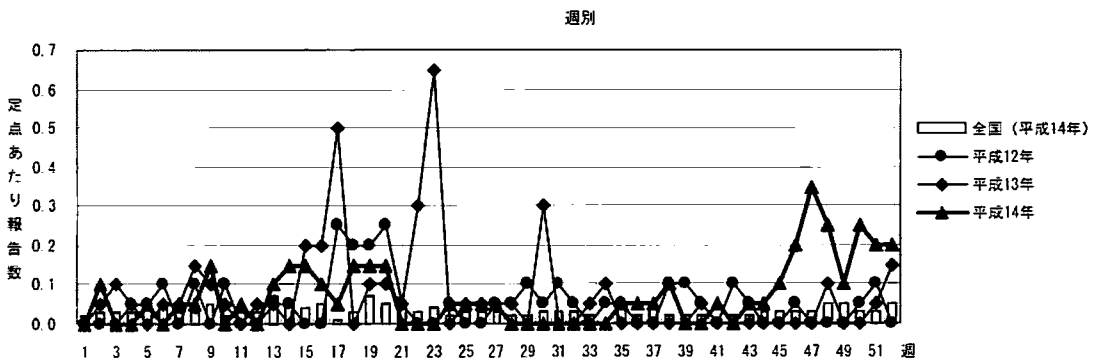
### 流行性耳下腺炎

平成 14 年には目立った流行はなく、全国平均以下であった。



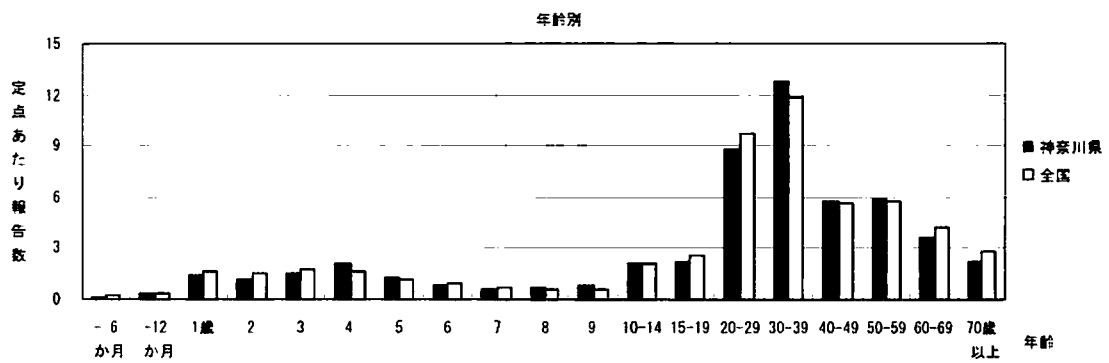
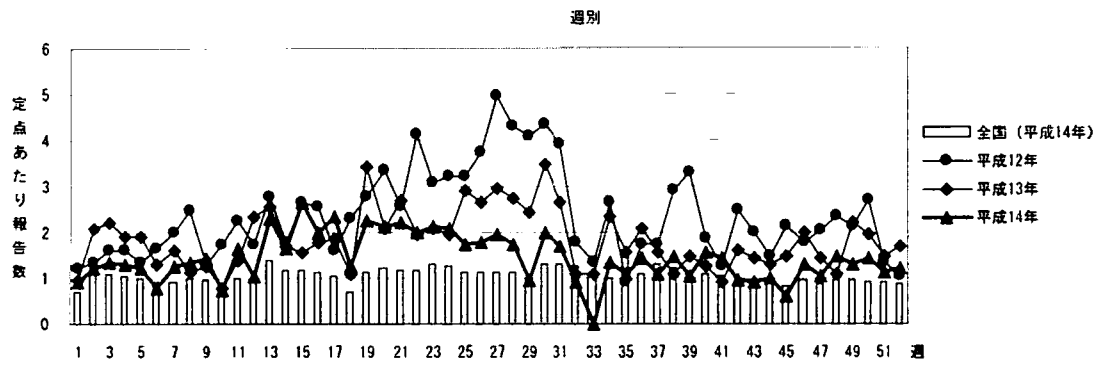
### 急性出血性結膜炎

平成 14 年は散発的な報告がみられた。成人における報告が多いのが特徴である。



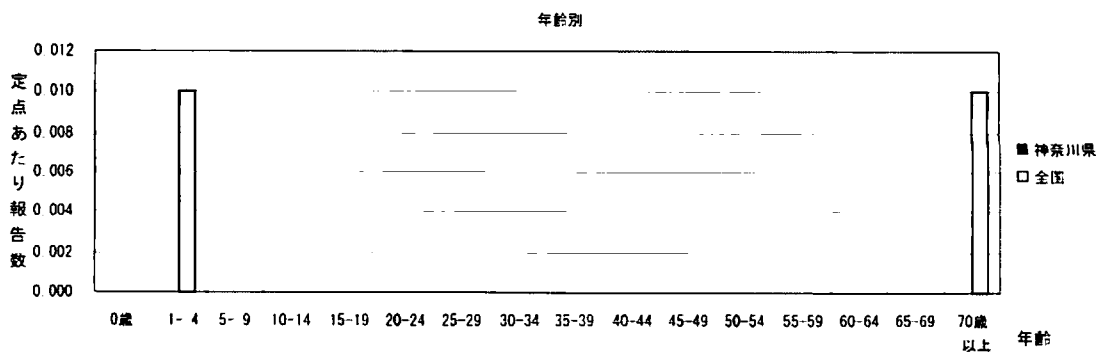
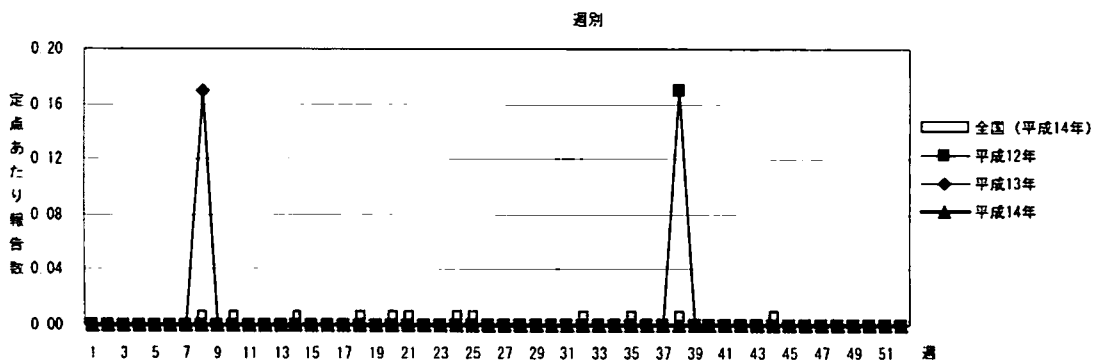
## 流行性角結膜炎

平成 14 年は全国と同様低調に推移し、年齢でも 20 歳から 30 歳代に集中していた。



## 急性脳炎（日本脳炎を除く）

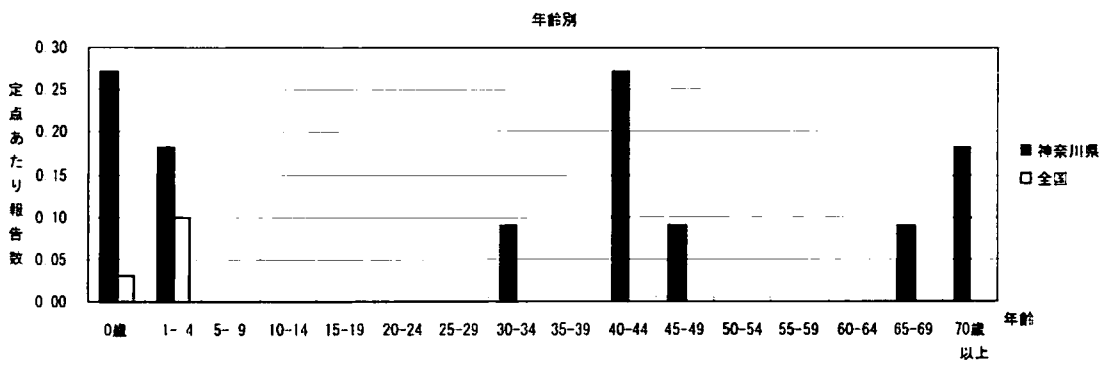
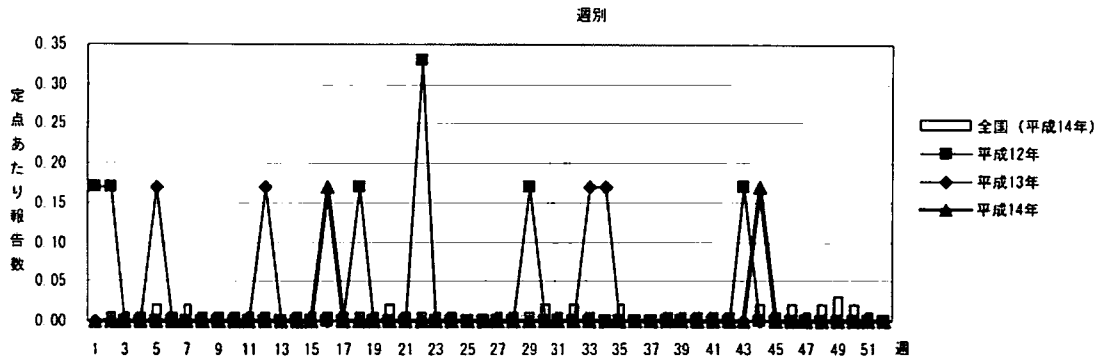
平成 14 年は県域での発生報告はなかった。





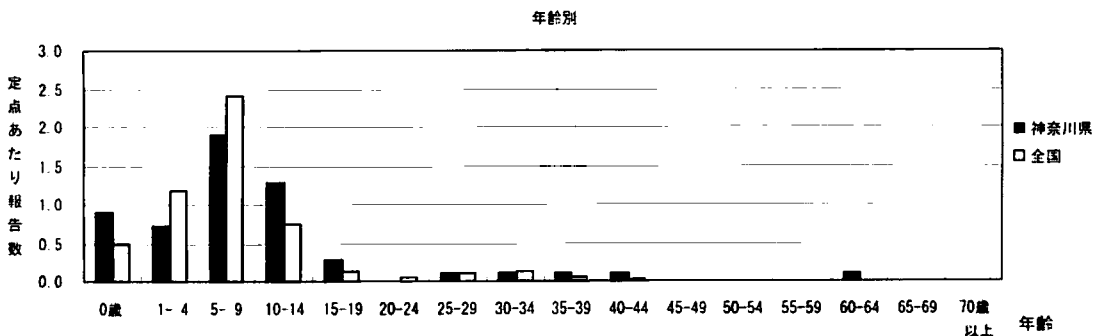
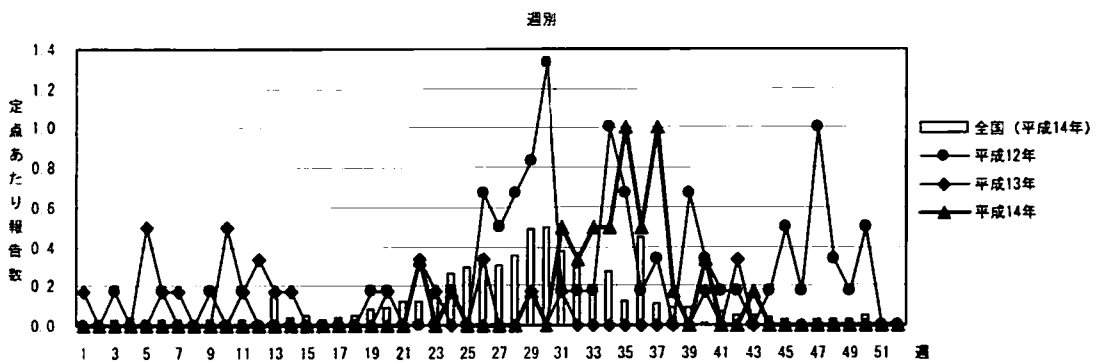
### 細菌性髄膜炎（真菌性を含む）

平成14年は16週と44週に報告がみられた。



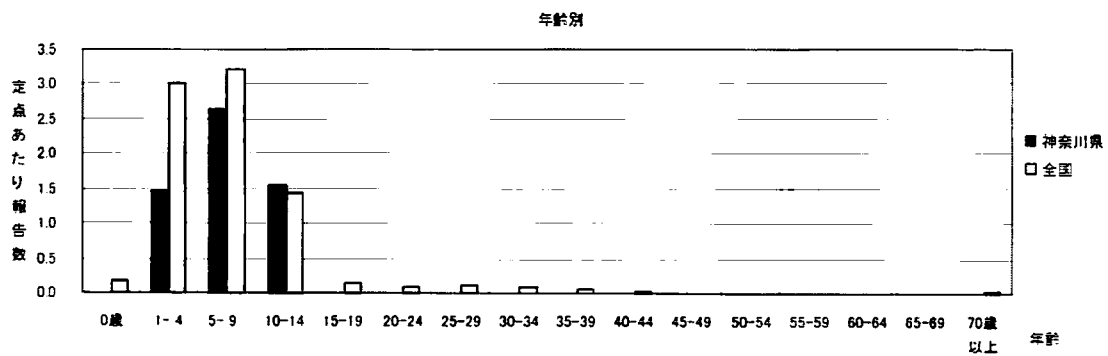
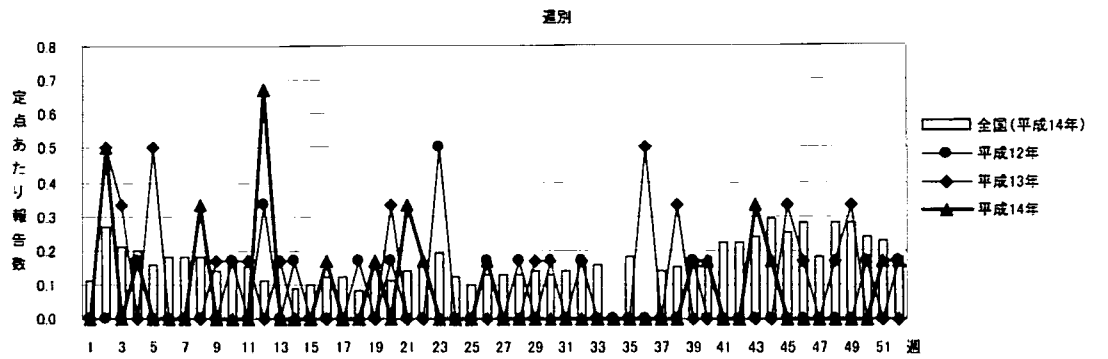
### 無菌性髄膜炎

平成14年は36週前後に報告がみられたが、その他には目立った報告はなかった。



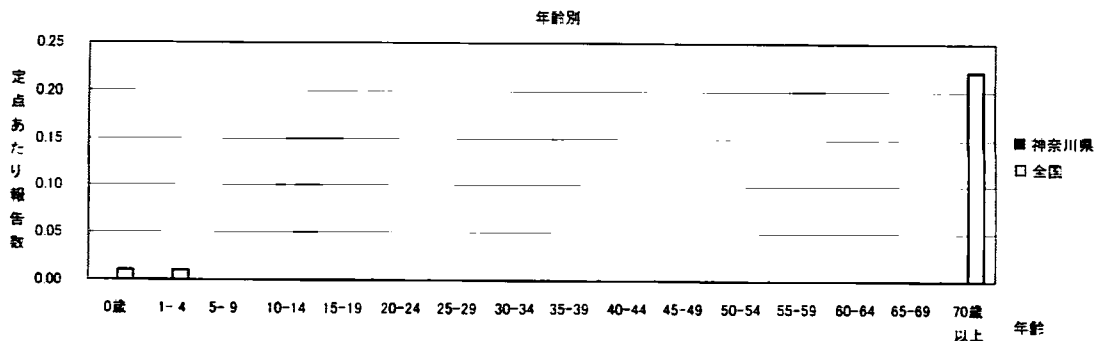
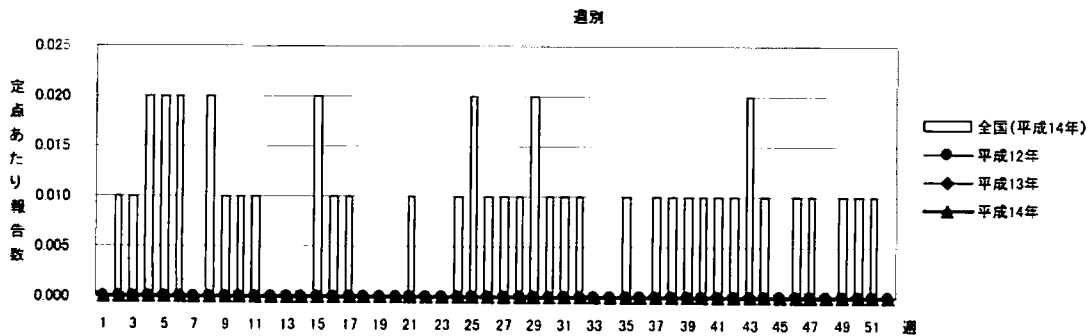
## マイコプラズマ肺炎

例年、秋から初冬に報告が増加する傾向がうかがわれ、年齢では全国同様若年層に多くみられた。



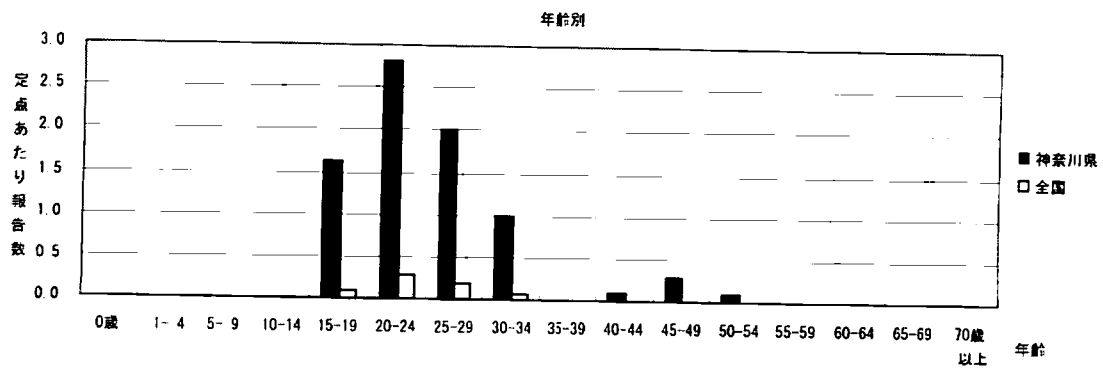
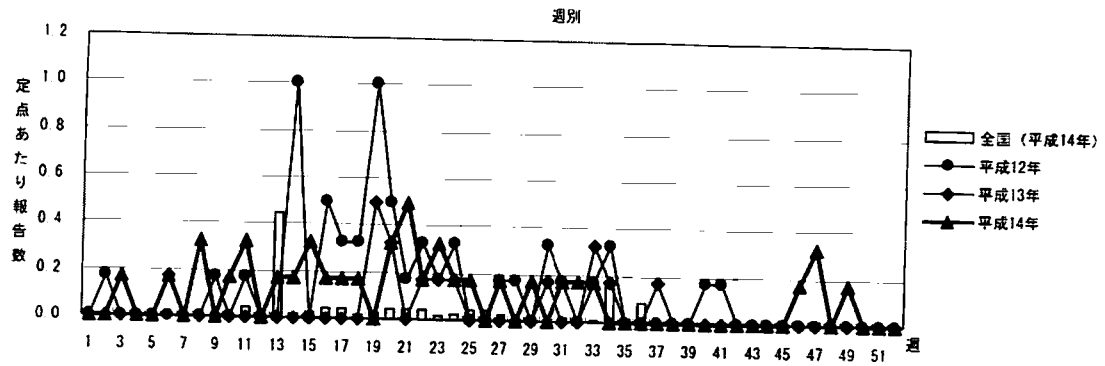
## クラミジア肺炎（オウム病を除く）

平成14年は県域での報告はなかった。



# 成人麻疹

年間を通じ散発的に報告がみられ、年齢は20歳代に集中する傾向がみられた。



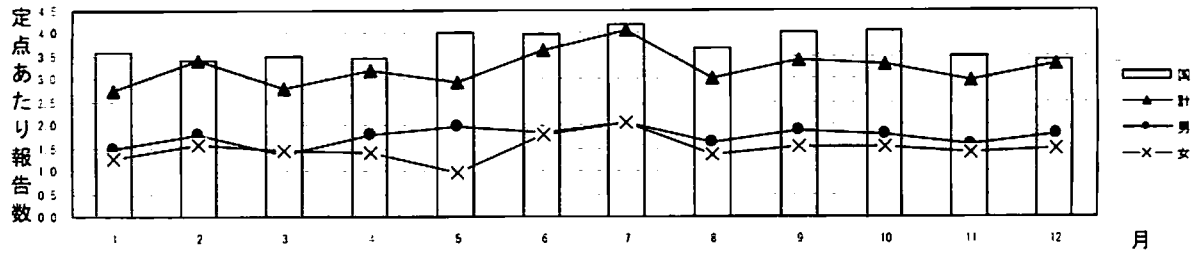
## 月報対象疾患

(横浜市・川崎市のデータを除く)

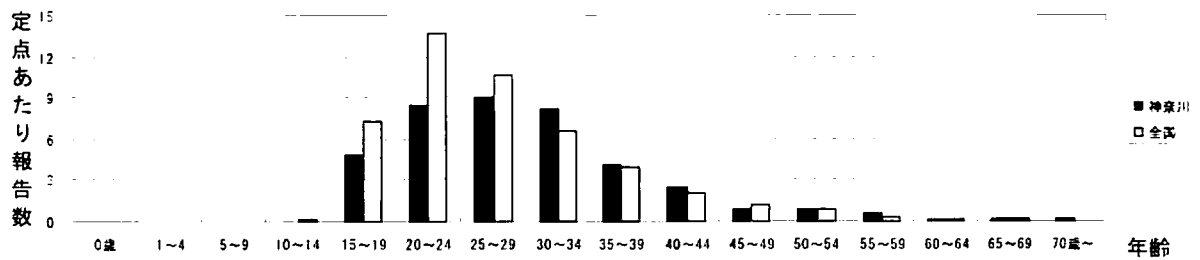
### 性器クラミジア

6月から7月に報告数のピークが見られた。年齢別では青年層に多く女性の若年化傾向がうかがわれた。

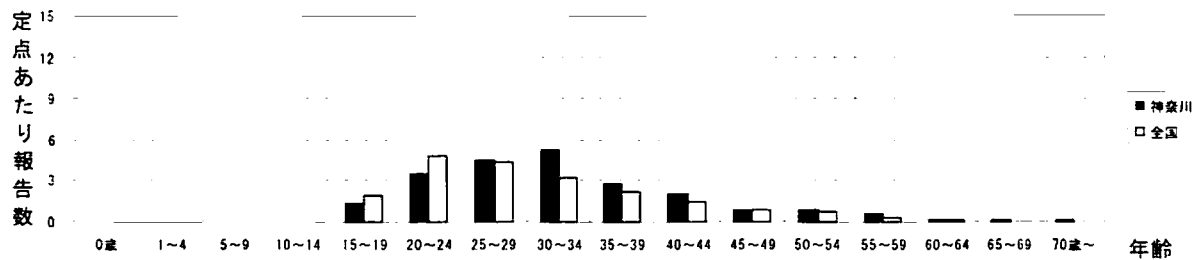
月別



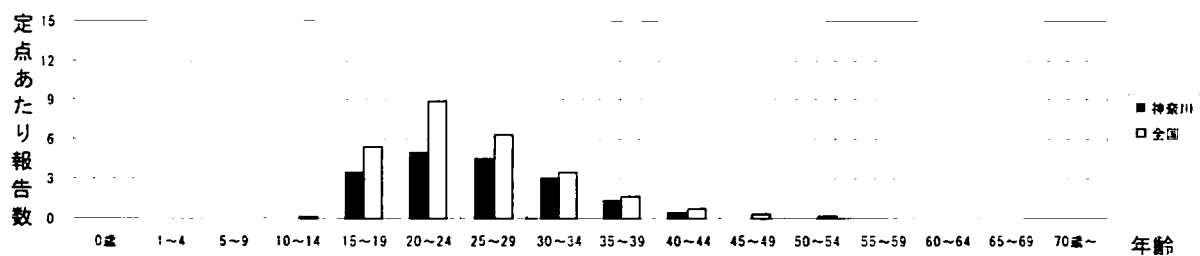
年齢別(男女合計)



年齢別(男)

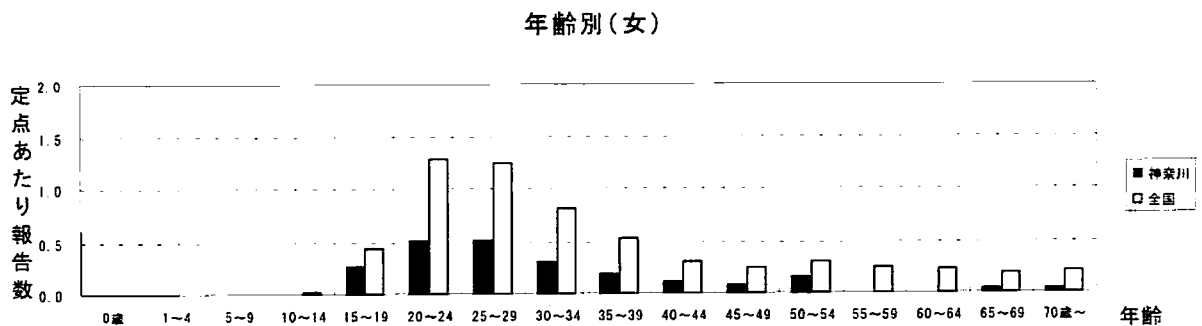
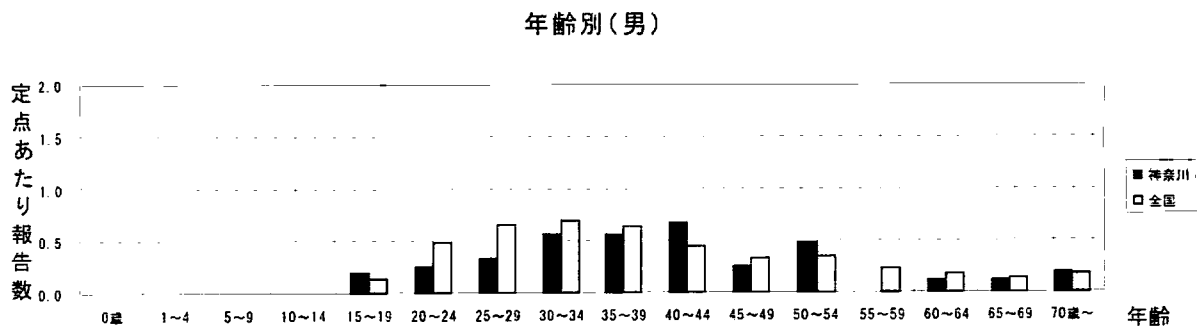
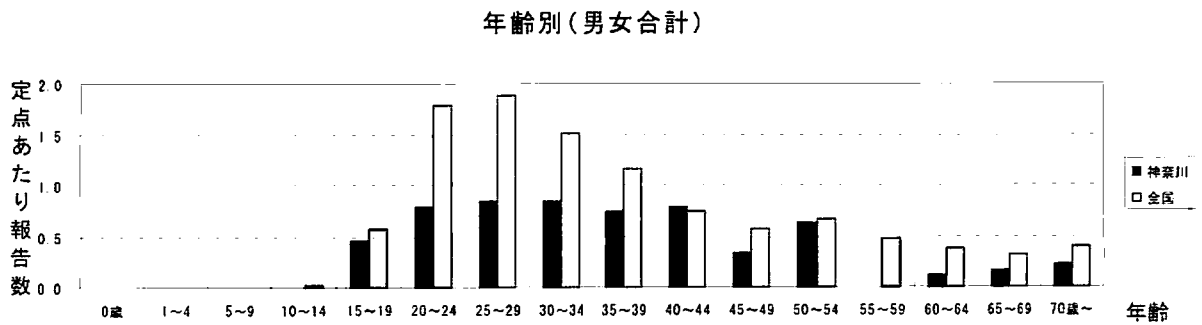
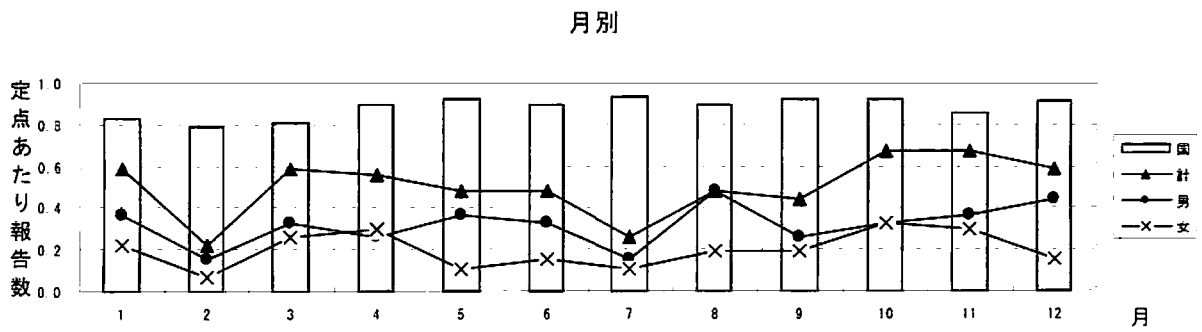


年齢別(女)



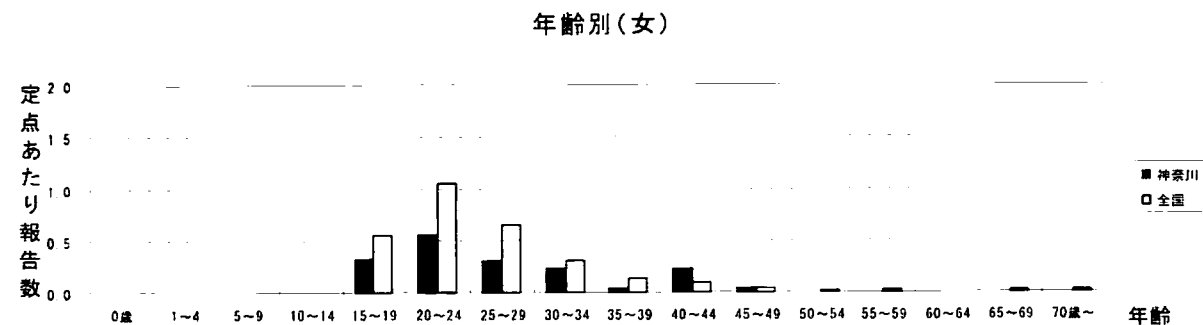
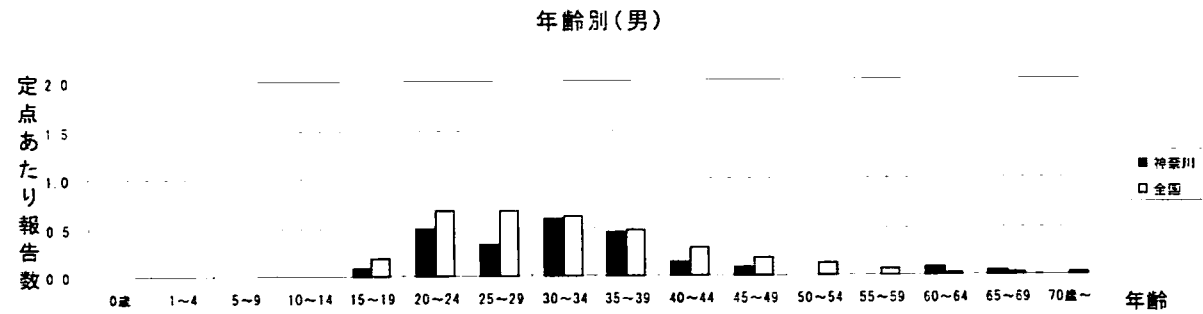
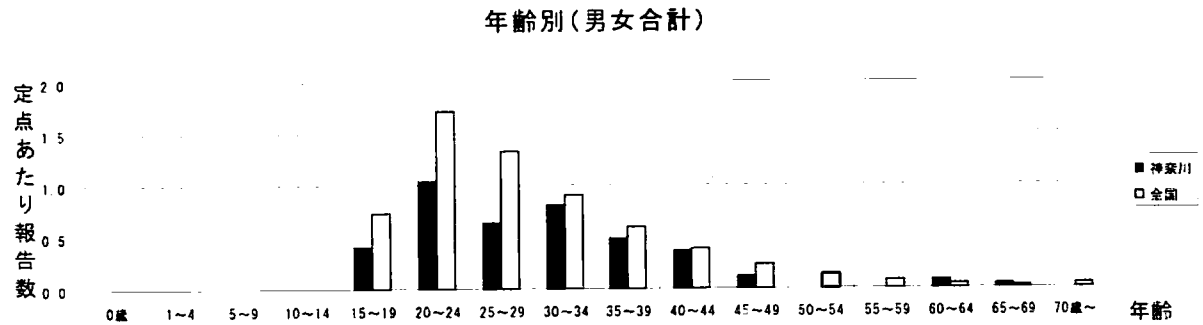
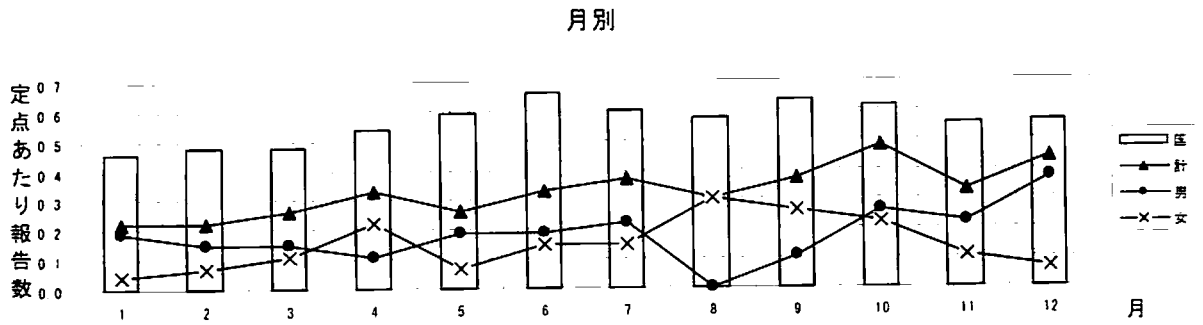
## 性器ヘルペス

2月と7月に報告数の減少が見られたものの、10月から11月にピークが認められた。男女別で大きな差は見られなかったが、年齢別では女性の若年化傾向が見られた。



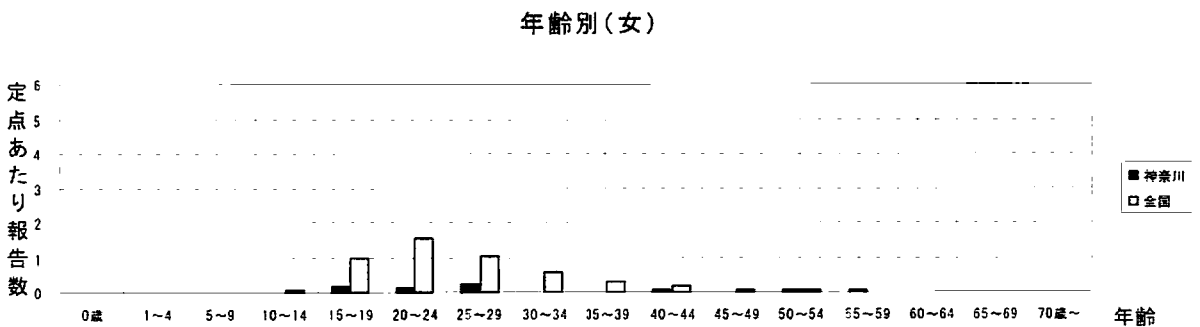
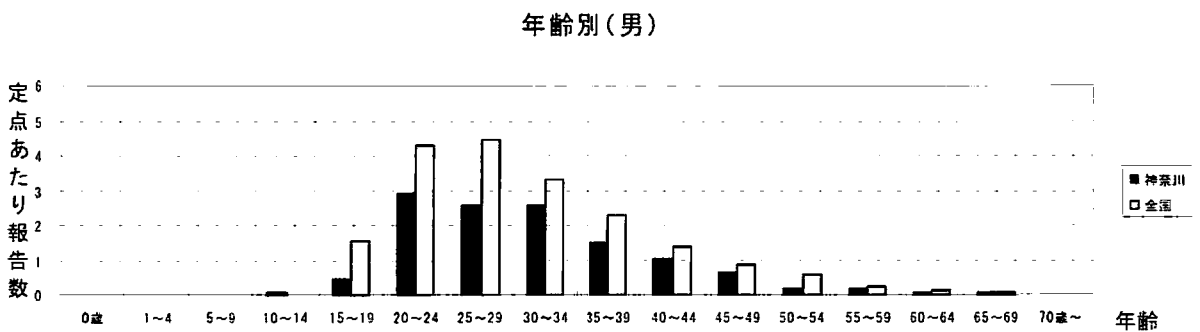
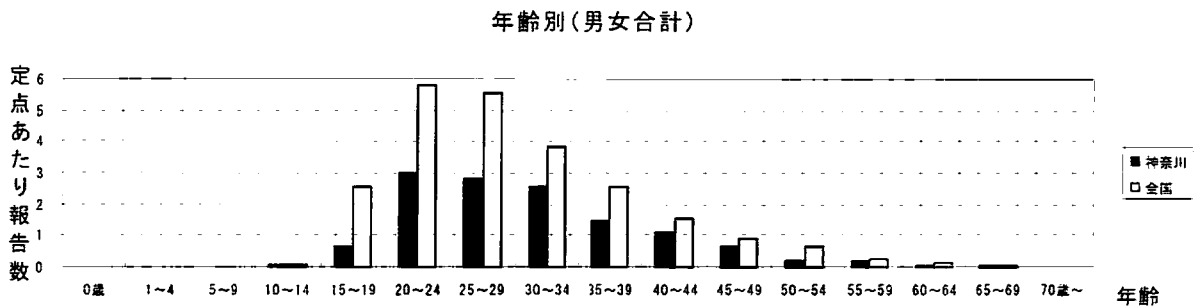
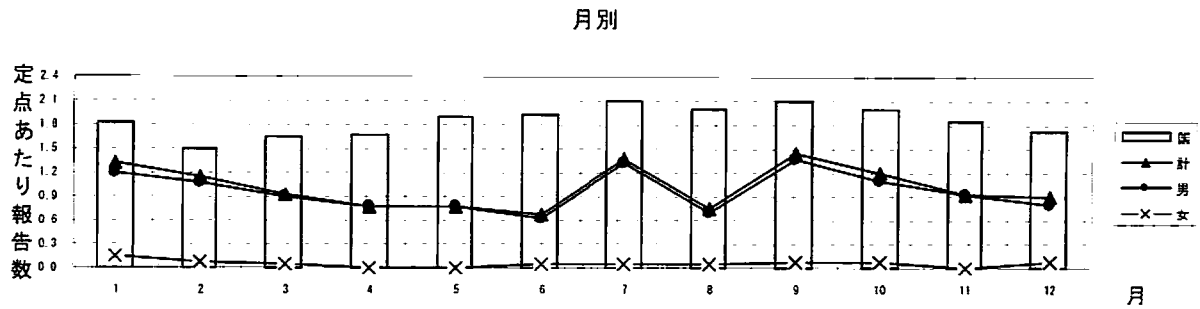
## 尖形コンジローム

年間を通じて報告数に大きな差は見られないが、年齢別では女性の若年化が進み報告数が多く見られている。



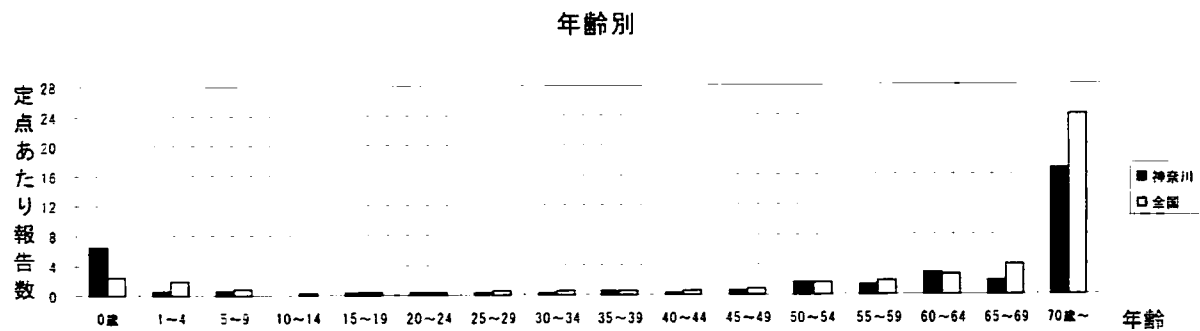
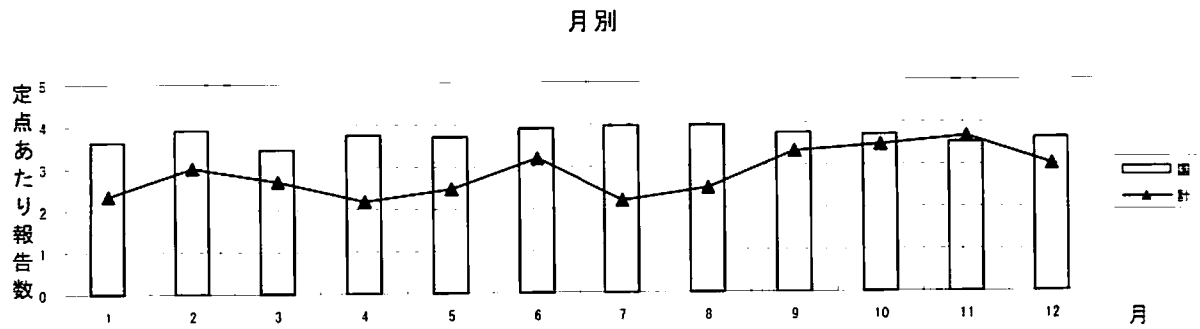
## 淋菌感染症

月別の報告数には目立った差は見られず、ほぼ通年患者発生が報告されている。男女別では、例年同様圧倒的に男性の報告が多く女性は非常に少ない傾向を示した。



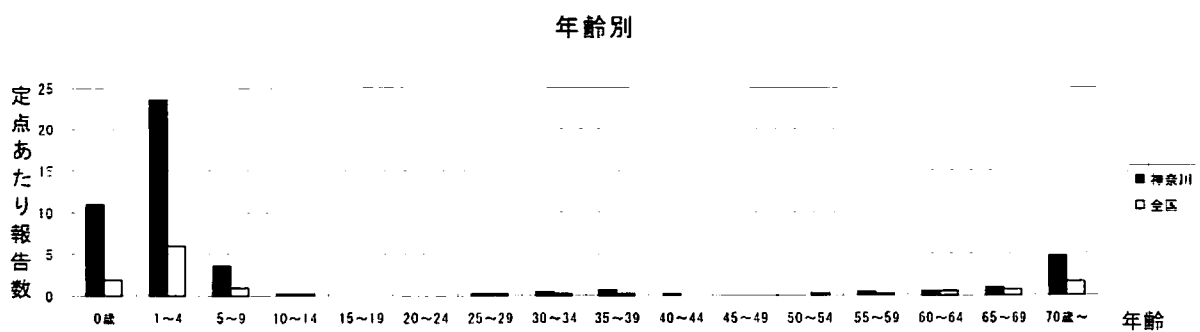
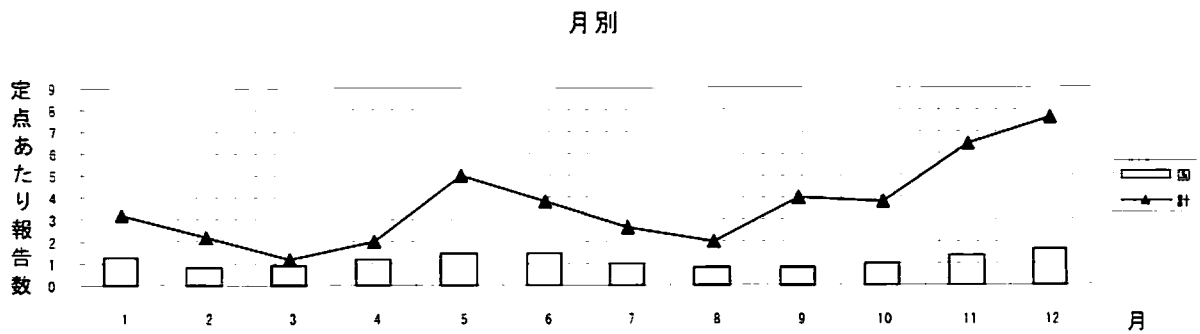
### メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

平成13年と同様、通年報告が見られた。年齢別でも幼児と高齢者の報告が顕著であった。



### ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

報告は5月、11月から12月にピークを示し、年齢別では乳幼児に多く見られた。

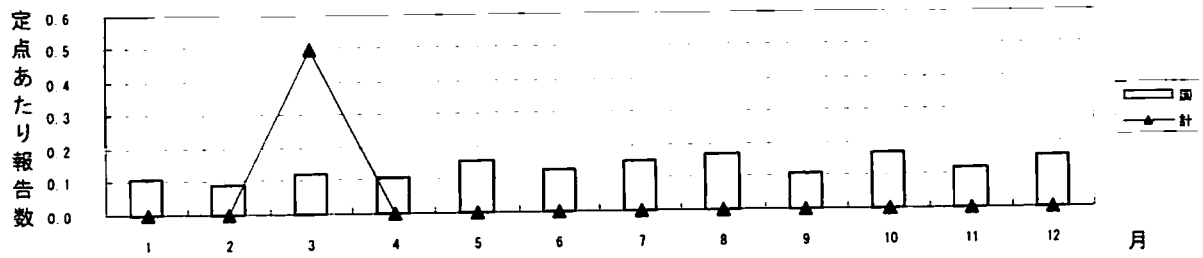




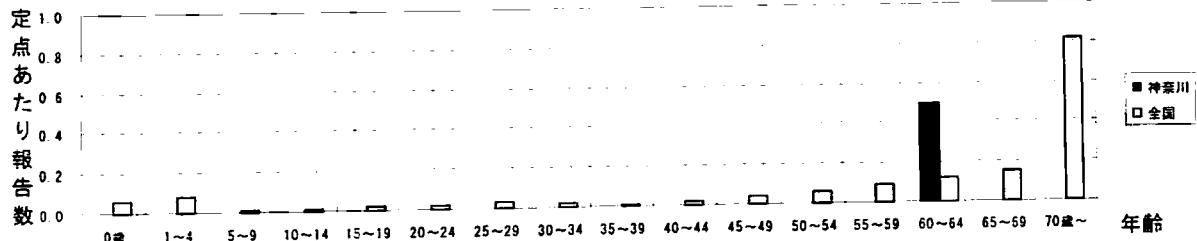
薬剤耐性緑膿菌感染症

3月のみ報告が見られた。

月別



年齢別



## II 細菌性感染症

## II 細菌性感染症

### 1 腸チフス・パラチフス

#### (1) 神奈川県内（横浜・川崎市を除く）のチフス菌等のフェージ型別結果

神奈川県衛生研究所

平成14年1～12月の間に分離されたチフス菌等は1件で、内訳は腸チフス患者から分離されたチフス菌1件であった（表）。

腸チフスの発生地区と件数は、相模原市1件で、分離菌株のフェージ型はE1型であった。チフス菌は患者血液から分離され、患者は海外渡航歴、国内旅行歴あるいは特記するような喫食歴はなかった。

患者由来株は、CP、KM、TC、ABPC、NORおよびST合剤の6薬剤に感受性、SMに低感受性であった。

（鈴木理恵子）

表 分離されたチフス菌等のフェージ型別結果（平成14年）

番号	発生地区	月日	性別	年齢	分離菌株	フェージ型	備考
1	相模原	3.12	女	41	チフス菌	E1	渡航歴なし

#### (2) 横浜市の腸チフス菌等のフェージ型別結果

横浜市衛生研究所

平成14年1月～12月の間に横浜市内で分離されたチフス菌は2件で、パラチフスA菌は2件分離された。チフス菌、パラチフスA菌各1件は海外旅行歴のある患者で、旅行先はインドネシア、インドであった。菌はいずれも静脈血から検出された。他にチフス菌、パラチフスA菌各1件ずつ

で、海外旅行歴のない保菌者の国内発生事例があった。チフス菌は50年前腸チフスの既往歴がある保菌者の胆汁より検出された。また、パラチフスA菌は胆のう胆石がある保菌者の便より検出された。情報とチフス菌のフェージ型別内訳は表に示したとおりである。

（松本裕子、山田三紀子、武藤哲典）

表 チフス菌等のフェージ型別結果（平成14年）

番号	診定年月	性別	年齢	菌種	フェージ型	備考
1	14.3	男	32	チフス菌	UVS1	インドネシア
2	14.6	女	55	パラチフスA菌	UT	インド
3	14.7	女	87	パラチフスA菌	1	旅行歴無し、胆嚢胆石あり
4	14.8	男	93	チフス菌	E2	旅行歴無し、50年前腸チフスの既往あり

#### (3) 川崎市のチフス菌等のフェージ型別結果

川崎市衛生研究所

平成14年1～12月に川崎市内で分離されたの

は腸チフス2件であり、詳細は表に示したとおりである。

（小嶋 由香）

表 チフス菌等のフェージ型別結果

番号	分離月日	性別	年齢	菌種	フェージ型	備考
1	4.27	女	51	チフス菌	A	中国へ渡航
2	12.19	男	23	チフス菌	4	ネパールへ旅行

## 2 その他の感染症

### (1) 横浜市における海外渡航者下痢症からの病原菌分離状況（平成 14 年）

横浜市衛生研究所

昭和 54 年以来海外渡航者による腸管系病原菌の持ち込みを調査する目的で、市内在住の海外渡航者とその家族を対象とした病原菌検索を行っている。今回は、平成 14 年 1 月から 12 月までの 1 年間に取扱った検体 30 件のうち、2 回以上検査した者および家族を除く 29 件の病原菌検査結果を報告する。

#### 1. 検査方法

各種病原菌の分離・同定検査は前年と同じ検査方法で、大腸菌のエンテロトキシン検索は逆受身ラテックス凝集法および PCR 法で行った。なお腸管病原性大腸菌は、血清型のみでの検査である。

## 2. 結果および考察

29 件中 1 件 (3.4%) から *Campylobacter jejuni* が分離された。ベトナムへの旅行者で下痢を呈していた。今年はその他の病原菌は検出されなかった。

以上の成績は実際に海外から持込まれていると予想される病原菌の一部に過ぎないと思われる。海外渡航者によってもたらされる腸管病原菌の国内における下痢症の流行への影響を考慮し、今後も検査を続けていきたい。

（山田三紀子、武藤 哲典、北爪 晴恵）  
（鈴木 正樹、松本 裕子）

表 1 海外渡航者からの腸管系病原菌検出状況（平成 14 年）

被検者種別	下痢現症者	下痢申告者	健康者	合計
件 数	1	5	23	29
陽性者数	1	0	0	1
毒素原性大腸菌	0	0	0	0
組織侵入性大腸菌	0	0	0	0
腸管病原性大腸菌	0	0	0	0
コレラ菌	0	0	0	0
腸炎ビブリオ	0	0	0	0
NAGビブリオ	0	0	0	0
ビブリオ・ミミクス	0	0	0	0
赤 痢 菌	0	0	0	0
サルモネラ	0	0	0	0
カンピロバクター	1	0	0	1
フレジオモナス	0	0	0	0
エロモナス	0	0	0	0

(2) 散発下痢症からの病原菌分離状況について

神奈川県衛生研究所

神奈川県における感染症発生動向調査の一環として、県内小児科医院一般検査定点の外来患者を対象に、感染性下痢症が疑われる患者の便材料について腸管系病原菌の検索を行った。平成14年1～12月の間に実施した73件の直接培養法での検索結果を表に示した。

腸炎起炎菌として推定し得た症例および不確実ながらその疑いがある菌を検出した症例は、73症例中19症例(26.0%)であり、54症例(74.0%)は既知腸管系病原菌を検出できなかった。推定原因菌別の検出頻度は、腸管病原性大腸菌(EPEC)：

16症例、カンピロバクター・ジェジュニ：2症例、腸管出血性大腸菌(O157:H7 stx1,2)、サルモネラ(血清型Hvittingfoss)：各1症例であった。

検出菌に占めるEPECの割合は昨年に続き本年も顕著に高率(80.0%)であった。EPECの主な血清型はO1で4株、O18、O25、O86およびO128各々1株であった。また、これら分離株の志賀毒素(Stx)遺伝子保持について検索したところ、いずれの株もStx遺伝子は保持していなかった。EPECは病原性の試験方法が未だ確立されておらず、分離菌株に関する病原因子の検索が必要であると思われる。

(鈴木理恵子、沖津忠行)

表 散発下痢症における病原菌分離状況(平成14年)

推定原因菌	症例	(%)
腸管病原性大腸菌(EPEC)	16 <sup>ab</sup>	21.9
腸管出血性大腸菌(EHEC)	1 <sup>a</sup>	1.4
カンピロバクター・ジェジュニ	2 <sup>b</sup>	2.7
サルモネラ	1	1.4
不明	54	74.0

a, b: 同時検出各1例

### (3) 川崎市の下痢症患者からの腸管病原菌検出状況 (平成 14 年)

川崎市衛生研究所

川崎市内の開業医師依頼の下痢症患者を対象にして腸管系病原菌検査を実施しているが、今回は平成 14 年 1～12 月までの検査成績について報告する。

#### 1. 材料と検査方法

材料は、市内医療機関に Cary-Blair の輸送培地を配布し、医療機関を訪れた下痢症患者から大便を採取し、保健所を経由して搬入された検体について検査を行った。

検査方法は、既報と同様に行った。

#### 2. 結果及び考察

##### 1) 病原菌検出状況

病原菌検出状況は表 1 に示すとおり、検体数 634 件中腸管病原菌陽性数 99 件 (15.6%) であり、そのうちサルモネラ 15 件 (2.4%)、腸管病原性大腸菌 (EPEC) 9 件 (1.4%)、毒素原性大腸菌 1 件 (0.2%)、腸管出血性大腸菌 (EHEC) 1 件 (0.2%)、腸炎ビブリオ 2 件 (0.3%)、カンピロバクター・ジェジュニ 67 件 (10.6%)、エロモナス・ソブリア 2 件 (0.3%)、エロモナス・ヒドロフィラ 1 件 (0.2%)、プレシオモナス・シゲロイデス 2 件 (0.2%) の検出であり、検出病原菌のうちカンピロバクター・ジェジュニが 67.7% を占め、下痢症患者

の主要病原菌であった。同一患者から 2 菌種の病原菌が検出された事例は 2 事例みられた。

##### 2) 検出病原菌の血清型

検出病原菌の血清型は表 2 に示すとおりである。

サルモネラは 15 株分離され、5 血清型に型別された。S.Enteritidis が 7 株、S.Agona、S.Typhimurium が 3 株ずつ、S.Stanley、S.Senftenberg がそれぞれ 1 株ずつであった。EPEC は 6 血清型に型別され、O126 が 3 株、O86a、O128 が 2 株ずつ、O44、O111、O166 が 1 株ずつであった。EHEC は 1 株分離され、血清型は O148 であり、ST 単独産生株であった。EHEC は O157:H7 が 1 株であり、毒素型は、VT1、VT2 両毒素産生株であった。

腸炎ビブリオは 2 株分離され、血清型は O3:K6 であり、分離菌株の耐熱性溶血毒は陽性であった。

以上のように本市内の下痢症患者から腸管系病原菌が 15.6% 検出され、カンピロバクター・ジェジュニが 10.6% と最も多く検出された。また、腸炎ビブリオは 0.3% と例年より低い検出率となった。その他の食中毒菌も低率ながら分離されていることから今後も散発下痢症患者の原因菌追求のため検査を強化していく必要があると思われる。

(小嶋 由香、本間 幸子)  
(赤木 英則、小川 正之)

表1 散発下痢症患者からの病原菌検出状況（平成14年）

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
検体数	49	53	54	48	42	56	72	65	68	45	48	34	634
陽性数 (%)	5 (10.2)	4 (7.5)	4 (7.4)	8 (16.7)	5 (11.9)	12 (21.4)	18 (25.0)	13* (20.0)	14* (20.6)	7 (15.6)	5 (10.4)	4 (11.8)	99* (15.6)
サルモネラ					1	4	2	2	2	2		2	15( 2.4)
腸管病原性大腸菌	2	1			1		1	1	1*	1		1	9( 1.4)*
毒素原性大腸菌	1												1( 0.2)
腸管出血性大腸菌									1				1( 0.2)
腸炎ビブリオ							2						2( 0.3)
カンピロバクター・ジエネ	2	3	3	8	3	8	13	8*	9*	4	5	1	67(10.6)*
エントリス・ソフリア								1	1				2( 0.3)
エントリス・ヒトロフィ									1				1( 0.2)
フレジオモナス・シロデス			1					1*					2( 0.3)*

備考：\*印は、同一人から2菌種以上の病原菌が検出された事例（2事例）

表2 検出病原菌の血清型（平成14年）

病原菌	株数	菌種および血清型			
サルモネラ	15	S.Enteritidis(7)	S.Agona(3)	S.Typhimurium(3)	S.Stanley(1)
		S.Senftenberg(1)			
腸管病原性大腸菌	10	O126(3)	O86a(2)	O128(2)	O44(1) O166(1) O111(1)
毒素原性大腸菌	1	O148(1)(ST)			
腸管出血性大腸菌	1	O157:H7(1) (VT1+VT2)			
腸炎ビブリオ	2	O3:K6(2)			

(4) 横須賀市の散発下痢症からの腸管系病原菌  
検出状況

横須賀市衛生試験所

平成14年1月から14年12月の1年間に実施した市内各医療機関からの下痢・腹痛を主症状とする患者糞便及び菌株材料の腸管系病原菌検査の結果について報告する。

1. 材料と方法

材料は糞便材料70件、菌株材料123件の合計193件で、検査方法は定法により行った。

2. 結果

病原菌検出状況を表1に示す。検査した193件全ての内、陽性数は34件(17.6%)であった。陽性の内訳は、腸管病原性大腸菌(EPEC)が13株、次いで腸炎ビブリオが7株、腸管出血性大腸菌(EHEC) O157、毒素原性大腸菌(ETEC)が5株、エロモナス・ソブリアが3株、赤痢菌、コレラ菌 O139 (CT+) 及び EHEC O157 以外、カンピロバクターが各1株であった。

検出病原菌の血清型を表2に示す。赤痢菌は

*S.sonnei* が1株、コレラ菌は O139 が1株、EHEC は O157:H7 が5株、O26:H11 が1株、ETEC は O25:NM が2株、O6:H16 及び O6:HNT、O128:HUT が各1株、EPEC は O111:H21 が7株で、O26:H11 が2株、O26:NM、O86a:NM、O128:H2、O128:H12 が各1株であり、腸炎ビブリオは O3:K6 が2株、血清型別検査未実施が5株であった。

以上、本年は腸管系病原菌の陽性率(17.6%)が、昨年(25.0%)に比べ減少した。

本調査では EHEC (EPEC を含む) 血清型に該当する菌株材料の検査数(123件:全検査数の63.7%)が多いため EHEC の検出は多いが、本年は6株(昨年17株)と少なかった。

本年はインドへ旅行した23歳女性から、本市では初めてコレラ O139 (CT+) が検出されている他、赤痢菌や種々の食中毒原因菌も検出されており、輸入感染症を含めた散発下痢症の原因菌検査の充実を図っていく予定です。

( 山口 純子、天野 肇 )  
( 蛭田 徳昭、増山 亨 )

表1. 散発下痢症からの病原菌検出状況 (平成14年1月～14年12月)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
検体件数	3(0)	9(1)	5(0)	1(0)	8(2)	3(0)	36(0)*	29(3)	20(4)	22(2)	23(3)	34(8)	193†(23)*
陽性数 (%)	0 (0.0)	1(0) (11.1)	2(0) (40)	0 (0.0)	4(1) (50.0)	0 (0.0)	8(0)* (22.2)	6(0) (20.7)	3(0) (15.0)	3(1) (13.6)	4(0) (17.4)	3(0) (8.8)	34(2)* (17.6)
病原菌													
赤痢菌											1(0)		1(0)
コレラ菌 O139 (CT+)											1(1)		1(1)
腸管出血性大腸菌 O157							1(0)	2(0)				2(0)	5(0)
” O157 以外							1(0)						1(0)
毒素原性大腸菌					1(1)			1(0)	1(0)	1(0)	1(0)		5(1)
腸管病原性大腸菌		1(0)	2(0)		3(0)		1(0)		2(0)		3(0)	1(0)	13(0)
腸炎ビブリオ							5(0)*	2(0)					7(0)*
エロモナス・ソブリア							3(0)*						3(0)*
カンピロバクター・ジェジュニ/コリ								1(0)					1(0)

備考：† 印の内訳 (菌株123件、糞便70件)

\* 印は、同一人からの複数菌、複数血清型検出例 (3例)

( ) は海外渡航者由来



表2. 検出病原菌の血清型 (平成14年1月～14年12月)

病原菌	株数	菌種および血清型
赤痢菌	(1)	<i>S. sonnei</i> (1)
コレラ菌	(1)	O139 (1)
腸管出血性大腸菌 O157	(5)	O157:H7 (5)
" O157以外	(1)	O26:H11 (1)
毒素原性大腸菌	(5)	O6:H16 (1), O6:HNT (1), O25:NM (2), O128:HUT (1)
腸管病原性大腸菌	(13)	O26:H11 (2), O26:NM (1), O86a:NM (1), O111:H21 (7), O128:H2 (1) O128:H12 (1)
腸炎ピブリオ	(7)	O3:K6 (2), OKNT (5)

備考：( )は菌株数

NT：検査未実施

UT：市販既知血清に該当なし

(5) 相模原市内で分離された腸管出血性大腸菌 (平成14年)

相模原市衛生試験所

平成14年1月から12月までに相模原市内の医療機関及び当衛生試験所で分離された腸管出血性大腸菌について報告する。

腸管出血性大腸菌の分離事例は7事例であり、事例ごとのPFGEのパターンは一致せず、全て散発事例と推測された。検出数は11検体で、由来については、有症者便が9例、無症者便が1例、食品が1例であり、血清型については、食品を含む10検体がO157:H7、1検体はO121:H19であった。

腸管出血性大腸菌O157が分離された食品は、大規模調理施設から自主検査で持ち込まれた生の豚挽肉であり、保管されていた同一ロットの豚挽肉の検査をしたところ、O157陽性であった。挽肉加工業者は管外であったため、挽肉加工業者の調査を該当自治体に依頼したところ、ふき取り検査、及び参考品からは分離されなかった。また、調理施設に保管されていた食材及び検食22検体、施設のふきとり10検体及び従業員の検便を実施したところ、全て陰性であった。

調理施設では、調理の記録が保管されており、食材の加熱、取り扱いが適切に実施されていた。

そのため、調理品の汚染はなく、喫食者への感染にはつながらなかった。

(伊達 佳美、清水壽美子、田向 香織)

(6) バイオテロに伴う炭疽菌検査

平成13年9月11日の米国における同時多発テロ事件直後、炭疽菌を加工したいわゆる“白い粉”によるバイオテロが米国内で発生した。我が国でも“白い粉”によるバイオテロの発生が懸念され、厚生労働省は「炭疽菌等の汚染のおそれのある郵便物等の取扱いについて(平成13年10月18日付)」および「炭疽菌等の汚染のおそれのある場合の対応について(平成13年11月16日付)」の通知で、警察が扱う不審物“白い粉”の炭疽菌の検査は地方衛生研究所等で行うこととした。以下、神奈川県下の各衛生研究所で実施した炭疽菌等の汚染のおそれのある不審物に対する検査について報告する。

神奈川県衛生研究所

平成13年10月18日、神奈川県内で最初に不審物の“白い粉”が発見され、炭疽菌検査が依頼された。当初より24時間対応の緊急体制を敷き、顕微鏡による鏡検、PCR法による遺伝子検査および培養検査を実施した。12月以降は、リアルタ

イム PCR 機の導入を図り、より迅速な検査成績の提供を行うことで、炭疽菌の汚染や被害の拡大防止、県民の不安をいち早く取り除いた。

平成 14 年に 1 月から 12 月までに県警本部または警察署（8 カ所）から 8 件の依頼を受け、計 10 検体が持ち込まれた。これらの 10 検体について炭疽菌検査を実施した結果、すべて陰性であった。

（鈴木理恵子、沖津 忠行）

#### バイオテロに伴う炭疽菌検査について

川崎市衛生研究所

平成 14 年川崎市市内において“白い粉”による不審物の届出は 5 月に電車内での事例 1 件であり、昨年同様顕微鏡による鏡検は即対応し、その後 PCR 法による遺伝子検査および培養検査を実施した結果、陰性であった。

（岡田 京子）

### 3 河川等の環境調査

#### (1) 河川水腸管系病原菌調査

神奈川県衛生研究所

昭和 54 年度より行われてきたコレラ菌を対象とした河川水の定点調査は、コレラ菌の防疫処置に関する変更（昭和 63 年厚生省通知）にともない、平成元年より河川水腸管系病原菌調査として実施されている。本稿では平成 14 年 1 月から 12 月までの調査成績について報告する。

#### 1. 材料および方法

県内（政令三市所管区域を除く）の一級および二級河川の河口等の 10 調査定点において毎月 1 回定期的に採取した河川水について以下の腸管系病原菌の検索を行った。

検索対象菌種は、コレラ菌 O1、O139、チフス菌、パラチフス A 菌、赤痢菌、腸管出血性大腸菌の 2 類および 3 類感染症原因菌とサルモネラ、*Vibrio cholerae* non-O1、O139 とした。

各増菌培地に河川水 500ml を濾過したメンブ

ランフィルターを接種し培養した。また、赤痢菌の検索は少量の BPW (Buffered Peptone Water) でフィルターを洗浄し、その洗浄液を直接塗抹した。腸管出血性大腸菌 O157 は 37°C 8 時間増菌後、免疫磁気ビーズ法を用い分離を行った。各病原菌の検索方法の概要と調査項目（対象菌）ごとに使用した増菌および分離培地を表 1 に示した。分離培地上に発育した疑わしい集落は、各々の病原菌に応じた確認試験を行い、生化学的性状、血清学的性状および毒素産生性等確認を行い菌種および菌型を同定した。

#### 2. 結果および考察

河川水 120 検体からの病原菌分離状況を表 2 に示した。本調査期間中、2 類および 3 類感染症原因菌は分離されなかったが、コレラ毒素非産生コレラ菌 O1 が 1 検体（0.8%）より分離された。

*Vibrio cholerae* non-O1、O139 は 65 検体（54.1%）から分離され、調査期間中全定点から検出された。

チフス菌およびパラチフス A 菌以外のサルモネラは 26 検体（21.6%）から 28 株分離され、主な血清型は Typhimurium（4 株）、Enteritidis、Hadar および Montevideo（各々 2 株）であった（表 3）。

本年の調査では、防疫措置の対象となる菌種は分離されなかったが、年間を通して腸管病原菌による経常的な汚染が認められることから、河川水の衛生状態の的確な把握と監視を継続していく必要があると思われる。

（佐多 辰、鈴木理恵子）

表1 調査項目および使用培地

調査項目	増菌培地	分離培地
1. コレラ菌 O1,O139	アルカリ性ペプトン水	TCBS・PMT
2. <i>Vibrio cholerae</i> nonO1,O139		
3. チフス菌	セレナイト・シスチン	SS・DHL
4. パラチフスA菌		
5. <i>Salmonella</i>	ハーナ・テトラチオン酸塩基礎培地	SS・DHL
6. 腸管出血性大腸菌(O157)	Buffered Peptone Water (8 hr,IMS 法)	CT-SMAC
7. 赤痢菌	直接塗抹	SS・DHL

表2 腸管系病原菌検出状況 (平成14年)

検出菌	月												計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
コレラ菌 O1,O139	0	0	0	0	0	0	1*	0	0	0	0	0	0	1
チフス菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
パラチフス菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
赤痢菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
腸管出血性大腸菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
<i>Vibrio cholerae</i> nonO1,O139	3	4	2	4	1	4	9	7	10	10	8	4	65	
<i>Salmonella</i>	3	2	0	2	1	2	3	3	2	4	3	1	26	

\* : エルトール稲葉型、コレラ毒素非産生

表3 分離されたサルモネラの血清型

血清型	分離菌株数	血清型	分離菌株数
Braenderup	1	Muenster	1
Corvallis	1	Newport	1
Enteritidis	2	Saintpaul	1
Hadar	2	Seftenberg	1
Infantis	1	Tennessee	1
Istanbul	1	Typhimurium	4
Kentucky	1	O4 群	3
Larochelle	1	O8 群	1
Lexington	1	O18 群	1
Montevideo	2	O 群別不能	1
		計	28

## (2) 河川等の環境調査

### －腸管系病原菌検索－

横浜市衛生研究所

河川水の細菌学的定点観測は昭和53年より継続しており、現在は鶴見川水系が2定点、これ以外は各水系ともすべて1定点で計8定点において観測を行っている。検査対象菌はコレラ菌、コレラ菌 O1、O139 以外、腸炎ビブリオ、赤痢菌、チフス菌およびパラチフス菌を含むサルモネラである。今回は平成14年1月から12月までの検査成績について報告する。

#### 1. 材料および方法

上記8定点の河川水、臨港鶴見川橋定点の底泥について毎月1回検体採取を行い、菌検索は従来と同様の方法で行った。

#### 2. 結果および考察

##### (1) 河川水からの病原菌の検出状況

河川水からの病原菌の検出状況を表1に示した。赤痢菌、コレラ菌、チフス菌およびパラチフス菌は、今年はいずれの定点からも検出されなかった。

コレラ菌 O1、O139 以外は、延べ46定点(47.9%)で検出され、例年とほぼ同様の検出率であった。チフス、パラチフス菌以外のサルモネラは延べ13定点(13.5%)で10菌種が分離された。

(2) 定点別コレラ菌 O1、O139 以外の検出状況  
河川水および底泥中のコレラ菌 O1、O139 以外の検出状況を表2、3に示した。各河川とも前年同様年間を通じて各調査地点で検出されている。底泥中のコレラ菌 O1、O139 以外の菌数は、平成6年から同様に年間を通しては低い値を示していたが、本年は7月に高い値を示した。

##### (3) 定点別腸炎ビブリオの検出状況

表4に示したとおり、底泥中の腸炎ビブリオは年間を通して検出された。また、河川水からの腸炎ビブリオも23定点(24.0%)より検出された。しかし、2月と3月は河川水定点から検出されなかった。

##### (4) 定点別サルモネラ検出状況

河川水からのサルモネラの検出状況を表5に示した。チフス菌およびパラチフス菌以外のサルモネラは、本年は1、4、7、8、9、10および12月に検出された。検出されたサルモネラの血清型は表6に示した。O4群、O9群、O3,10群が多く検出され、特に S.Enteritidis (3株)、S.Orion (3株) が多く検出された。

河川の環境調査は、今後の問題として病原菌の分離だけでなく、患者からの病原菌分離状況等の情報と併せて流行菌型の予測、集団発生の予測、また患者および保菌者の追跡等の疫学的な解析が必要である。

( 武藤 哲典、松本 裕子、山田三紀子 )  
( 鈴木 正樹、北爪 晴恵 )

表1 河川水からの病原菌検出状況(定点数) (平成14年)

病原菌	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
赤痢菌		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
コレラ菌		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
コレラ菌 O1、O139 以外		4	4	1	5	3	6	4	8	7	0	4	0	46
腸炎ビブリオ		1	0	0	2	3	5	2	4	1	1	2	2	23
サルモネラ														
チフス菌		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
パラチフス菌		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他		2	0	0	1	0	0	2	2	2	3	0	1	13

表2 河川水中のコレラ菌 O1、O139 以外 (平成 14 年)

採取地点	月											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 臨港鶴見川橋	+	+	+	+	-	+	-	+	-	-	-	-
2. 川 向 橋	-	+	-	+	+	-	-	+	+	-	-	-
3. 水 道 橋	+	-	-	+	-	+	+	+	+	-	+	-
4. 清 水 橋	-	+	-	-	-	+	-	+	+	-	-	-
5. 小 泉 橋	+	-	-	-	-	+	-	+	+	-	+	-
6. 侍 従 橋	-	+	-	-	+	+	+	+	+	-	-	-
7. 鷹 匠 橋	+	-	-	+	+	+	+	+	+	-	+	-
8. 東 西 橋	-	-	-	+	-	-	+	+	+	-	+	-

表3 臨港鶴見川橋底泥中のコレラ菌 O1、O139 以外の MPN (平成 14 年)

採取地点	月											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
コレラ菌 O1、O139 以外	<0.2	<0.2	<0.2	2	<0.2	<0.2	6	0.2	2	<0.2	<0.2	<0.2

(個/100ml)

表4 河川水中および底泥中の腸炎ビブリオ (平成 14 年)

採取地点	月											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 臨港鶴見川橋	-(+)	-(+)	-(+)	-(+)	+(+)	+(+)	-(+)	+(+)	+(+)	-(+)	+(+)	+(+)
2. 川 向 橋	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	+
3. 水 道 橋	-	-	-	-	-	+	-	+	-	-	-	-
4. 清 水 橋	-	-	-	+	+	+	+	-	-	-	+	-
5. 小 泉 橋	-	-	-	+	+	+	-	-	-	+	-	-
6. 侍 従 橋	+	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	-
7. 鷹 匠 橋	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-
8. 東 西 橋	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

( ) 内は底泥中の腸炎ビブリオ

表5 河川水のサルモネラ（平成14年）

採取地点	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	1. 臨港鶴見川橋		+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2. 川向橋		-	-	-	+	-	-	-	+	-	+	-	-
3. 水道橋		-	-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	-
4. 清水橋		-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	+
5. 小泉橋		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6. 侍従橋		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7. 鷹匠橋		+	-	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-
8. 東西橋		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

表6 分離されたサルモネラの血清型（平成14年）

	血清型	分離菌株数
O4 群	Typhimurium	2
	Chester	1
	Saintpaul	1
O7 群	Infantis	1
	Thompson	1
O8 群	Hadar	2
O9 群	Enteritidis	3
	Berta	1
O3,10 群	Orion	3
O18	Cerro	1
計		16

### (3) 河川等の環境調査

#### —腸管系病原菌検索—

川崎市衛生研究所

本市では、昭和 53 年 5 月から河川等において、コレラ菌を中心に、赤痢菌、コレラ菌 O1 以外、腸炎ビブリオ、サルモネラ（腸・パラチフスを含む）、等の腸管系病原菌について定点観測を実施している。

また、平成 11 年からは、腸管出血性大腸菌検索も行っている。今回は平成 14 年の結果について報告する。

#### 1 定点及び検査方法

定点は、既報と同様に本市内の全域を把握する目的で、河川 13 ヶ所（2 月より 12 ヶ所）及び港湾 1 ヶ所を設定した。

検査方法は、既報と同様に行った。

#### 2 結果及び考察

##### (1) 病原菌検出状況

河川水及び海水からの病原菌検出状況は表 1 に示すとおり、総検体数 157 検体中、コレラ菌 O1 以外 35 検体（22.3%）、腸炎ビブリオ 25 検体（15.9%）、サルモネラは 40 検体（25.5%）より検出された。

赤痢菌、コレラ菌、腸チフス・パラチフス、腸管出血性大腸菌は検出されなかった。

##### (2) 定点別による病原菌検出状況

###### 1) コレラ菌 O1 以外

コレラ菌 O1 以外の検出状況は表 2 に示すとおり、河川水では 145 検体中 35 検体（24.1%）より検出された。また 12 定点より検出され、夏期に多く検出された。海水からは検出されなかった。

###### 2) 腸炎ビブリオ

腸炎ビブリオの検出状況は表 3 に示すとおり、河川水 145 検体中 17 検体（11.7%）、海水 12 検体中 8 検体（66.7%）より検出された。夏期に多く検出され、河川水では、河口付近より多く検

出された。

###### 3) サルモネラ

サルモネラの検出状況は表 4 に示すとおり、河川水 145 検体中 40 検体（27.6%）より検出された。海水からは検出されなかった。

##### (3) 検出病原菌の血清型

検出病原菌の血清型は表 5 に示すとおり、腸炎ビブリオは 26 株分離され、4 K 抗原型に型別されたが、型別不能株が 20 株（76.9%）で最も多く検出された。分離菌株の耐熱性溶血毒はすべて陰性であった。サルモネラは 49 株、22 血清型に型別され、*S. Infantis* 6 株（12.2%）、*S. Muenster* 5 株（10.2%）、*S. Saintpaul* 5 株（10.2%）が多く分離された。

河川水からはコレラ菌 O1 以外、サルモネラ、海水からは腸炎ビブリオが高率に検出され、これら腸管系病原菌の環境汚染が広がっていることを示していた。

（須藤 始代、植田 葉子）  
（岡田 京子、小川 正之）

表1 河川水等から分離した病原菌検出状況（平成14年1月～12月）

病原菌	月												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
赤痢菌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
コレラ菌 (CT +)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(CT -)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
コレラ菌 O1 以外	0	4	3	1	1	3	5	7	6	4	0	1	35 (22.3)
腸炎ビブリオ	1	1	1	0	3	3	3	3	3	3	3	1	25 (15.9)
サルモネラ													
腸チフス	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
パラチフス	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	2	1	1	6	5	4	2	3	4	3	7	2	40 (25.5)
腸管出血性大腸菌 O157	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
検体数	14	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	157

CT：コレラエンテロトキシン

( ) 内は%を表す

表2 定点別コレラ菌 O1 以外の検出状況（平成14年1月～12月）

定 点	月												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1 六 郷 橋 (多摩川)	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
2 末 吉 橋 (鶴見川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
河 3 一 本 橋 (矢上川)	-	-	-	-	-	-	+	-	-	+	-	+	3
4 渋 川 橋 (渋川)	-	+	-	-	-	+	+	+	+	-	-	-	5
5 上 家 内 橋 (二ヶ領用水)	-	+	+	-	-	-	+	+	+	-	-	-	5
6 井 田 橋 (江川)	-												0 35/145
川 7 上 野 川 橋 (矢上川)	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	1 (24.1)
8 美 里 橋 (有馬川)	-	+	-	-	-	-	-	+	+	+	-	-	4
9 新 平 瀬 橋 (平瀬川)	-	-	+	+	-	+	-	+	+	+	-	-	6
10 大 道 橋 (五反田川)	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	1
水 11 子ノ神社前の橋 (早野川)	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	1
12 宿 地 橋 (真福寺川)	-	-	-	-	-	+	+	+	-	-	-	-	3
13 仲 村 橋 (麻生川)	-	-	+	-	+	-	-	+	+	+	-	-	5
海 14 川崎港廃油処理場 岸 壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0 0/12

( ) 内は%を表す。



表3 定点別 腸炎ビブリオの検出状況 (平成14年1月～12月)

定 点	月												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1 六郷橋 (多摩川)	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	-	7
2 末吉橋 (鶴見川)	-	-	-	-	+	+	+	+	-	+	+	+	7
河 3 一本橋 (矢上川)	-	-	-	-	+	-	-	+	+	-	-	-	3
4 渋川橋 (渋川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
5 上家内橋 (二ヶ領用水)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
6 井田橋 (江川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0 17/145
川 7 上野川橋 (矢上川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0 (11.7)
8 美里橋 (有馬川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
9 新平瀬橋 (平瀬川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
10 大道橋 (五反田川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
水 11 子ノ神社前の橋 (早野川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
12 宿地橋 (真福寺川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
13 仲村橋 (麻生川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
海水 14 川崎港廃油処理場 岸壁	+	+	+	-	-	+	+	-	+	+	+	-	8 8/12(66.7)

( ) 内は%を表す。

表4 定点別 サルモネラの検出状況 (平成14年1月～12月)

定 点	月												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1 六郷橋 (多摩川)	-	-	-	+	+	+	-	+	+	+	-	-	6
2 末吉橋 (鶴見川)	-	+	-	+	+	+	-	-	+	+	+	+	8
河 3 一本橋 (矢上川)	-	-	+	+	-	+	+	-	-	+	+	-	6
4 渋川橋 (渋川)	-	-	-	+	+	-	-	-	+	-	-	-	3
5 上家内橋 (二ヶ領用水)	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	+	-	2
6 井田橋 (江川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0 40/145
川 7 上野川橋 (矢上川)	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	+	-	3 (27.6)
8 美里橋 (有馬川)	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	+	+	3
9 新平瀬橋 (平瀬川)	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	1
10 大道橋 (五反田川)	-	-	-	-	+	-	-	-	+	-	+	-	3
水 11 子ノ神社前の橋 (早野川)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
12 宿地橋 (真福寺川)	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	2
13 仲村橋 (麻生川)	+	-	-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	3
海水 14 川崎港廃油処理場 岸壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0 0/12

( ) 内は%を表す。

表5 検出病原菌の血清型（平成14年1月～12月）

病原菌	株数	血清型			
腸炎ビブリオ	26	K32 2 (7.7)	K46 2 (7.7)	K5 1 (3.8)	K38 1 (3.8)
	4 血清型	K UT 20 (76.9)			
サルモネラ	49 22 血清型	S. Infantis 6 (12.2) S. Muenster 5 (10.2) S. Saintpaul 5 (10.2)			
		S. Typhumirium 4 (8.2) S. Oranienburg 3 (6.1)			
		S. Agona 2 (4.1) S. Brandenburg 2 (4.1) S. Hadar 2 (4.1)			
		S. Haifa 2 (4.1) S. Heidelberg 2 (4.1) S. Newport 2 (4.1)			
		S. Paratyphi B 2 (4.1) S. Agona 1 (2.0) S. Kottbus 1 (2.0)			
		S. Krefeld 1 (2.0) S. Litchfield 1 (2.0) S. Mbandaka 1 (2.0)			
		S. Montevideo 1 (2.0) S. Nagoya 1 (2.0) S. Rissen 1 (2.0)			
		S. Senftenberg 1 (2.0) S. Weltevreden 1 (2.0) 検査中 2 (4.1)			

備考：（ ）は菌株数

#### (4) 河川水腸管系病原菌検索

横須賀市衛生試験所

平成14年1月から14年12月まで実施した河川水のコレラ菌、コレラ菌O1以外、ビブリオ・ミミカス、腸炎ビブリオ、赤痢菌、腸チフス菌、パラチフスA菌、その他のサルモネラ、腸管出血性大腸菌など、腸管系病原菌の検査結果について報告する。

##### 1. 定点と検査方法

調査定点は市内10河川10定点であり、採水は2月、4月、8月、11月の年4回実施した。また、検査は昨年と同様の方法により行った。

##### 2. 結果及び考察

###### (1) 河川水からの病原菌検出状況

河川水の病原菌検出状況は表1に示した。本年はコレラ菌O1以外が延べ24定点(60.0%)、エロモナス・ヒドロフィラ/ソプリアは30定点(75.0%)、ビブリオ・ミミカスは15定点(37.5%)、腸炎ビブリオは6定点(15.0%)、エルシニア・エンテロコリチカが3定点(7.5%)、プレジオモナス・シゲロイデスが2定点(5.0%)、カンピロバク

ター・ジェジュニ/コリは1定点(2.5%)から検出された。しかし、コレラ菌O1、赤痢菌、腸チフス菌、パラチフスA菌、その他のサルモネラ、腸管出血性大腸菌及びビブリオ・フルビアース/ファーニシイはいずれも検出されなかった。

###### (2) コレラ菌O1以外の検出状況

コレラ菌O1以外の検出状況を表2に示した。コレラ菌O1以外は8月には全ての定点から検出されるなど、本菌は定点別延べ件数において全ての定点で検出された。

###### (3) 定点別腸炎ビブリオの検出状況

腸炎ビブリオの検出状況は表3に示した。腸炎ビブリオは2月、4月、8月は1定点のみで、11月は3定点から検出された。

以上、今回の調査における河川水からの腸管系病原菌はコレラ菌O1以外をはじめ、腸炎ビブリオ、ビブリオ・ミミカス、エロモナス・ヒドロフィラ/ソプリア、プレジオモナス・シゲロイデス、カンピロバクター、エルシニア・エンテロコリチカと種々検出された。今後もこれら病原菌の定点観測については引続き実施していく予定です。

（山口 純子、天野 肇）  
（蛭田 徳昭、増山 亨）

表1 河川水から検出した病原菌（平成14年1月～14年12月）

病 原 菌	月				計 (%)
	2	4	8	11	
コレラ菌 (CT +)	0	0	0	0	0
コレラ菌 (CT -)	0	0	0	0	0
コレラ菌 O1 以外	5	4	10	5	24 (60.0)
腸炎ビブリオ	1	1	1	3	6 (15.0)
ビブリオ・ミミカス	0	1	6	8	15 (37.5)
ビブリオ・フルビアールス / ファーニシイ	0	0	0	0	0
エロモナス・ヒドロフィラ / ソブリア	8	8	8	6	30 (75.0)
プレジオモナス・シゲロイデス	0	0	2	0	2 ( 5.0)
赤痢菌	0	0	0	0	0
腸チフス菌	0	0	0	0	0
パラチフス A 菌	0	0	0	0	0
その他のサルモネラ	0	0	0	0	0
腸管出血性大腸菌 O157	0	0	0	0	0
腸管出血性大腸菌 O157 以外	0	0	0	0	0
カンピロバクター・ジェジュニ / コリ	0	0	0	1	1 ( 2.5)
エルシニア・エンテロコリチカ	1	2	0	0	3 ( 7.5)
検体数	10	10	10	10	40

表2 定点別コレラ菌 O 1 以外の検出状況（平成14年1月～14年12月）

定 点	月				計
	2	4	8	11	
鷹 取 川 (追 浜 橋)	-	-	+	-	1
平 作 川 (夫 婦 橋)	-	-	+	-	1
松 越 川 (竹川合流後)	+	+	+	-	3
野 比 川 (野 比 橋)	-	-	+	-	1
長 沢 川 (長 沢 橋)	+	-	+	+	3
津 久 井 川 (新津久井橋)	+	+	+	+	4
川 間 川 (新川間橋)	-	-	+	+	2
芦 名 川 (芦 名 橋)	+	+	+	+	4
前 田 川 (前田中橋)	+	+	+	+	4
関 根 川 (粒 石 橋)	-	-	+	-	1

表3 定点別腸炎ビブリオの検出状況（平成14年1月～14年12月）

定	点	月				計	
		2	4	8	11		
鷹	取	川(追浜橋)	+	-	-	+	2
平	作	川(夫婦橋)	-	+	-	+	2
松	越	川(竹川合流後)	-	-	+	+	2
野	比	川(野比橋)	-	-	-	-	0
長	沢	川(長沢橋)	-	-	-	-	0
津	久井	川(新津久井橋)	-	-	-	-	0
川	間	川(新川間橋)	-	-	-	-	0
芦	名	川(芦名橋)	-	-	-	-	0
前	田	川(前田中橋)	-	-	-	-	0
関	根	川(粒石橋)	-	-	-	-	0

### Ⅲ ウイルス性感染症

### Ⅲ ウイルス性感染症

#### 1 日本脳炎

##### (1) 日本脳炎感染源調査

神奈川県衛生研究所

近年におけるわが国の日本脳炎（以下JEと略）の発生は、西日本を中心に流行が見られる。JEウイルス（以下JEVと略）の侵淫度を追跡し流行予測を行うため、ブタのJEV抗体保有状況を調査した。

神奈川食肉センターに平成14年7月から9月までの期間に持ち込まれた生後5～8か月齢の県内産のブタ160頭を、各回20頭ずつ8回にわたって採血し、血中のJaGAr01株に対するHI抗体および2-ME感受性抗体をそれぞれ測定した。

その結果、HI抗体および2-ME感受性抗体は検出されなかった。県内での調査結果からJEV

の侵淫度は例年以下と思われた。

神奈川県では平成14年度も平成13年度と同様に、患者発生はなかった。

(佐藤 利明、今井 光信)

#### 2 インフルエンザ

##### (1) 神奈川県の発生状況

神奈川県衛生部保健予防課

インフルエンザについては、その実数をつかむことが困難なため、学校等における集団発生状況を参考とする。

平成14年12月から平成15年3月にかけて発生した集団かぜは、ウイルス分離状況から、A香港型とB型によるものと考えられた。

平成元年以降の集団かぜの発生に伴うウイルスの分離状況は、表1のとおりである。今期の集団かぜによる欠席者数は、1,115施設、19,024人となった。施設別の発生状況は、表2のとおりである。

表1 集団かぜ発生状況

区分 年度	発生年月日	終息年月日	発生施設数	学級閉鎖数	欠席者数	ウイルス型
元	元.11.13	2.3.12	2,168	5,138	52,483	A(H3N2) B
2	2.12.13	3.3.11	1,138	2,125	20,227	A(H3N2)
3	3.11.25	4.3.16	832	1,485	14,721	A(H1N1)
4	4.11.25	5.3.17	1,316	1,875	20,308	A(H3N2) B
5	5.11.24	6.3.17	336	444	4,792	A(H3N2)
6	6.11.10	7.3.16	990	1,272	14,424	A(H3N2) B
7	7.11.30	8.3.18	381	451	5,628	A(H1N1)
8	8.11.26	9.3.17	410	495	5,219	A(H3N2) B
9	9.12.3	10.3.19	1,794	3,293	38,782	A(H3N2)
10	10.11.6	11.3.18	1,938	2,949	33,370	A(H3N2) B
11	11.11.19	12.3.17	1,070	1,498	18,778	A(H1N1) A(H3N2)
12	12.12.12	13.3.19	143	144	1,535	A(H1N1) B
13	13.11.16	14.3.19	791	1,059	12,336	A(H1N1) A(H3N2)
14	14.12.13	15.3.17	1,115	1,430	19,024	A(H3N2) B

A(H1N1)は、Aソ連型 A(H3N2)は、A香港型 Bは、B型

表2 集団かぜ発生状況（平成14年）

	施設数	学級閉鎖数	欠席者数	学年閉鎖数	学校閉鎖数
保育園・幼稚園	42	41	789	9	3
小学校	840	1,122	13,440	102	0
中学校	216	246	4,508	71	1
その他	17	21	287	5	0
計	1,115	1,430	19,024	187	4

(2) 神奈川県域のインフルエンザの動向

神奈川県衛生研究所

平成14年度冬季における県域のインフルエンザ流行は、14年12月から15年3月にかけて起こった。感染症発生動向調査による患者報告数は、12月中（14年52週まで）はさほど多くなかったが、年が明けた15年2週以降に急増し、5週にピーク（定点あたり罹患数39.62人）をむかえた後、緩やかに減少していった。本シーズン（14年44週～15年17週）における罹患数累積は3万人を超えた。（図1）

感染症発生動向調査病原体定点で採取された155検体（急性脳症4例、熱性けいれん2例を含む）についてウイルス分離を実施した。シーズン初期にはA香港（H3）型が分離されていたが、15年4週以降にB型が分離されるようになると、A香港（H3）型の分離数は徐々に減少していった。分離ウイルスの内訳は、インフルエンザウイルスA香港（H3）型68株、同B型21株となり、他のウイルスでは、アデノウイルス1型1株、同4型1株が分離された。

横須賀市、相模原市および県域の各保健所管内初発集団かぜ（10集団44名）について、病原体検索を行った。12月に発生した2集団（9名）は、インフルエンザウイルスA香港（H3）型に起因しており、1月に発生した8集団（35名）のうち、5集団は同じくA香港（H3）型、3集団はB型に起因していた。また、A香港（H3）型と同時に単純ヘルペスウイルス1型も分離された患者が1名いた。

インフルエンザウイルス分離株のHI試験によ

る抗原性は、A香港（H3）型はワクチン株のA/パナマ/2007/99(H3N2)類似株が多く存在したが、標準抗血清との交差反応性が低い株（HI価にして8倍差）もわずかに存在した。B型はワクチン株のB/山東/7/97（ビクトリア系統株）類似株であった。

以上のように、平成14年度の神奈川県域におけるインフルエンザの流行は、ピーク時の患者数が多かったことおよび流行の立ち上がりが早くゆっくりと終息に向かったことから、比較的大きな流行になったと思われた。インフルエンザウイルス分離数の内訳比率はA香港（H3）型：B型＝3：1で、全国の報告数（内訳比率2：1）に比べてA香港（H3）型の比率が高く、県域においてはA香港（H3）型がより優位に流行していたと思われた。

（渡邊 寿美、斎藤 隆行、今井 光信）

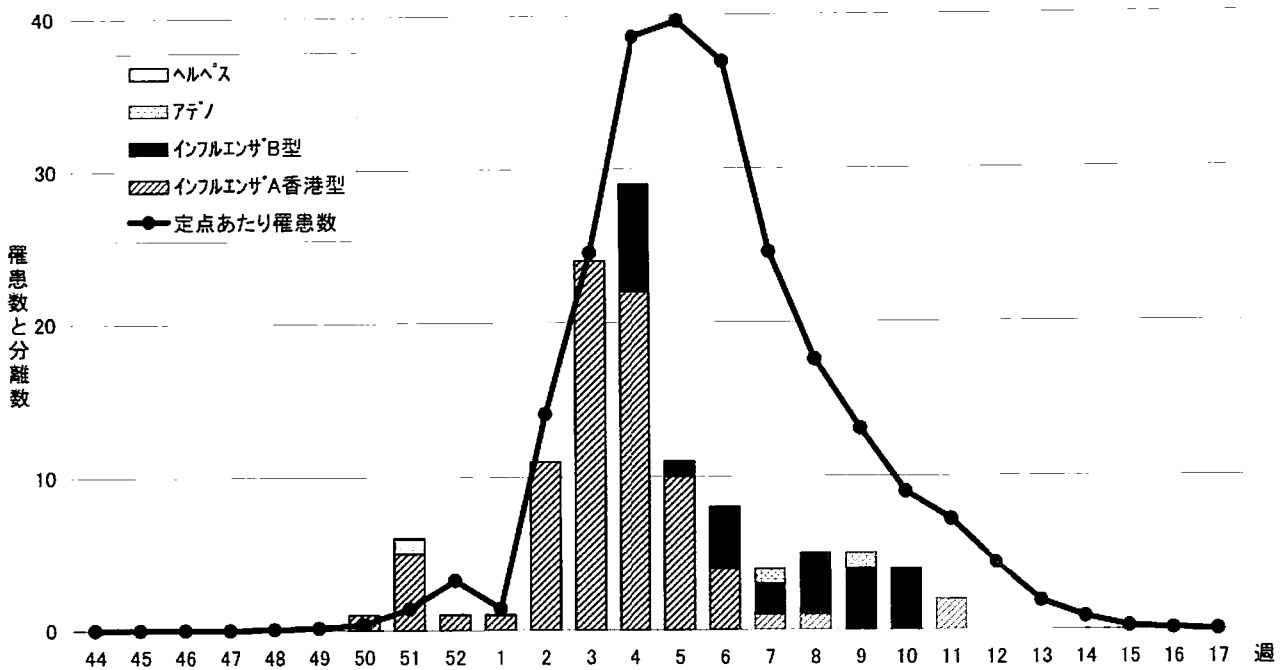
(3) 横浜市のインフルエンザの動向

横浜市衛生研究所

横浜市結核・感染症発生動向調査による平成14年10月から平成15年4月までのインフルエンザ様疾患患者数は28,957人と昨シーズン同期間における患者数13,451人の約2倍であり、過去10年間で最も大きな規模の患者発生であった。定点あたり患者数は12月下旬から増えはじめ、1月（第5週）に41.7人とピークとなり、その後減少した（図1）。

集団かぜの初発は平成15年1月14日に港北区の中学校から報告され、終息までの発生数は50施設201学級であった。集団かぜ発生の届出の

図1 インフルエンザ様患者の定点あたり罹患数とウイルス分離数



うち、検査依頼のあった13集団、48人についてウイルス学的検査を行なった結果、3集団からAH3型ウイルスが分離またはウイルス遺伝子が検出され、1集団は血清抗体検査からAH3型ウイルスに対する有意な抗体上昇が認められた。また、6集団からはB型ウイルスが分離され、3集団はAH3型ウイルスとB型ウイルスが分離または遺伝子が検出された。

定点ウイルス調査においては平成14年11月から平成15年4月までの6カ月間に採取した咽頭ぬぐい液312検体よりAH3型65株、B型54株を分離した。また、RT-PCRによる遺伝子検索では分離以外にAH3型6件、B型ウイルス21株で合計146株が分離または検出され、ウイルス型の割合はAH3型48.6%、B型51.4%であった。なお、この中には、AH3型のウイルスが分離されPCRではB型が検出された2例、B型のウイルスが分離されPCRではAH3型が検出された1例が含まれていた。このうちAH3型ウイルスについては平成14年12月第49週に金沢区の定点検体からはじめてウイルス遺伝子が検出され、第3週以降2月第12週まで分離された。B型ウイルスについては平成15年1月第3週に保土ヶ谷区の定点検体から分離され、3月第11週をピークと

して第16週まで毎週分離された(図2)。

分離株についてHA抗原の性状を調べたところ、AH3型ウイルス76株の抗原性状はA/Panama/2007/99(ワクチン株)に類似していた(表1)。一方、B型ウイルス67株のうち64株の抗原性状はワクチン株であるB/Victoria/2/87系統(以下Victoria系統)のB/Shandong/07/97やB/鹿児島/11/2002に類似していたB/Shandong/07/97に反応しない3株はB/山形/16/88系統(以下山形系統)のウイルスで、B/広島/23/2001やB/Johannesburg/5/99に反応したが、その抗原性状はHI価でそれぞれ4~8倍異なっていた(表2)。

遺伝子系統樹解析では、今シーズンのAH3型ウイルスはA/Panama/2007/99より多くのアミノ酸変異がみられ、進化が進んでいた。また、B

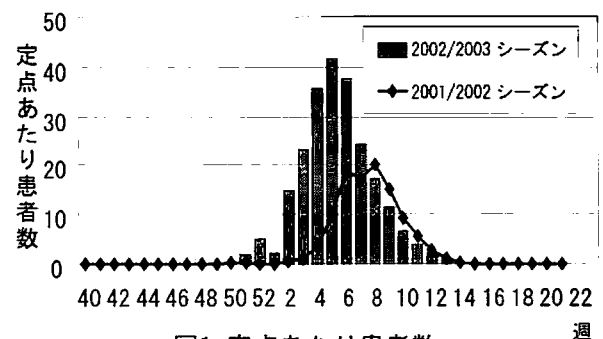


図1 定点あたり患者数



型ウイルスは2種類の進化の枝が異なる Victoria 系統と、昨年まで主流であった株とは異なる山形系統のウイルスが混在していた (図 3, 図 4)。

以上のように横浜市における 2002/2003 シーズンにおけるインフルエンザの流行は中規模なも

のであった。主流となったのは AH3 型ウイルスと Victoria 系統の B 型ウイルスの混合流行であったが、山形系統のウイルスも分離された。

(川上 千春, 宗村 徹也, 七種美和子 )  
(野口 有三, 藤井 菊茂, 鳥羽 和憲 )

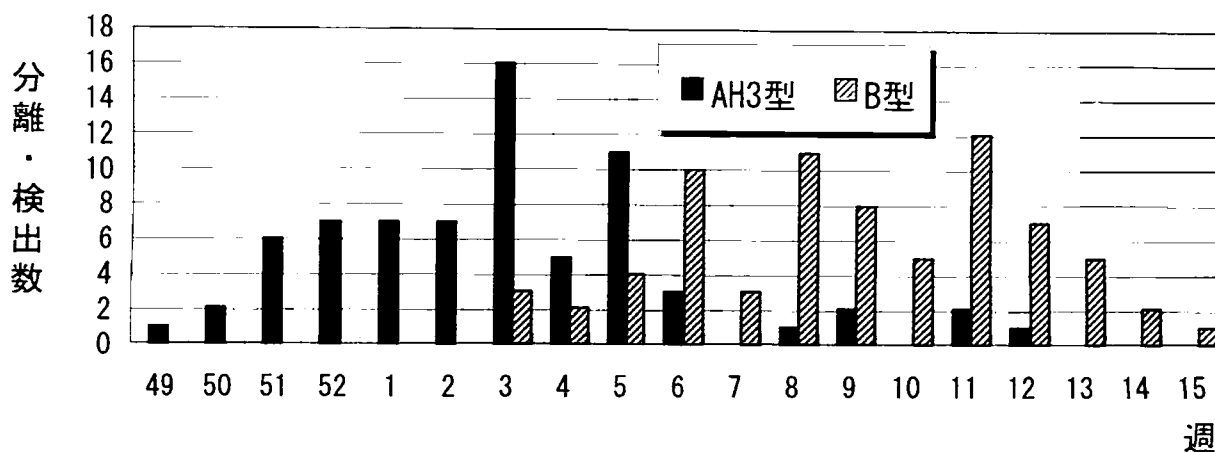


図 2 ウイルス分離・検出状況

表 1 AH3 型ウイルスの抗原性状

抗 原	フェレットまたはマウスで免疫した抗血清			
	A/Panama/2007/99*	A/横浜/96/2000	A/横浜/111/2000	A/横浜/25/2002
	(640)	(640)	(640)	(320)
A/横浜/95/2002	640	160	160	160
A/横浜/25/2003	640	320	160	320
A/横浜/60/2003	320	160	320	160
A/横浜/59/2003	40	80	320	80
A/横浜/62/2003	80	160	160	160

\* 2002/2003 シーズンワクチン株 ( )内は免疫抗原と同じウイルスを用いて測定した HI 価

表 2 B 型ウイルスの抗原性状

抗原	フェレットまたはマウスで免疫した抗血清				
	B/Shandong/07/97*	B/鹿児島/11/2002	B/山梨/166/98	B/Johannesburg/5/99	B/広島/23/2001
	(40)	(5120)	(1280)	(640)	(320)
B/横浜/1/2003	80	1280	< 10	< 10	< 10
B/横浜/34/2003	40	160	< 10	< 10	< 10
B/横浜/2/2003	20	5120	< 10	< 10	< 10
B/横浜/38/2003	10	2560	< 10	< 10	< 10
B/横浜/48/2003	< 10	< 10	80	160	40
B/横浜/62/2003	< 10	< 10	80	80	40

\* 2002/2003 シーズンワクチン株 ( )内は免疫抗原と同じウイルスを用いて測定した HI 価

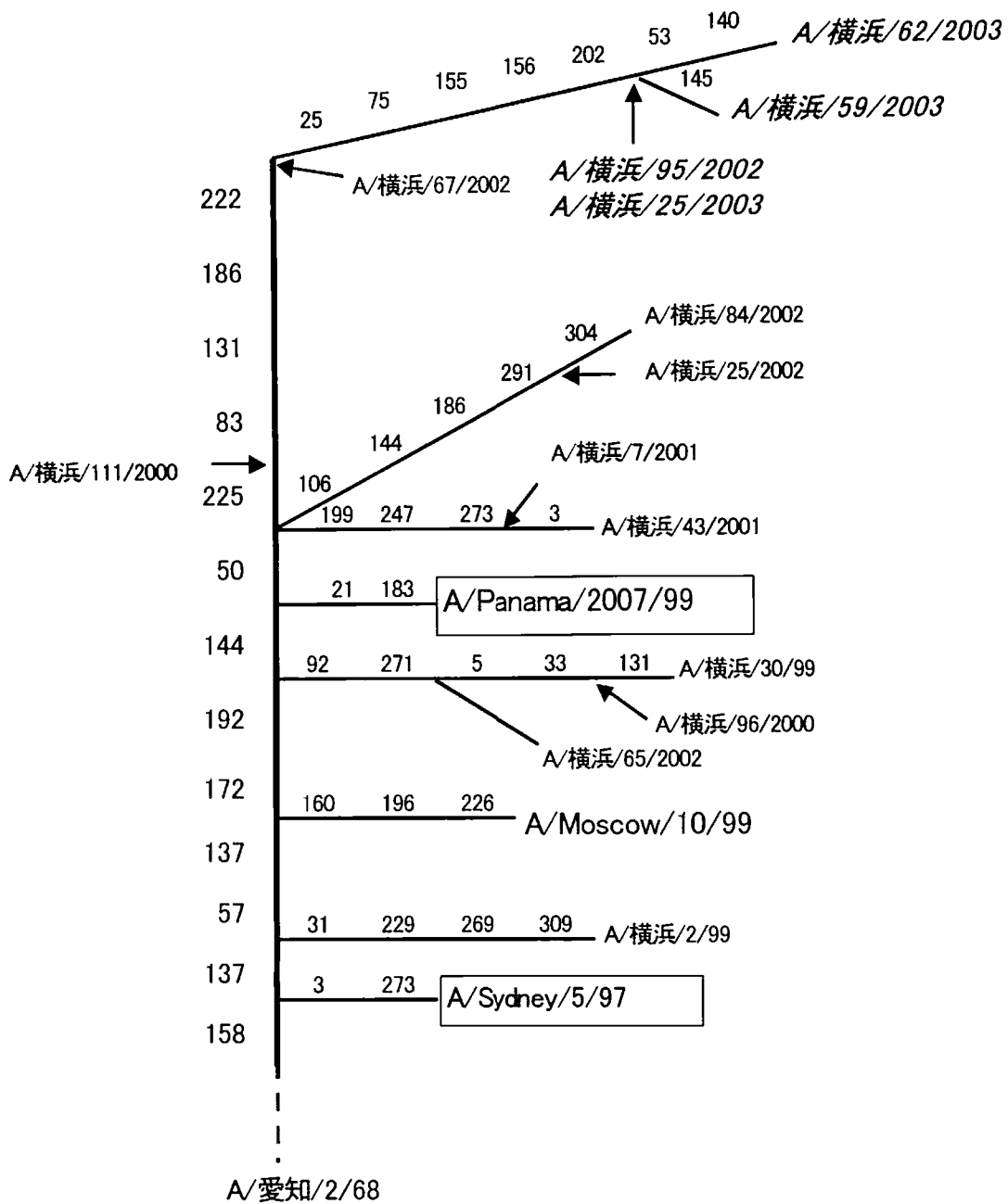


図3 AH3型ウイルスのHA1ポリペプチド進化系統樹

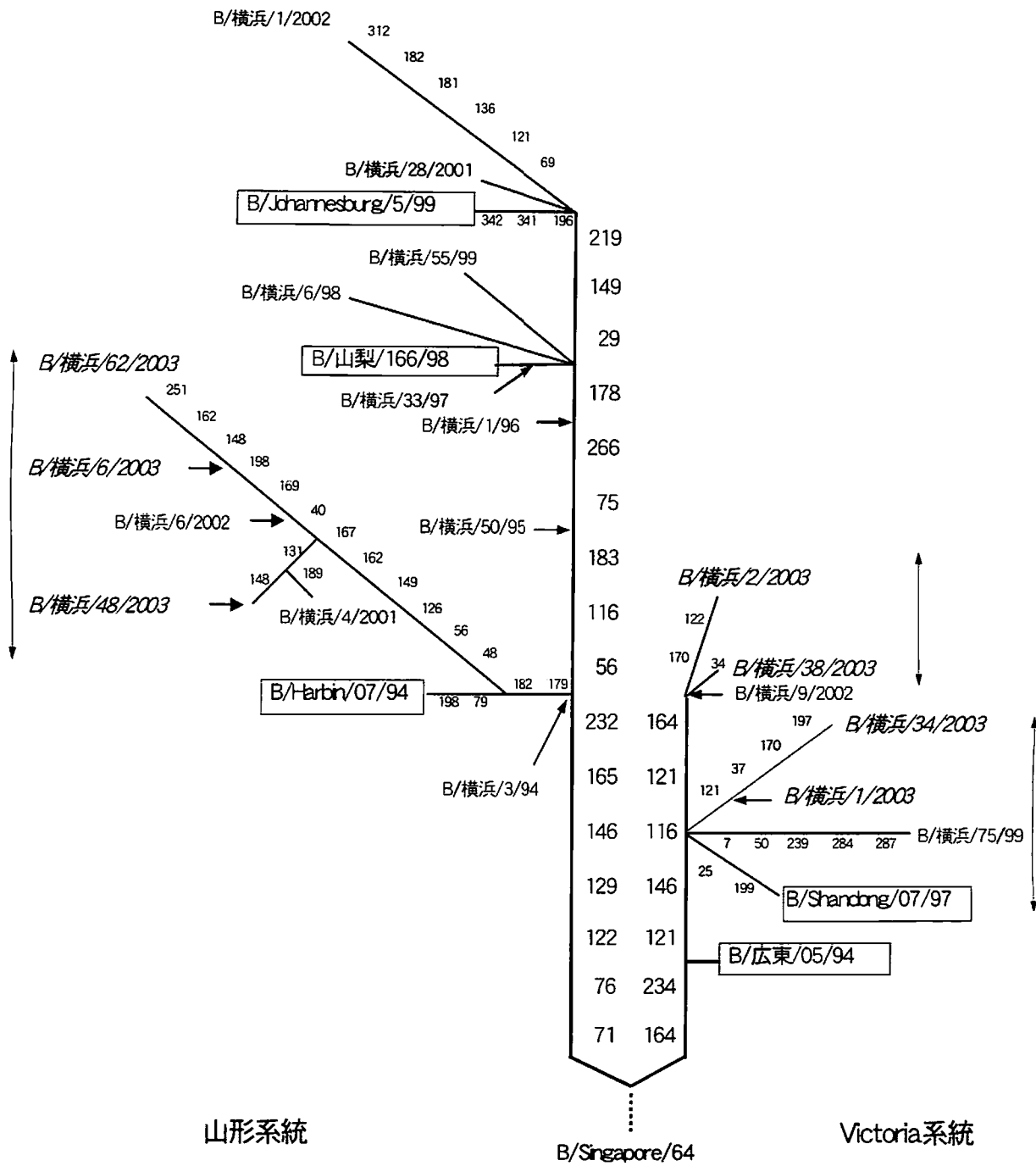


図4 B型ウイルスのHA1ポリペプチド進化系統樹

#### (4) 川崎市のインフルエンザの動向

川崎市衛生研究所

川崎市感染症発生動向調査におけるインフルエンザ様疾患患者の発生状況（図1）によると、患者発生が初めて確認されたのが平成14年11月の第5週（48週）であった。1月の1週に定点あたりの患者数が4.81、2週で12.37となり、流行の兆しがみられはじめ患者数は急速に増加し、2月の1週（5週）で43.09でピークを迎え大流行となった。その後患者数は少しずつ減少して3月の3週（12週）に終息した。

一方、集団かぜは平成15年1月14日に発生しはじめ、2月25日に終息するまでに49施設90学級であった。集団かぜ発生施設のうち、平成15年1月21日から2月6日までの9施設39名についてウイルス分離を行ったところ、うがい液から9施設22名においてB型インフルエンザウイルスが分離され、1名からはA香港型インフルエンザウイルスが分離された。

平成14年4月から平成15年3月にかけて、定点医療機関で採取されたインフルエンザ様疾患患者の咽頭ぬぐい液201例についてウイルス分離を行った。そのうち139例（69.2%）からインフルエンザウイルスが分離され、その内訳はA香港型109株、B型30株であった。（図2）によると、はじめてインフルエンザウイルスが分離されたのは11月29日でA香港型が分離された。12月の分離数はA香港型24株であった。1月にはいると分離数は増加し、A香港型79株、B型14株分離された。2月にはいると分離数は減少し、A香港型が3株、B型12株分離された。3月はB型3株が分離され、最後に分離されたのはB型の3月17日であった。なお、今期のインフルエンザ様疾患患者からは2血清型が分離されたが、A香港型、B型の混合流行で、B型は1月6日から3月17日まで散発的にみられ、終息した。

（清水 英明、平位 芳江）

図1 インフルエンザ様疾患患者数

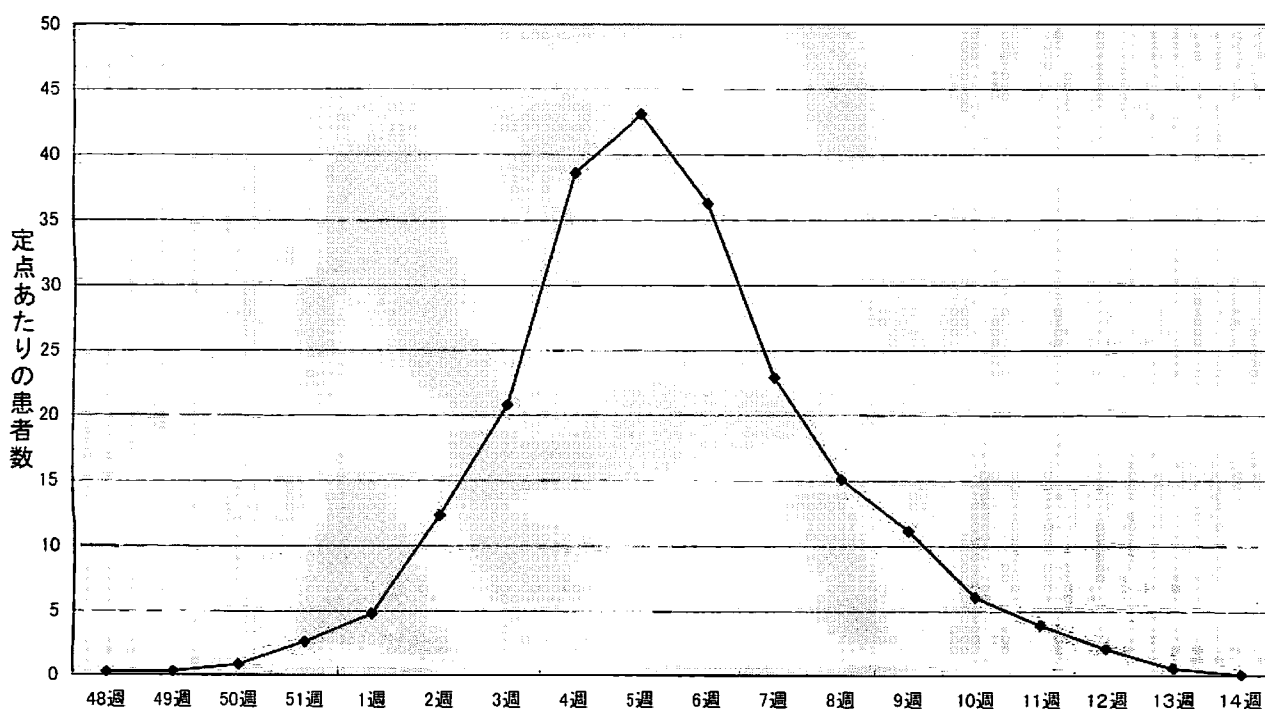
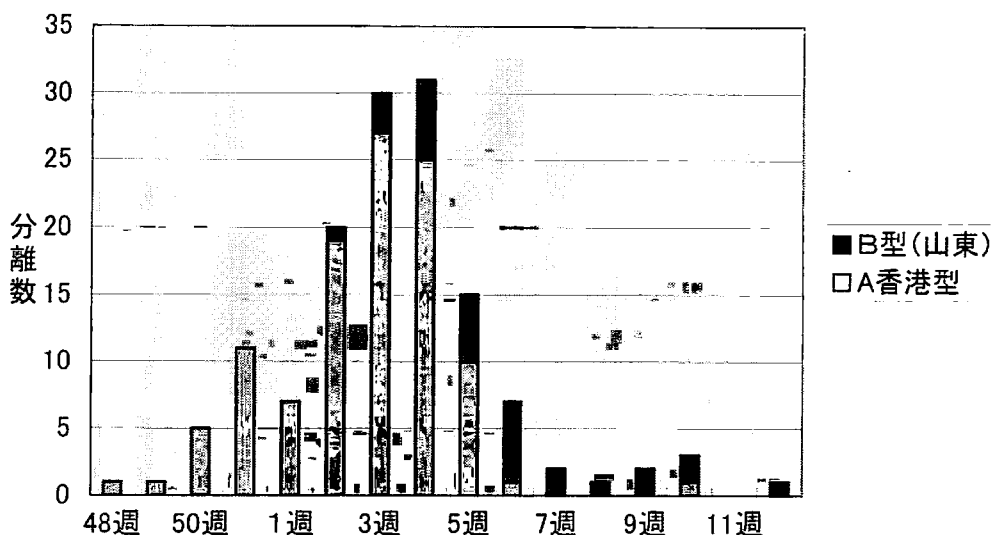


図2 週別インフルエンザウイルス分離状況



(5) インフルエンザ感受性調査

神奈川県衛生研究所

平成14年7月から9月の間に採取された0歳以上の県民268名(0~4、5~9、10~14、15~19、20~29、30~39、40~49、50~59、60歳以上の9区分年齢群各29~30名ずつ)の血清について、インフルエンザ各型に対する年齢別抗体保有状況を調査した。使用抗原は、A/ニューカレドニア/20/99(H1N1)、A/パナマ/2007/99(H3N2)、B/山東/7/97、B/深圳/407/2001の4種類である。抗体保有率は、最低血清希釈倍数の10HI価と、感染防御能があるとされている40HI価の2点で集計した(図1)。

A/ニューカレドニア/20/99(H1N1)は、12年度から3期連続してワクチン使用株となっている。本株に対する抗体保有率は、10HI価でみると最高が15~19歳の74.2%、最低が50~59歳の6.7%、40HI価でみると最高が15~19歳の32.3%、最低は0%で30~39歳、50~59歳、60歳以上の3年齢群であった。全体としては、前年度と比較して保有率に若干の上昇がみられ、ピークが上の年齢群(15~19歳)にシフトした。(図1.a)

A/パナマ/2007/99(H3N2)は、12年度から3期連続してワクチン使用株となっている。本株に対する抗体保有率は、10HI価でみると最高

が10~14歳の100%、最低が0~4歳の20%、40HI価でみると最高が5~9歳の76.7%、最低が50~59歳の6.7%であった。前年度と比較してほぼ同等の抗体保有率を維持しており、20歳以上の成人層では若干の上昇がみられた。(図1.b)

B/山東/7/97は、14年度のワクチン使用株であり、いわゆる”ビクトリア系統”に属する。本株は、9および11年度にもワクチン株に採用されている。本株に対する抗体保有率は、10HI価でみると最高が20~29歳の65.5%、最低が0~4歳の3.3%であった。40HI価以上の抗体保有者は全体でも2名とほとんどいなかった。前年度の調査対象株(B/秋田/15/2001)と比較して、全体的に抗体保有率は上昇傾向にあった。また、20歳代に保有率(10HI価)のピークがあることが特徴であった。(図1.c)

B/深圳/407/2001は、ワクチン使用株(B/山東株)とは抗原的に別の系統(山形系統)に属する株である。本株に対する抗体保有率は、10HI価でみると最高が10~14歳の75.9%、最低が0~4歳および50~59歳の10%であった。40HI価以上の抗体保有者は、B/山東株の場合と同様に、全体で2名とほとんどいなかった。前年度の調査対象株(B/ヨハネスバーグ/5/99、前年度のワクチン使用株)と比較して、全体的に抗体

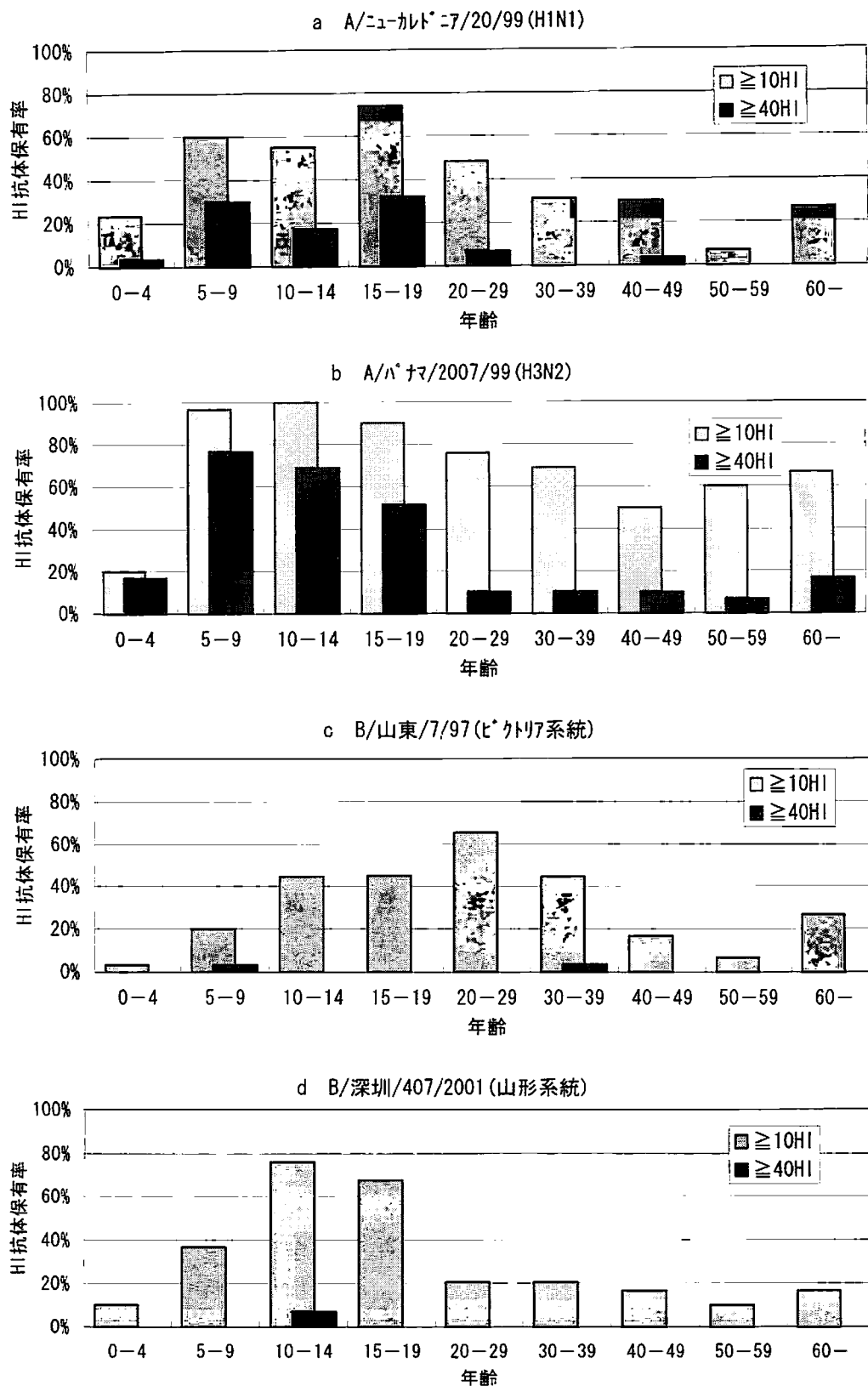
保有率が低い傾向にあった。(図 1.d)

以上の結果から、A ソ連 (H1N1) 型と B 型に対しては全年齢群で、A 香港 (H3N2) 型に対しては 5～19 歳を除く各年齢群で、抗体獲得が十

分ではないことがわかった。これらの年齢群ではインフルエンザに対する警戒が必要であると考えられた。

(渡邊 寿美、今井 光信)

図 1 インフルエンザ感受性調査



### 3 その他の感染症

#### (1) 死亡カラスのウエストナイルウイルス遺伝子検査について

神奈川県衛生研究所

2002年に米国においてウエストナイルウイルス(WNV)の流行がみられ、ウエストナイル熱・脳炎患者4,156名(死亡者284名)が確認された。米国ではWNV流行の前にカラスの死亡数の増加が報告されており、死亡カラスとこのウイルスを媒介する蚊のWNV遺伝子検査を行うことがWNV流行予測に有効であると考えられている。

平成14年10月中旬に神奈川県綾瀬市内の墓地で100羽以上のカラスが死亡していることが報告された。死亡原因としてWNV感染を疑い、死亡カラスと周辺で採取した蚊について、WNV遺伝子の検出を試みた。

検査材料には死亡カラス4羽の脳、腎臓、心臓、肝臓を用いた。蚊はイエカ4匹とヤブカ2匹を材料として用いた。検査の結果、カラスおよび蚊いずれの検査材料からもWNV遺伝子は検出されず、WNVの感染は確認されなかった。

今後もWNVの流行を監視するために、死亡カラスや蚊について引き続き調査を行うことが必要であると思われる。

(佐藤 利明、斎藤 隆行)  
(古屋由美子、今井 光信)

#### (2) 神奈川県(横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く)における麻疹抗体保有状況

神奈川県衛生研究所

昭和53年から義務接種として始まった、わが国の麻疹ワクチンの接種は、平成6年10月の予防接種法改正にともない「義務接種」から「努力義務接種」に変更された。小児の麻疹ウイルスに対する免疫状態を把握しておくことが必要なことから、昭和54年以降、赤血球凝集抑制(HI)抗体の保有状況について調査を行ってきた。しかしHI抗体の測定に必要なミドリザル血球の入手が困難になったため、平成11年度から麻疹ウイルスが吸着してあるゼラチン粒子による凝集反応(PA)法により抗体の保有状況調査を行った。

平成14年8月から12月の間に神奈川県立足柄上病院で採取された小児の血清89例についてPA法で麻疹ウイルスに対する抗体の測定を行った。

年齢別の抗体保有率は1歳以下が46.7%、他の年齢層(2~14歳)は76.9~100%を示し、平均抗体保有率は83.1%であった。

現在の予防接種が個人接種で行われていることから、予防接種率の低下が予想される。今後も継続して麻疹に対する抗体保有状況の把握を行うとともに、予防接種の必要性和麻疹に関する適切な知識を普及してゆくことが大切と思われる。

(原 みゆき、古屋由美子、今井 光信)

#### 麻疹抗体保有状況

(採血 平成14年8月~12月)

年齢 (歳)	PA抗体価(血清希釈倍数)									検査数	陽性率 (%)
	<8	8	16	32	64	128	256	512	≥1024		
0-1	8			3					4	15	46.7
2-3	3							7	3	13	76.9
4-5						2	5		1	8	100.0
6-7					2	3	1	3	2	11	100.0
8-9	3					2	4	2	2	13	76.9
10-14	1		1		2	6	8	5	6	29	96.6
合計	15	0	1	3	4	13	18	21	14	89	83.1
(%)	(16.9)	(0.0)	(1.1)	(3.4)	(4.5)	(14.6)	(20.2)	(23.6)	(15.7)		

(3) 神奈川県（横浜市・川崎市・横須賀市・相模原市を除く）における風疹抗体保有状況

神奈川県衛生研究所

風疹流行の予測とその推移を知るため、住民の風疹ウイルスに対する感受性の実態を把握しておくことは重要である。

平成14年においては、一般健康人男女188名を対象として、風疹ウイルスに対する赤血球凝集抑制（HI）抗体の測定を行った。

結果は年齢別抗体保有状況を陰性率で見ると、1歳以下38.5%、1～4歳41.2%、5～9歳20.0%、10～14歳35.0%、15歳以上5.0～26.7%とな

り平均陰性率は21.8%であった。

次にHI抗体価をみると16～128倍が65.4%を占め、平均抗体価は2<sup>6.3</sup>であった。

以上の成績より、4歳以下で抗体保有率が特に低いことがわかった。この年齢層が今後の感染と流行の主体になると考えられる。現在生後12～90か月と中学生を対象にワクチン接種が実施されているが、これらの年齢層の抗体保有状況の推移を監視するとともに、妊娠前および妊娠可能年齢層への風疹ワクチン接種は継続して奨励する必要があると思われる。

（古屋由美子、原 みゆき、今井 光信）

風 疹 抗 体 保 有 状 況

（採血 平成14年8～12月）

年齢 (歳)	HI 抗体価										検査数	陰性率 (%)
	< 8	8	16	32	64	128	256	512	≥ 1024			
< 1	5	4	1	2	1						13	38.5
1-4	7		1	2	3	2	2				17	41.2
5-9	4		3	7	3	3					20	20.0
10-14	7	2	4	1	3	3					20	35.0
15-19	2			3	8	4	3				20	10.0
20-24	2		1	1		1	3	1			9	22.2
25-29	4		2	2	2	7	2	1			20	20.0
30-34	2		1	4	2	5					14	14.3
35-39	4	1	1	3	2	4					15	26.7
40-49	3		3	5	2	3	2	1	1		20	15.0
≥ 50	1		3	5	6	4		1			20	5.0
合計	41	7	20	35	32	36	12	4	1	188	21.8	
(%)	21.8	3.7	10.6	18.6	17.0	19.1	6.4	2.1	0.5		100.0	



(4) HIV 患者・感染者の状況について  
 神奈川県衛生部保健予防課

## 世界の患者・感染者状況

(2002年11月25日現在)

1981年6月に世界で初めての症例が報告されて以来、2002年11月25日現在でWHO（世界保健機関）に報告されたエイズ患者数は2,822,111人であり、この1年で337,794人

(12.0%)増加している。

UNAIDS（国連合同エイズ計画）及びWHOでは2002年末までにHIV/AIDSと共に生きている成人及び小児は4,200万人に達し、同時に2002年だけでみると500万人が新たにHIVに感染したであろうと推計している。また、これまでの累積死者数は2,790万人に達し、2002年だけでも310万人が死亡したものと推計されている。

世界のエイズ患者の状況(2002年11月25日 WHO 報告)

世界の患者の公式報告数の推移	
▽1994年6月	985,119人
↓1994年12月	1,025,073人
↓1995年12月	1,291,810人
↓1996年11月	1,544,067人
↓1997年11月	1,736,958人
↓1998年11月	1,987,217人
↓1999年11月	2,201,461人
↓2000年11月	2,312,860人
↓2001年11月	2,784,317人
↓2002年11月	2,822,111人

地域	患者発生状況(人)	患者数(人)
アフリカ地域	タンザニア	130,386
	エチオピア	100,355
	ケニア	81,492
アメリカ地域	アメリカ合衆国	806,157
	ブラジル	215,799
	メキシコ	48,235
東地中海地域	スーダン	4,004
	ジブチ	1,783
ヨーロッパ地域	スペイン	63,252
	フランス	54,720
	イタリア	49,423
南東アジア地域	タイ	188,117
	インド	13,236
西太平洋地域	カンボジア	9,318
	オーストラリア	8,602
	マレーシア	5,743
	ベトナム	5,332
	日本	2,573
	2,822,111	

## 患者・感染者状況

●日本の状況 (2002年12月31日現在)

### 日本の現状

1985年に初めて患者が確認されて以来、2002年12月31日現在の累積では、HIV感染者5,140件、AIDS患者2,556件の合計7,696件が報告されている。

平成14年(2002)では、HIV感染者614件、AIDS患者308件の報告があった。年次推移で見ると、平成14年には平成13年に比しHIV感染者数は7件、AIDS患者数は24件の減少が認められた。

平成14年12月31日までの患者・感染者(累積7,696件)の都道府県別報告数では、東京都2,751件、神奈川県661件、千葉県574件の順に

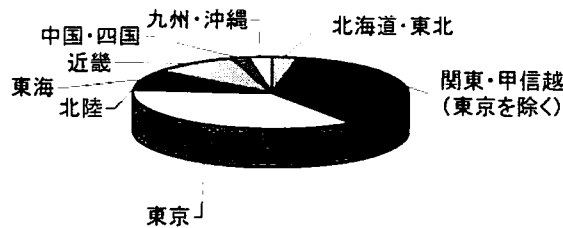
なっており、関東甲信越地区が5,617件(73.0%)を占めている。

男女比は3:1、日本人男性4,765件(61.9%)、外国人男性1,052件(13.7%)、日本人女性577件(7.5%)、外国人女性1,302件(16.9%)となっている。感染経路別では異性間性的接触3,352件(43.6%)、同性間性的接触2,382件(30.9%)、静注薬物濫用44件(0.6%)、母子感染44件(0.6%)、その他不明1,874件(24.3%)となっている。年齢別では20歳代2,485件(32.3%)、30歳代2,344件(30.5%)、40歳代1,423件(18.5%)の順となっている。

平成14年12月31日までの累積死亡者数は1,283名であった。

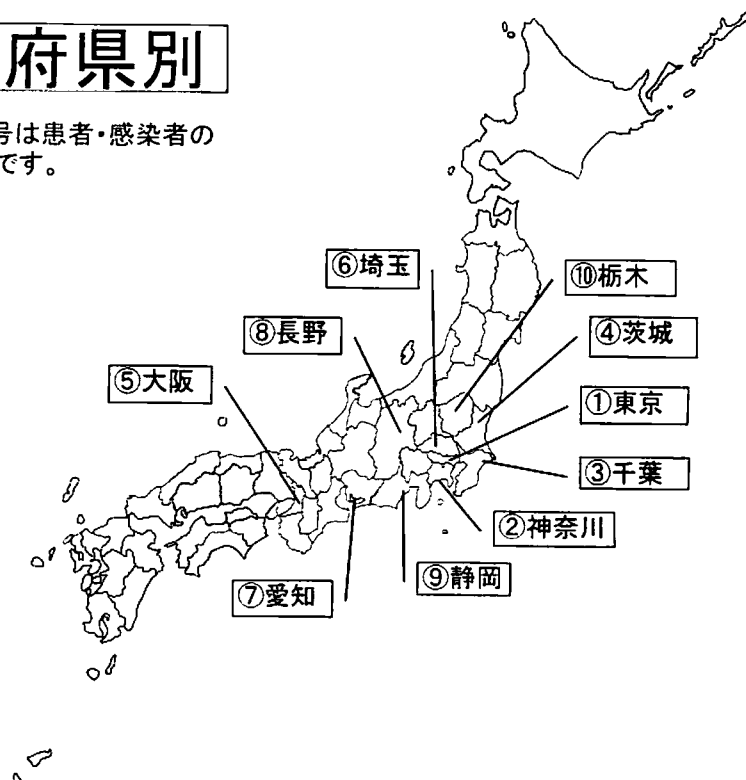
なお、血液凝固因子製剤による感染者の1,431名(内患者167名)は含まれていない。

ブロック別の患者・感染者割合



## 都道府県別

○の中の番号は患者・感染者の多い順位です。



都道府県別エイズ患者・感染者

(2002年12月31日現在)

順位	都道府県別	患者・感染者 報告件数(件)	構成割合 (%)	ブロック別患者・感染 者数報告件数(件)	構成割合 (%)
	1 北海道	79( 12)	1	北海道・東北	229
	2 青森県	19( 1)	0.2		
	3 岩手県	18( 3)	0.2		
	4 宮城県	44( 8)	0.6		
	5 秋田県	13( 3)	0.1		
	6 山形県	14( 1)	0.2		
	7 福島県	42( 3)	0.5		
④	8 茨城県	536( 34)	7	関東・甲信越	5617
⑩	9 栃木県	184( 14)	2.4		
	10 群馬県	135( 20)	1.7		
⑥	11 埼玉県	346( 28)	4.5		
③	12 千葉県	574( 42)	7.4		
①	13 東京都	2751(368)	35.7		
②	14 神奈川県	661( 69)	8.6		
	15 新潟県	66( 2)	0.8		
⑧	16 山梨県	90( 10)	1.2		
	17 長野県	274( 25)	3.6		73
	18 富山県	23( 5)	0.3	北 陸	62
	19 石川県	13( 2)	0.2		
	20 福井県	26( 3)	0.3		
	21 岐阜県	52( 6)	0.7	東 海	625
⑨	22 静岡県	193( 17)	2.5		
⑦	23 愛知県	287( 53)	3.7		
	24 三重県	93( 5)	1.2		
	25 滋賀県	28( 7)	0.4	近 畿	793
	26 京都府	83( 9)	1.1		
⑤	27 大阪府	505( 95)	6.6		
	28 兵庫県	112( 17)	1.5		
	29 奈良県	38( 3)	0.5		
	30 和歌山県	27( 3)	0.4		
	31 鳥取県	4( 1)	0	中国・四国	143
	32 島根県	5( 0)	0.1		
	33 岡山県	19( 5)	0.2		
	34 広島県	36( 4)	0.5		
	35 山口県	15( 1)	0.2		
	36 徳島県	5( 1)	0.1		
	37 香川県	13( 3)	0.2		
	38 愛媛県	33( 7)	0.4		
	39 高知県	13( 0)	0.2		
	40 福岡県	98( 14)	1.2	九州・沖縄	227
	41 佐賀県	4( 1)	0.1		
	42 長崎県	19( 1)	0.2		
	43 熊本県	22( 1)	0.3		
	44 大分県	8( 2)	0.1		
	45 宮崎県	8( 3)	0.1		
	46 鹿児島県	22( 1)	0.3		
	47 沖縄県	46( 9)	0.6		
		7696(922)	100%	7696件	100

注1血液凝固因子製剤による感染者は除いています。○数字は感染者数の多い順です。  
 ( )内は平成14年中(14年12月31日まで)の報告数です。

## 患者・感染者状況

●全国(2002年12月31日現在)

### ■一年次推移一

		平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14
男性	総数	207	290	335	455	492	519	676	669	816	804
	患者	72	119	141	201	209	200	258	280	282	268
女性	総数	156	144	111	155	155	134	155	122	137	118
	患者	14	17	28	33	41	31	43	49	50	40
合計	総数	363	434	446	610	647	653	831	791	953	922
	患者	86	136	169	234	250	231	301	329	332	308

### ■一感染経路別一

		異性間性的接触	同性間性的接触	その他・不明	合計
男性	総数	2181	2379	1257	5817
	患者	954	610	632	2196
女性	総数	1171	3	705	1879
	患者	206	2	152	360
合計	総数	3352	2382	1962	7696
	患者	1160	612	784	2556

\*その他・不明には、静注薬物濫用や母子感染が含まれています。

\*同性間性的接触には、両性間性的接触も含まれています。

### ■一国籍別一

		日本人	外国人	合計
男性	総数	4765	1052	5817
	患者	1756	440	2196
女性	総数	577	1302	1879
	患者	150	210	360
合計	総数	5342	2354	7696
	患者	1906	650	2556

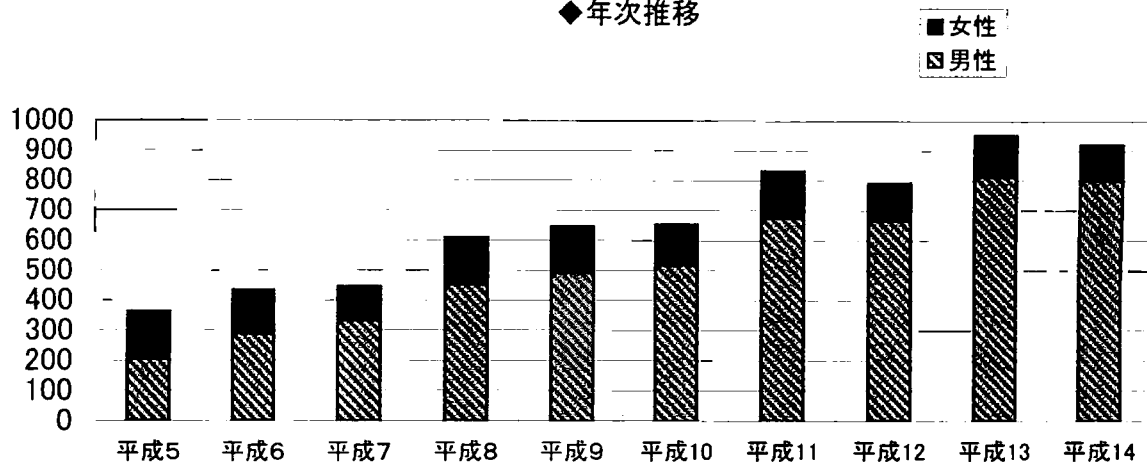
### ■一年齢区分別一

		20歳未満	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50歳以上	不明	合計
男性	総数	49	1410	1903	1301	1150	4	5817
	患者	9	259	661	631	636	0	2196
女性	総数	127	1075	441	122	107	7	1879
	患者	9	124	131	50	46	0	360
合計	総数	176	2485	2344	1423	1257	11	7696
	患者	18	383	792	681	682	0	2556

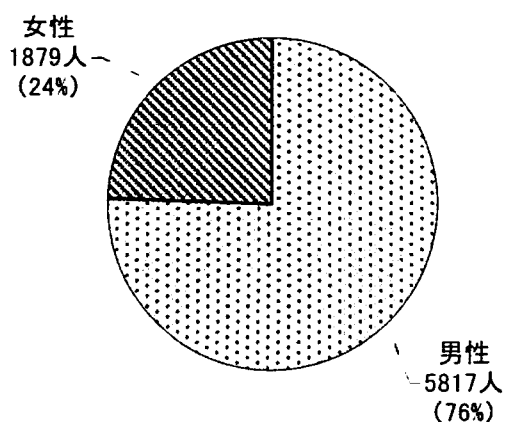
\*総数には、患者・感染者が含まれています。

\*血液凝固因子製剤による患者・感染者は除いてあります。

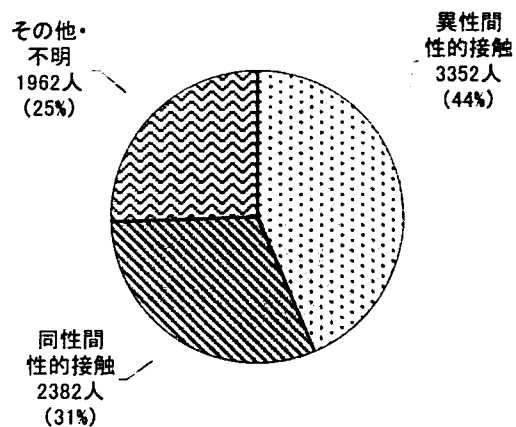
◆年次推移



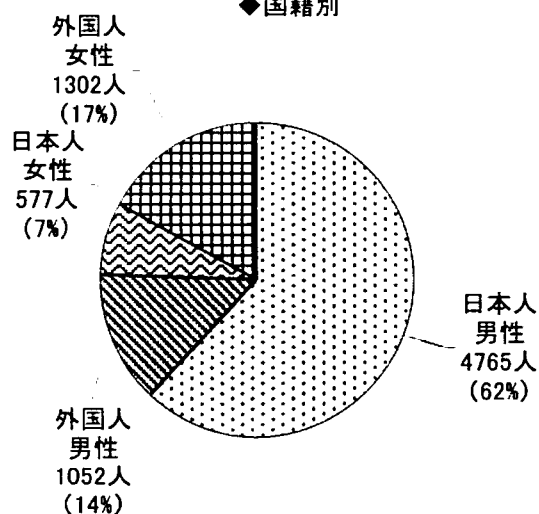
◆男女別



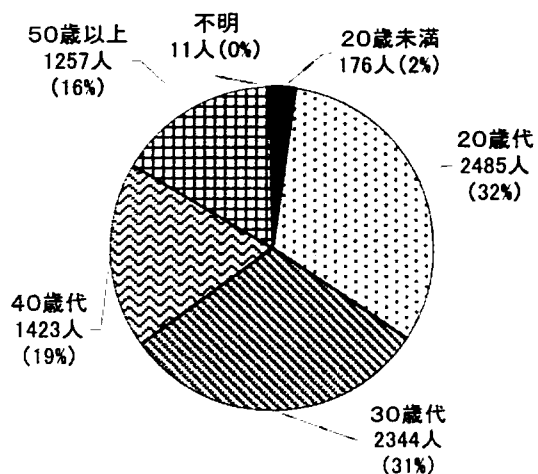
◆感染経路別



◆国籍別



◆年齢区分別



# 患者・感染者状況

●全国(2002年12月31日現在)

## ■日本のエイズ患者・感染者の年次推移(感染経路別)

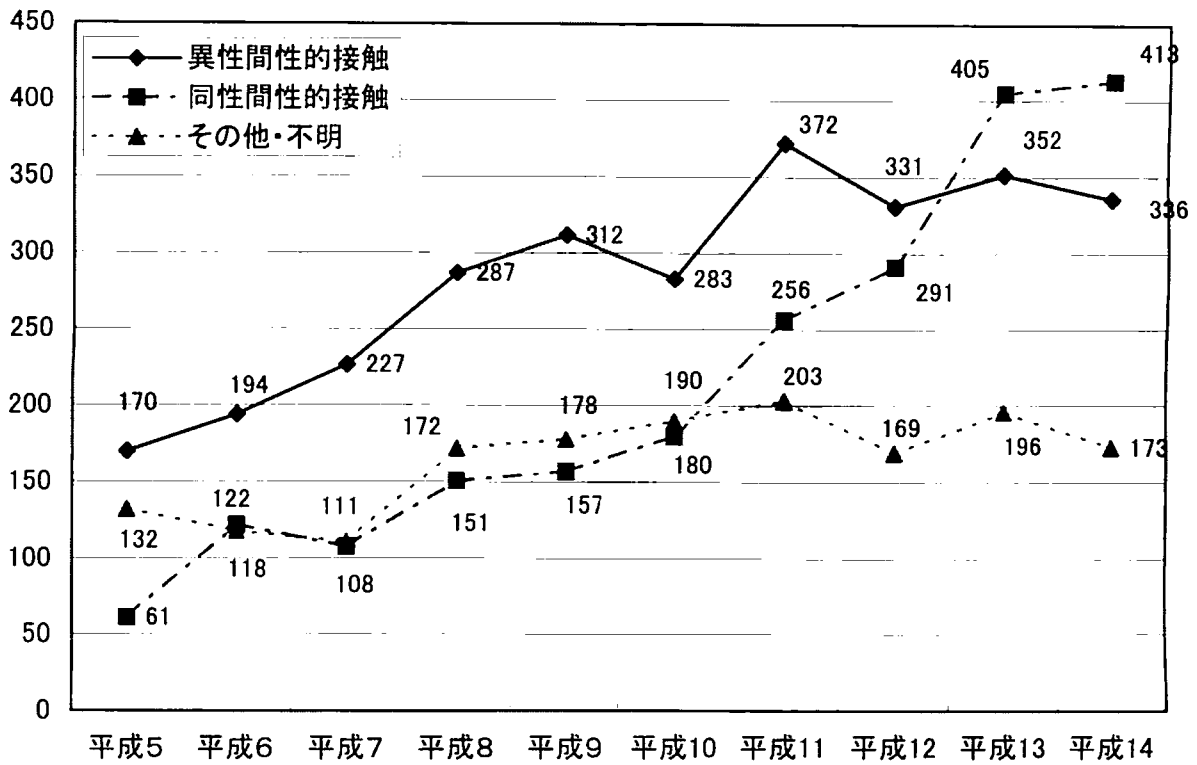
	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14
異性間性的接触	170	194	227	287	312	283	372	331	352	336
同性間性的接触	61	122	108	151	157	180	256	291	405	413
その他・不明	132	118	111	172	178	190	203	169	196	173
(内母子感染)	4	4	3	9	4	2	3	5	2	3
合 計	363	434	446	610	647	653	831	791	953	922

\* その他・不明には、静注薬物濫用や母子感染が含まれています。

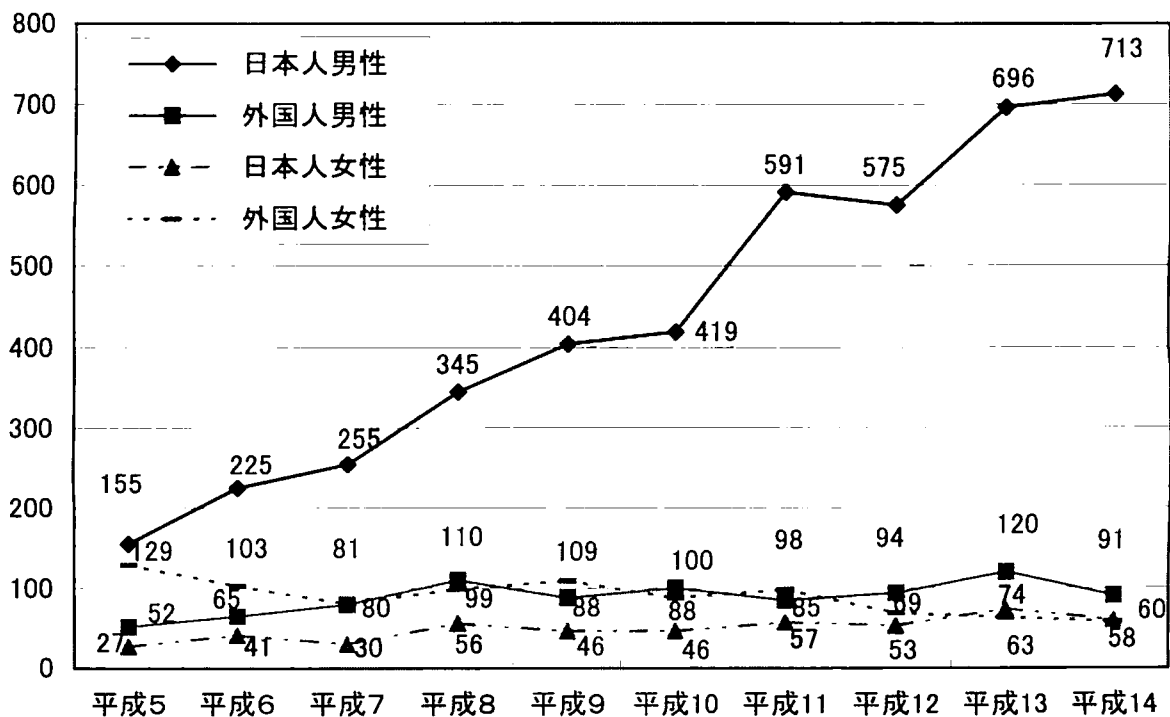
## ■日本のエイズ患者・感染者の年次推移(男女国籍別)

	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14
日本人男性	155	225	255	345	404	419	591	575	696	713
外国人男性	52	65	80	110	88	100	85	94	120	91
日本人女性	27	41	30	56	46	46	57	53	74	60
外国人女性	129	103	81	99	109	88	98	69	63	58
合 計	363	434	446	610	647	653	831	791	953	922

●日本のエイズ患者・感染者の年次推移(感染経路別)



●日本のエイズ患者・感染者の年次推移(男女国籍別)



## 患者・感染者状況

●神奈川県(2002年12月31日現在)

### ■一年次推移一

		平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14
男性	総数	16	33	34	42	44	58	64	50	65	62
	患者	8	10	16	19	17	22	25	18	29	22
女性	総数	10	12	7	13	24	12	15	12	18	7
	患者	1	1	1	3	11	2	0	3	8	0
合計	総数	26	45	41	55	68	70	79	62	83	69
	患者	9	11	17	22	28	24	25	21	37	22

### ■一感染経路別一

		異性間性的接触	同性間性的接触	その他・不明	合計
男性	総数	211	193	108	512
	患者	84	57	56	197
女性	総数	94	0	55	149
	患者	15	0	15	30
合計	総数	305	193	163	661
	患者	99	57	71	227

\* その他・不明には、静注薬物濫用や母子感染が含まれています。

### ■一国籍別一

		日本人	外国人	合計
男性	総数	426	86	512
	患者	162	35	197
女性	総数	55	94	149
	患者	12	18	30
合計	総数	481	180	661
	患者	174	53	227

### ■一年齢区分別一

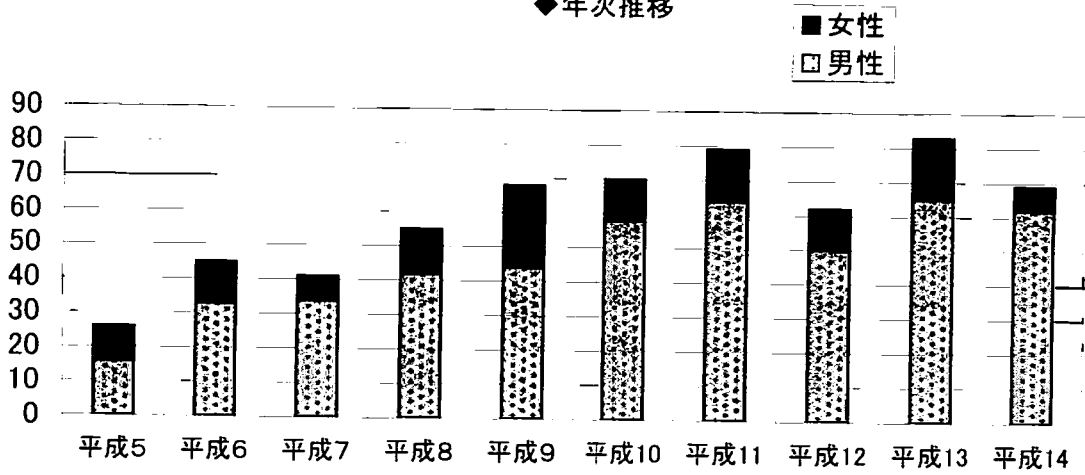
		20歳未満	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50歳以上	合計
男性	総数	8	127	151	112	114	512
	患者	1	24	50	55	67	197
女性	総数	7	77	41	15	9	149
	患者	0	8	15	6	1	30
合計	総数	15	204	192	127	123	661
	患者	1	32	65	61	68	227

\* 総数には、患者・感染者が含まれています。

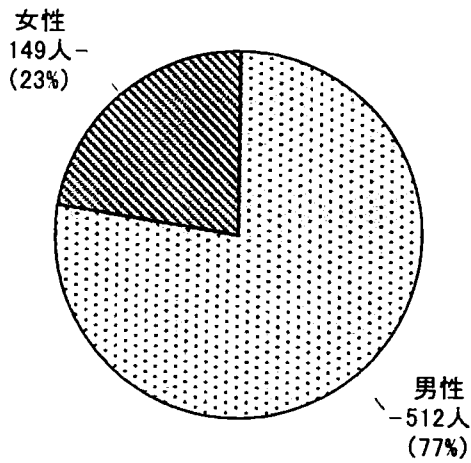
\* 血液凝固因子製剤による患者・感染者は除いてあります。



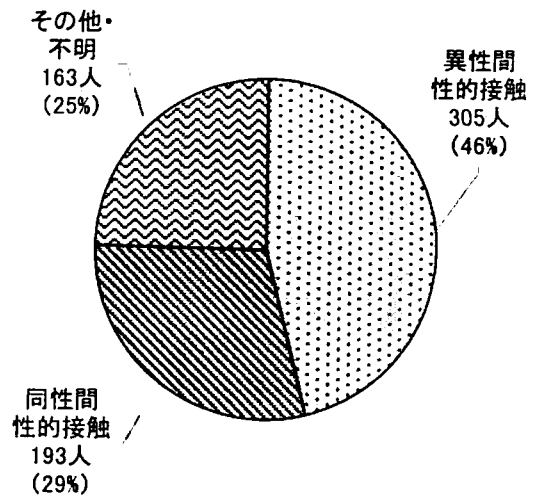
◆年次推移



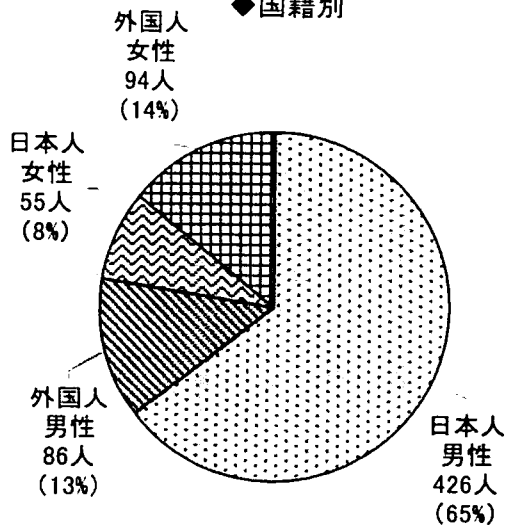
◆男女別



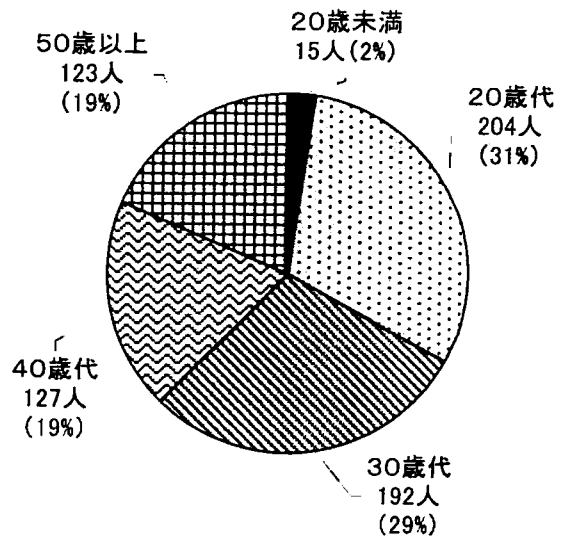
◆感染経路別



◆国籍別



◆年齢区分別



## 患者・感染者状況

●神奈川県(2002年12月31日現在)

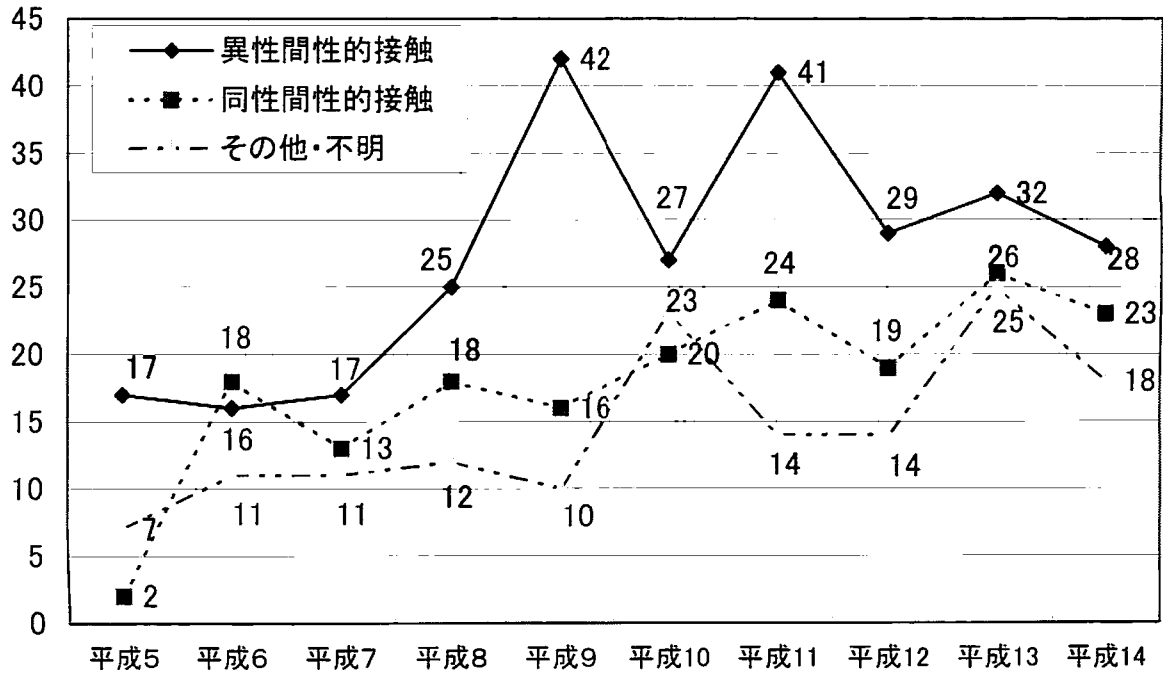
### ■神奈川県のエイズ患者・感染者の年次推移(感染経路別)

	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14
異性間性的接触	17	16	17	25	42	27	41	29	32	28
同性間性的接触	2	18	13	18	16	20	24	19	26	23
その他・不明	7	11	11	12	10	23	14	14	25	18
(内母子感染)	0	1	0	1	0	0	0	1	0	1
合 計	26	45	41	55	68	70	79	62	83	69

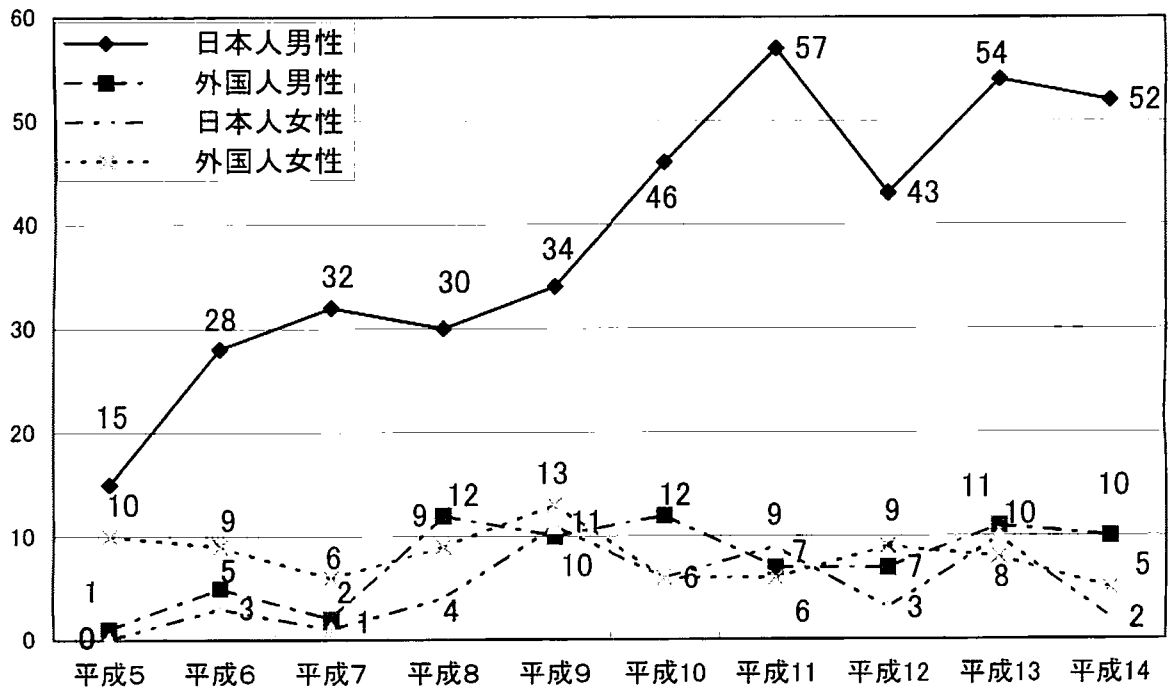
### ■神奈川県のエイズ患者・感染者の年次推移(男女国籍別)

	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14
日本人男性	15	28	32	30	34	46	57	43	54	52
外国人男性	1	5	2	12	10	12	7	7	11	10
日本人女性	0	3	1	4	11	6	9	3	10	2
外国人女性	10	9	6	9	13	6	6	9	8	5
合 計	26	45	41	55	68	70	79	62	83	69

■神奈川県のエイズ患者・感染者の年次推移(感染経路別)



■神奈川県のエイズ患者・感染者の年次推移(男女国籍別)

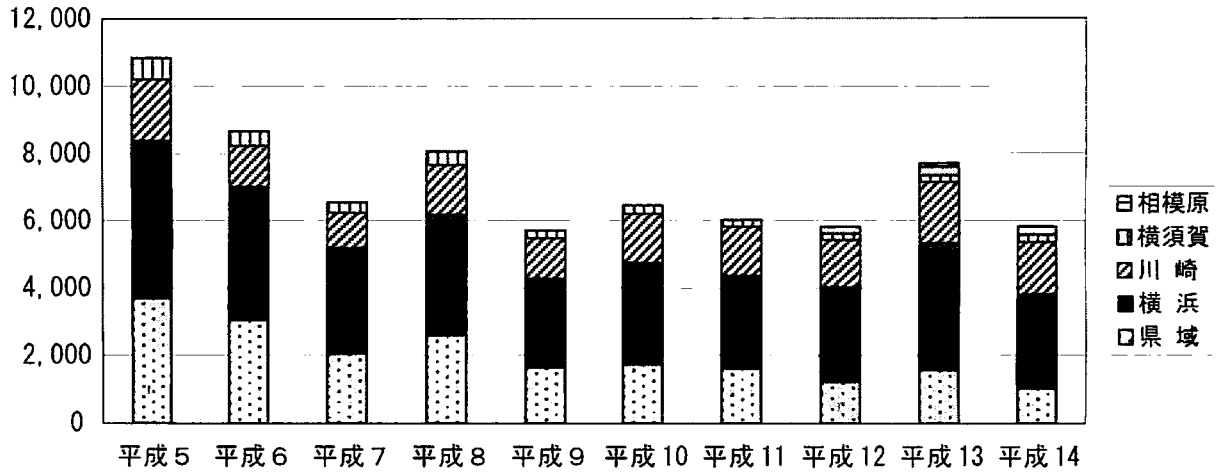


■神奈川県一検査実施年次推移

●神奈川県(2002年12月31日現在)

	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14
県域	3,715	3,054	2,057	2,614	1,663	1,756	1,630	1,235	1,583	1,045
横浜	4,669	3,963	3,135	3,580	2,619	2,994	2,740	2,787	3,759	2,763
川崎	1,810	1,225	1,044	1,463	1,192	1,459	1,451	1,405	1,818	1,560
横須賀	646	435	317	409	233	253	211	195	201	218
相模原								193	357	236
合計	10,840	8,677	6,553	8,066	5,707	6,462	6,032	5,815	7,718	5,822

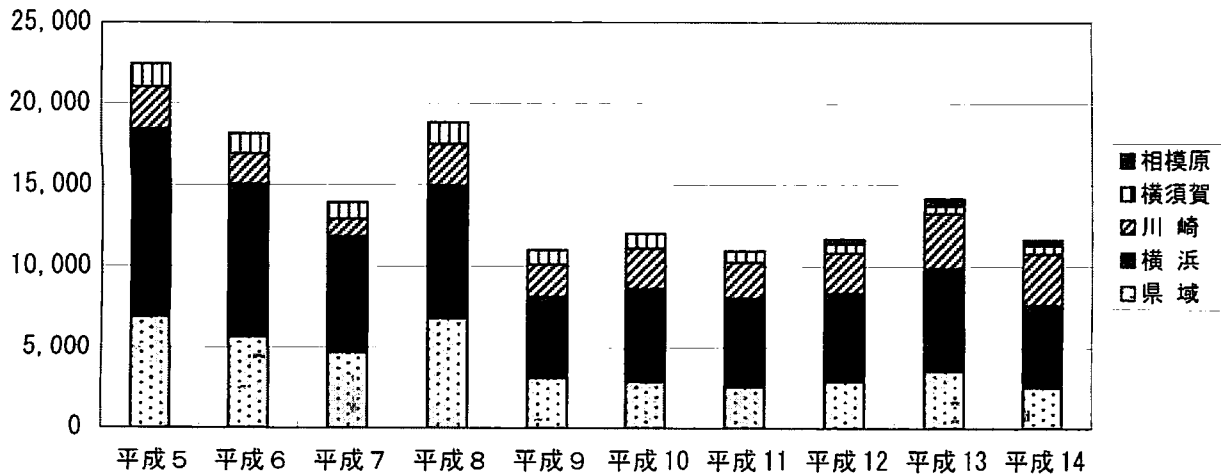
\* 相模原は平成12年4月から保健所政令市



■神奈川県一相談年次推移

	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14
県域	6,965	5,723	4,698	6,854	3,124	2,916	2,567	2,923	3,582	2,560
横浜	11,433	9,304	7,139	8,109	5,021	5,729	5,483	5,425	6,316	5,110
川崎	2,626	1,870	1,066	2,544	1,982	2,455	2,219	2,475	3,361	3,124
横須賀	1,441	1,239	1,012	1,313	873	906	679	581	484	522
相模原								248	436	291
合計	22,465	18,136	13,915	18,820	11,000	12,006	10,948	11,652	14,179	11,607

\* 相模原は平成12年4月から保健所政令市



## IV その他の感染症

## IV その他の感染症

### 1 神奈川県で発生した恙虫病について

神奈川県衛生研究所

昭和58年から平成14年までの恙虫病患者発生数を年次別にみると、昭和58年から昭和63年までは2～33名の届出（確定患者2～19名）で推移し、その後平成元年110名（81名）、平成2年140名（112名）と増加したが、平成3年からは110名（65名）、平成4年92名（52名：含む紅斑熱患者2名）、平成5年41名（24名）、平成6年53名（39名）、平成7年41名（22名）、平成8年14名（9名）、平成9年17名（9名）と減少した。しかし、平成10年21名（14名）、平成11年43名（31名）、平成12年48名（42名）と僅かながらであるが増加したが、平成13年度12名（7名）、平成14年度7名（4名）と再び減少した（表1）。

また恙虫病患者発生を季節別にみると、昭和58年から平成13年の19年間すべての毎年秋期（9～11月）に患者が多く、平成14年についても、10月1名、11月3名であり、秋期に患者が発生した。さらに患者の感染場所（聞き取り調査により推定できたもの）を検討すると、県外で感染して本県で届出されたと思われるものを除いて、平成14年では山北町と小田原市であった。

また、平成14年の恙虫病感染時の行動も、昨年と同様に畑、田圃など平地での農作業が多く、日常生活での感染の機会が多いことが判明した。

（片山 丘、古屋由美子）  
（原 みゆき、今井 光信）

表1 神奈川県における恙虫病患者発生状況

年	届出患者数	確定患者数*
昭和58年	2	2
59	16	14
60	15	10
61	17	15
62	33	19
63	24	19
平成元年	110	81
2	140	112
3	110	65
4	92	52**
5	41	24
6	53	39
7	41	22
8	14	9
9	17	9
10	21	14
11	43	31
12	48	42
13	12	7
14	7	4

\* : 血清学的確認患者数

\*\* : 紅斑熱患者を含む

# 資 料

1 平成 14 年分 1～3 類及び全数把握対象の 4 類感染症 保健所報告数

感染症名 保健所名	エ	ク	ペ	マ	ラ	コ	細	腸	パ	急	ジ	腸	ア	エ	黄	オ	回	急	Q	狂	ク	ク
	ボ	リ	ス	ー	ッ	レ	菌	チ	ラ	性	フ	管	メ	キ		ウ	帰	性		犬	リ	ロ
	ラ	ミア	ス	ル	ツ	ラ	性	チ	チ	灰	フ	出	ー	ノ		ム	帰	ウ		病	プ	イツ
	出	・	ト	ブ	サ	ラ	赤	フ	フ	白	ア	血	バ	コ		病	ル	ス	熱		ト	フェ
	血	コン	病	ル	サ	ラ	病	ス	ス	髄	ア	性	赤	ツ	熱	熱	ス	熱	病		ス	ルト
	熱	ゴ	熱	グ	熱	熱	熱	熱	熱	炎	熱	症	病	ク	症	性	熱	熱	熱		ポ	ヤ
	熱	出	病	病	熱	熱	熱	熱	熱	炎	熱	症	病	ス	肝	熱	熱	熱	熱		リ	コ
	熱	血	熱	病	熱	熱	熱	熱	熱	炎	熱	症	病	ス	炎	熱	熱	熱	熱		ジ	フ
	熱	熱	熱	病	熱	熱	熱	熱	熱	炎	熱	症	病	ス	熱	熱	熱	熱	熱		ウ	コ
	熱	熱	熱	病	熱	熱	熱	熱	熱	炎	熱	症	病	ス	熱	熱	熱	熱	熱		ム	フ
	熱	熱	熱	病	熱	熱	熱	熱	熱	炎	熱	症	病	ス	熱	熱	熱	熱	熱		症	病
神奈川県計	0	0	0	0	0	3	43	4	4	0	0	110	42	0	0	0	0	45	0	0	0	13
横浜市計	0	0	0	0	0	1	13	2	2	0	0	33	21	0	0	0	0	18	0	0	0	1
鶴見区						1						1										
神奈川							1															
西												1	2									
中												1						3				
南							1					2	3									1
港南区									1			1						4				
保土ヶ谷							1	1					4									
旭							1					2	4									
磯子												1						2				
金沢							2					1	3					2				
港北							1					8	3									
緑							1															
戸塚							3	1				5	1					4				
瀬谷												1										
栄												1						3				
泉																						
青葉							2					5	1									
都筑								1				3										
川崎市計	0	0	0	0	0	1	11	1	1	0	0	16	8	0	0	0	0	5	0	0	0	2
川崎							2					7	2									
幸							2					4										
中原							1					2	3					2				1
高津							2	1				1	1					3				
宮前							1					1	2									1
多摩							2	1														
麻生						1	1					1										
県域計	0	0	0	0	0	1	19	1	1	0	0	61	13	0	0	0	0	22	0	0	0	10
横須賀市						1	2					6	6									1
平塚							2						2					1				
鎌倉							1					5						2				1
藤沢							2					4	1					7				1
小田原												14										1
相模原市							5	1				10	2					8				1
三崎																						
厚木							3		1			8	1					1				1
足柄上												3										
津久井																						
秦野							2					6						2				3
大和							1					2	1									
茅ヶ崎							1					3						1				1



劇症型溶血性レンサ球菌感染症	後天性免疫不全症候群	コクシジオイデス症	ジアールジア症	腎症候性出血熱	髄膜炎菌性髄膜炎	先天性風疹症候群	炭疽	ツツガムシ病	デング熱	日本紅斑熱	日本脳炎	乳児ポツリヌス症	梅毒	破傷風	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	ハンタウイルス肺症候群	Bウイルス	ブルセラ症	発疹チフス	マラリア	ライム病	レジオネラ症	保健所別計
3	69	0	11	0	2	0	0	5	10	0	0	0	24	3	2	0	0	0	0	11	3	4	411
2	27	0	7	0	1	0	0	2	7	0	0	0	8	1	0	0	0	0	0	9	3	3	161
	1		1																				4
																						1	2
			1																				4
	1												1										6
	7		1						1														17
	4																						11
	7		3					2	6				3							7	2		36
	1				1																		10
																							3
	4													1									13
	1		1																				14
																				1			2
													2										16
																							1
	1																						5
													1										1
	1	1											1								1		12
																							4
	1	21	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	74
		11											1										23
																							6
		5						1															15
		1											2										11
	1	4											1										11
													2										5
																							3
	0	21	0	4	0	1	0	2	3	0	0	0	10	2	2	0	0	0	0	2	0	1	176
		2		2									4										24
																							5
													1										10
		2		1		1			1														20
																					1		16
		6							2				4	1	1					1			42
																							0
		4																				1	20
								1															4
																							0
		1						1							1								16
		5		1										1									11
		1												1									8

## 2 細菌検出状況

菌種・菌型別病原菌検出状況（ヒト由来）

横浜市衛生研究所

（月別）

（平成14年1月～12月）

菌種・群・型	採 取 月												計																	
	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		計					
	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率		
<i>Escherichia coli</i> (Total)*	2		7		2		3		1		13		13		1		13		5		11		1		1		1		72	2
<i>Shigella</i> (Total)					1		4		3		1										2		2		1				12	2
<i>Salmonella</i> Typhi					1												1												2	
<i>Salmonella</i> Paratyphi A											1		2																3	
<i>Salmonella</i> O4 (B)									2		3		1																6	
<i>Salmonella</i> O7 (G1, G4)													1		1		2												4	
<i>Salmonella</i> O9 (D1)									4		2		2				7		3				1						19	
<i>Salmonella</i> O3, 10 (E1, E2, E3)							1																						1	
<i>V. cholerae</i> O1:El Tor, Inaba, CT(-)															1														1	
<i>Vibrio parahaemolyticus</i>													2		7		6												15	
<i>Vibrio fluvialis</i>											1		1		1														2	
<i>Campylobacter jejuni</i>											1		1		6		2						7		2				21	
<i>Staphylococcus aureus</i> *															9														9	
<i>Bacillus cereus</i>													3																3	
<i>Streptococcus</i> A	1																												1	
<i>Bordetella pertussis</i>	2				1																								3	
合 計	5		7		5		8		10		21		26	1	41		22		16	3	10		3		3		174	4		

【注】\*：急性腎臓炎の原因菌と考えられるもののみ記載

<i>Escherichia coli</i> の内訳（再掲）	採 取 月												計																	
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		計					
	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率		
<i>Escherichia coli</i> 毒素産性			1								1		1								1		1						5	2
<i>Escherichia coli</i> 病原大腸菌血清型			2		2		2				5		1		1		1				4		1		1				20	
<i>Escherichia coli</i> EHEC/VTEC	2		4				1		1		7		11		12		3				6		3						47	
合 計	2		7		2		3		1		13		13	1	13		5		11	1	1		1		1		72	2		

<i>Shigella</i> の型別（再掲）	採 取 月												計																	
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		計					
	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率		
<i>Shigella flexneri</i> 2a									2		1																		3	
<i>Shigella flexneri</i> 3a																			1		1								1	1
<i>Shigella flexneri</i> 3b																													1	1
<i>Shigella flexneri</i> 4																							1						1	
<i>Shigella flexneri</i> 5b							1																						1	
<i>Shigella sonnei</i>					1		3		1																				5	
合 計					1		4		3		1								2	2	1						12	2		

菌種・菌型別病原菌検出状況（ヒト由来）  
（月別）

川崎市衛生研究所  
（平成14年1月～12月）

菌種・群・型	採 取 月												計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総数	検出率
	総数 検出率	総数 検出率	総数 検出率	総数 検出率	総数 検出率	総数 検出率	総数 検出率	総数 検出率	総数 検出率	総数 検出率	総数 検出率			
<i>Escherichia coli</i> (Total)*	3	1			1		1	1	2	1		1	11	
<i>Salmonella</i> O4 (B)					1	1	2	1	1				7	
<i>Salmonella</i> O9 (D1)						2		1		2		1	7	
<i>Salmonella</i> O1,3,19 (E4)						1							1	
<i>Vibrio parahaemolyticus</i>							2						2	
<i>Aeromonas hydrophila</i>									1				1	
<i>Aeromonas sobria</i>								1	1				2	
<i>Plesiomonas shigelloides</i>			1					1					2	
<i>Campylobacter jejuni</i>	2	3	3	8	3	8	13	8	9	4	5	1	67	
<i>Streptococcus</i> , A	1	1			1	1			1		1		6	
合 計	6	5	4	8	6	13	18	13	16	7	6	4	106	

【注】\* 急性腸炎の菌型と認められるもののみ記載

<i>Escherichia coli</i> の内訳（再掲）	採 取 月												計	
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	総数	検出率
	総数 検出率	総数 検出率	総数 検出率	総数 検出率	総数 検出率	総数 検出率	総数 検出率	総数 検出率	総数 検出率	総数 検出率	総数 検出率			
<i>Escherichia coli</i> 毒素原性	1												1	
<i>Escherichia coli</i> 標準大腸菌血清型	2	1			1		1	1	1	1		1	9	
<i>Escherichia coli</i> EHEC/TEC													1	
合 計	3	1			1		1	1	2	1		1	11	

菌種・菌型別病原菌検出状況（ヒト由来）  
（月別）

横須賀市衛生試験所  
（平成14年1月～12月）

菌種・群・型	採 取 月												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数
<i>Escherichia coli</i> (Total)*		1	2		4		3	3	3	1	4	3	24
<i>Shigella</i> (Total)													1
<i>Salmonella</i> 07 (C1, C4)							1						2
<i>Salmonella</i> 08 (C2, C3)					1								1
<i>Salmonella</i> 09 (D1)					1								1
<i>V. cholerae</i> 0139, CT(+)										1			1
<i>Vibrio parahaemolyticus</i>							14	5					19
<i>Aeromonas sobria</i>							3						3
<i>Campylobacter jejuni/coli</i> 型別せず													1
合 計		1	2		6	1	21	9	3	3	4	3	53

【注】 \* 急性胃腸炎の原因菌と考えられるもののみ記載

<i>Escherichia coli</i> の内訳（再掲）	採 取 月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数
<i>Escherichia coli</i> 毒素産性					1	1		1	1	1	1	1	5
<i>Escherichia coli</i> 病原大腸菌血清型		1	2		3		1		2		3	1	13
<i>Escherichia coli</i> EHEC/VTEC							2	2				2	6
合 計	1	1	2		4		3	3	3	1	4	3	24

<i>Shigella</i> の型別（再掲）	採 取 月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数
<i>Shigella sonnei</i>										1			1
合 計										1			1

菌種・菌型別病原菌検出状況（ヒト由来）  
（月別）

相模原市保健所  
（平成14年1月～12月）

菌種・群・型	採 取 月												計			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	総数	検出率		
	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率		
<i>Escherichia coli</i> (Total)*	1						1		3	4					9	
<i>Campylobacter jejuni</i>						1									1	
<i>Streptococcus A</i>	3	2		1							1		1		8	
合 計	4	2		1		1	1		3	4	1	1		18		

【注】 \* 急性胃腸炎の原因菌と考えられるもののみ記載

<i>Escherichia coli</i> の内訳（再掲）	採 取 月												計			
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	総数	検出率		
	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率	総数	検出率		
<i>Escherichia coli</i> EHEC/VTEC	1						1		3	4					9	
合 計	1						1		3	4					9	

菌種・菌型別病原菌検出状況（ヒト由来）

神奈川衛生研究所

（月別）

（平成14年1月～12月）

菌種・群・型	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	
EHEC/VTEC					11	5	1						17
EPEC	2	3	2	2	2		1		2	3		1	20
Salmonella 04群								1					1
Salmonella 08群	1					2					2		4
Salmonella 09群													1
Salmonella 09_46群		1											1
Salmonella 013群							1						1
Vibrio parahaemolyticus								3					3
Campylobacter jejuni	1	1											2
Staphylococcus aureus	1					7		1					9
Clostridium perfringens						6							6
Shigella sonnei					1	1							1
Streptococcus pyogenes -A群	4	1	3		2	2				1		1	14
Neisseria meningitidis	9	3	4	1	2	9	3	1		2	2	2	39
Neisseria gonorrhoeae													1
合計	18	9	9	5	18	31	6	6	2	6	6	4	120

〔注〕\* 急性胃腸炎の原因菌と考えられるもののみ記載

Escherichia coliの内訳（再掲）	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	
Escherichia coli EHEC/VTEC					11	5	1						17
Escherichia coli 病原大腸菌血清型	2	3	2	2	2				2	3	2	1	20
合計	2	3	2	2	13	5	2		2	3	2	1	37

Shigellaの型別（再掲）	採取月												計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	総数 <small>内腸炎 菌数</small>	
Shigella sonnei			1		1								1
合計			1		1								1

### 3 ウイルス検出状況

ウイルス検出状況（ヒト由来）  
（月別）

横浜市衛生研究所  
（平成14年1月～12月）

ウイルス	採取月												合計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
Influenza AH1	5	14	3											22
AH3	14	29	24	2								13		82
B		1	6	1										8
Coxsackie A 3						3	1							4
4				3		2	6		1					12
5									2					2
6						1	3	2	1					7
7							1							1
10							1							1
16							2							2
Coxsackie B 2						1	1	1	1	2				6
4									1		2			3
6										1				1
ECHO 6											1			1
13								1						1
30							1							1
Polio 1										1				1
2										1				1
(Entero 未同定)	2						1		2	1				6
Mumps				1			1	1						3
Adeno 3					1					1	3	1		6
4			1											1
5			1		2		1				1			5
(型 未同定)						1						1		2
HSV-1						1	1							2
RSV	4			1		1	2	1	1	4	7	11		32
Rhino											2	1		3
未 同 定				3	1	5	2	4	10	6	6	4		41
合 計	25	44	35	11	4	15	24	10	19	17	22	31		257

ウイルス検出状況（ヒト由来）  
（月別）

川崎市衛生研究所  
（平成 14 年 1 月～ 12 月）

検出ウイルス	採取月												計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
インフルエンザ AH1	6	13												19
インフルエンザ AH3	17	19	2	1							1	24	64	
インフルエンザ B		1	3	1									5	
コクサッキー A16							3						3	
コクサッキー B2								1					1	
エコー 7											1		1	
アデノ 2					1	1							2	
アデノ 3			2	1	2			1					6	
アデノ 4				1							1	1	3	
アデノ 8								1					1	
アデノ 19	1	1	1			1	1			1	1		7	
ロ タ	1	3	1	1									6	
小型球形	2												2	
ノーウォーク		4	2		1						8	30	45	
エコー 13							4	2	1				7	
合計	27	41	11	5	4	2	8	5	1	1	12	55	172	

（疾患別）

検出ウイルス	麻疹様疾患	水痘	流行性耳下腺炎	溶連菌感染症	異型肺炎	感染性胃腸炎	乳児嘔吐下痢症	手足口病	伝染性紅斑	突発性発疹	ヘルパンギーナ	インフルエンザ様	HCLS（川崎病）	咽頭結膜熱	流行性角結膜炎	急性出血性結膜炎	細菌性髄膜炎	無菌性髄膜炎	急性性脳炎	ライ症候群	脊髄炎	脳脊髄炎	その他のウイルス肝炎	性器クラミジア感染症	性器ヘルペス	その他の	記載なし	合計
インフルエンザ AH1												19																19
インフルエンザ AH3												63		1														64
インフルエンザ B												4		1													5	
コクサッキー A16								3																			3	
コクサッキー B2																		1									1	
エコー 7																		1									1	
アデノ 2														2													2	
アデノ 3														5	1												6	
アデノ 4															3												3	
アデノ 8															1												1	
アデノ 19														1	6												7	
ロ タ						6																					6	
小型球形						2																					2	
ノーウォーク様						45																					45	
未同定																		6							1	7		
合計						53		3				86		10	11			8								1	172	



ウイルス検出状況（ヒト由来）  
（月別）

横須賀市衛生試験所  
（平成14年1月～12月）

検出ウイルス	採取月												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
インフルエンザ AH1			1										1
インフルエンザ AH3		1	6										7
エコー 13								6	2				8
ロ タ				1									1
ノーウォーク	1				1							14	16
合 計	1	1	7	1	1			6	2			14	33

（疾患別）

疾患名 検出ウイルス	麻疹様疾患	流行性耳下腺炎	感染性胃腸炎	手足口病	ヘルパンギーナ	インフルエンザ様	咽頭結膜熱	流行性角結膜炎	急性出血性結膜炎	無菌性髄膜炎	急性脳炎	食中毒	その他	合計
インフルエンザ AH1						1								1
インフルエンザ AH3						7								7
エコー 13										8				8
ロ タ			1											1
ノーウォーク様												16		16
合 計			1			8				8		16		33

ウイルス検出状況（ヒト由来）  
（月別）

相模原市保健所  
（平成14年1月～12月）

検出ウイルス	採取月												計	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
インフルエンザ AH1	5													5
インフルエンザ AH3	4	6												10
インフルエンザ B	1		2											3
コクサッキー A16								1						1
コクサッキー B4										1				1
エコー 13								1	3					4
アデノ 3							1					2		3
アデノ 19							1							1
アデノ 37			1		1			2	1					5
ロ タ	1													1
小型球形	1	7											2	10
合計	12	13	3		1		2	4	4	1		4		44

（疾患別）

疾患名 検出ウイルス	麻疹様疾患	水痘	流行性耳下腺炎	溶連菌感染症	異型肺炎	感染性胃腸炎	乳児嘔吐下痢症	手足口病	伝染性紅斑	突発性発疹	ヘルパンギーナ	インフルエンザ様	HCLS（川崎病）	咽頭結膜熱	流行性角結膜炎	急性出血性結膜炎	細菌性髄膜炎	無菌性髄膜炎	急性脳炎	ライ症候群	脊髄炎	脳脊髄炎	その他のウイルス肝炎	性器クラミジア感染症	性器ヘルペス	その他の	記載なし	合計
	インフルエンザ AH1												5															
インフルエンザ AH3												10																10
インフルエンザ B												3																3
コクサッキー A16											1																	1
コクサッキー B4																	1											1
エコー 13																	4											4
アデノ 3											1	2																3
アデノ 19															1													1
アデノ 37															5													5
ロ タ						1																						1
小型球形																									10			10
合計						1					2	20			6		5								10			44

ウイルス検出状況（ヒト由来）  
（月別）

神奈川県衛生研究所  
（平成14年1月～12月）

検出ウイルス	平成13年計	月												計		
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月			
インフルエンザ AH1	30	14	28	3												45
インフルエンザ AH3	5	28	47	7											7	89
インフルエンザ B	8		3	4												7
パラインフルエンザ 1	1															
ポリオ 1	1															
ポリオ 2	1															
ポリオ 3					1											1
コクサッキー A2	8															
コクサッキー A4	7							2	1		1					4
コクサッキー A5	7															
コクサッキー A6								2	4							6
コクサッキー A8									1							1
コクサッキー A16	14	4	1	1		1	14	6	5	1						33
コクサッキー B2									3			1				4
コクサッキー B4									1							1
コクサッキー B5	9															
エコー 11									1		1					2
エコー 13								1	10	13	1					25
エコー 22	1															
エコー 30								1				1				2
エンテロ 71					1	1	1									3
ムンプス	5		1													1
アデノ 1	1								1							1
アデノ 2	1															
アデノ 3	12	1	1					1								3
アデノ 4	1															
アデノ 5									3							3
アデノ 6			1													1
アデノ 19	1															
単純ヘルペス 1	4	1			1									1	1	4
ロ タ									1							1
小型球形	3		3		4							7		3		17
ノロ	28	3	28		24							32	2	37		126
デング	2						1									1
未同定	1	1														1
合計	151	52	113	15	31	4	23	30	18	4	41	3	48			382

ウイルス検出状況（ヒト由来）  
（疾患別）

神奈川県衛生研究所  
（平成14年1月～12月）

疾患名 検出ウイルス	感 染 性 胃 腸 炎	手 足 口 病	ヘル パン ギー ナ	イン フル エン ザ 様	咽 頭 結 膜 熱	無 菌 性 髄 膜 炎	急 性 脳 炎	食 中 毒	デ ン グ 熱	そ の 他	合 計
インフルエンザ AH1				45							45
インフルエンザ AH3				87			2				89
インフルエンザ B				7							7
ポリオ 3										1	1
コクサッキー A4			4								4
コクサッキー A6		3	3								6
コクサッキー A8			1								1
コクサッキー A16		31	2								33
コクサッキー B2			1			1				2	4
コクサッキー B4										1	1
エコー 11						2					2
エコー 13		1	1			22				1	25
エコー 30						2					2
エンテロ 71		3									3
ムンプス						1					1
アデノ 1			1								1
アデノ 3				1	1					1	3
アデノ 5					2	1					3
アデノ 6				1							1
単純ヘルペス 1			1	2						1	4
口 夕	1										1
小 型 球 形 ノ 口	4							13			17
	24							102			126
デング									1		1
未同定				1							1
合 計	29	38	14	144	3	29	2	115	1	7	382

#### 4 予防接種実施状況

##### (1) ジフテリア・百日せき・破傷風（1期、2期）

区分	年度	10 (年度)	11 (年度)	12 (年度)	13 (年度)	14 (年度)	14年度内訳	
							第1期	第2期
接種者数	人	277,642	208,531	359,497	360,402	356,081	316,811	39,270

##### (2) 急性灰白髄炎

年度	区分	対象者数	接種者数	接種率
10		126,054 人	124,536 人	98.8 %
11		159,110	163,413	102.7
12		162,776	148,994	91.5
13		163,048	166,398	102.1
14		163,270	160,663	98.4
内訳	第1回	81,536	81,161	99.5
	第2回	81,734	79,502	97.3

##### (3) 麻しん

年度	区分	対象者数	接種者数	接種率
10		81,670 人	77,713 人	95.2 %
11		82,413	82,749	100.4
12		82,606	79,161	95.8
13		82,732	87,541	105.8
14		82,608	83,311	100.9

##### (4) 風しん

年度	区分	対象者数	接種者数	接種率
10		210,297 人	110,196 人	52.4 %
11		196,014	120,259	61.4
12		165,081	103,792	62.9
13		158,305	76,102	48.1
14		177,780	86,766	48.8
内訳	定期分	82,524	78,011	94.5
	経過措置分	95,256	8,755	9.2

## (5) 日本脳炎

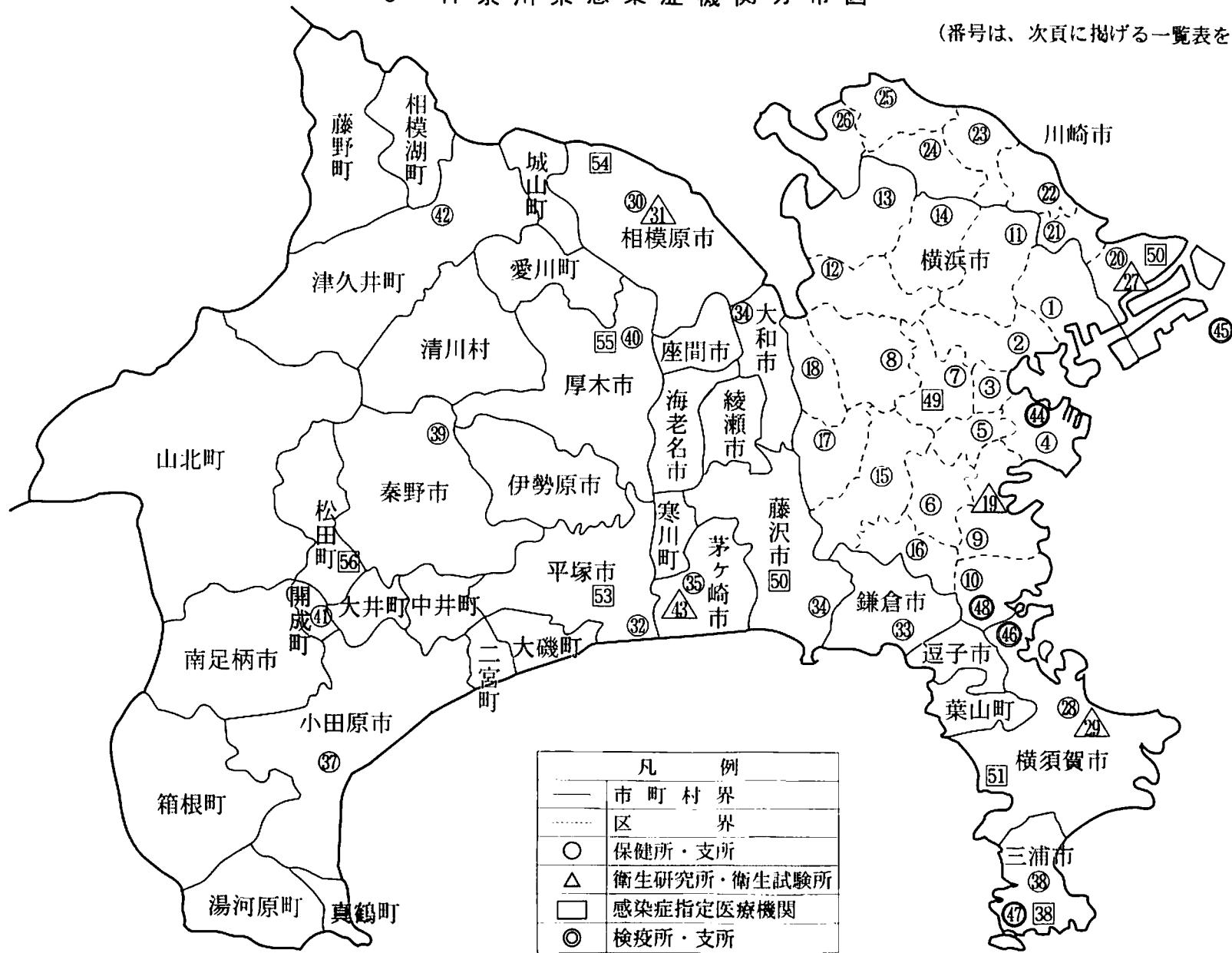
年度		区分	対象者数	接種者数	接種率
10			369,112 人	227,789 人	61.7 %
11			319,338	209,662	65.7
12			399,338	264,629	66.3
13			408,106	274,578	67.3
14			405,341	277,095	68.4
14 年 度 内 訳	幼児初回接種 (1期初回第1回)		84,671	74,170	87.6
	幼児初回接種 (1期初回第2回)		84,671	71,347	84.3
	幼 児 (1期追加)		81,309	59,332	73.0
	小 学 生 (2期)		75,592	45,823	60.6
	中 学 生 (3期)		79,098	26,423	33.4

## (6) インフルエンザ

年度		区分	対象者数	接種者数	接種率
13			1,196,075 人	315,562 人	26.4 %
14			1,254,544 人	423,682 人	33.8 %
内 訳	65 歳 以 上		1,248,269	422,612	33.9 人
	予防接種法施行令で定める 60歳以上65歳未満の者		6,275	1,070	17.1

# 5 神奈川県感染症機関分布図

(番号は、次頁に掲げる一覧表を参照のこと)



凡 例	
—	市 町 村 界
-----	区 界
○	保健所・支所
△	衛生研究所・衛生試験所
□	感染症指定医療機関
◎	検疫所・支所

6 神奈川県感染症機関一覧表

(※印は合同庁舎)

分布図 番 号	機 関 名	所 在 地	電 話
—	横浜市衛生局保健部感染症・難病対策課	横浜市中区港町1-1	045 (671) 2463
1	横浜市 鶴見福祉保健センター	” 鶴見区鶴見中央3-20-1	045 (510) 1832 ※
2	” 神奈川福祉保健センター	” 神奈川区広台太田町3-8	045 (411) 7139 ※
3	” 西福祉保健センター	” 西区中央1-5-10	045 (320) 8439 ※
4	” 中福祉保健センター	” 中区日本大通35	045 (224) 8332 ※
5	” 南福祉保健センター	” 南区花之木町3-48-1	045 (743) 8242 ※
6	” 港南福祉保健センター	” 港南区中央通10-1	045 (847) 8438 ※
7	” 保土ヶ谷福祉保健センター	” 保土ヶ谷区川辺町2-9	045 (334) 6344 ※
8	” 旭福祉保健センター	” 旭区鶴ヶ峰1-4-12	045 (954) 6146 ※
9	” 磯子福祉保健センター	” 磯子区磯子3-5-1	045 (750) 2445 ※
10	” 金沢福祉保健センター	” 金沢区泥亀2-9-1	045 (788) 7840 ※
11	” 港北福祉保健センター	” 港北区大豆戸町26-1	045 (540) 2362 ※
12	” 緑福祉保健センター	” 緑区寺山町118	045 (930) 2357 ※
13	” 青葉福祉保健センター	” 青葉区市ヶ尾町31-4	045 (978) 2438 ※
14	” 都筑福祉保健センター	” 都筑区茅ヶ崎中央32-1	045 (948) 2350 ※
15	” 戸塚福祉保健センター	” 戸塚区戸塚町157-3	045 (866) 8427 ※
16	” 栄福祉保健センター	” 栄区桂町303-19	045 (894) 6964 ※
17	” 泉福祉保健センター	” 泉区和泉町4636-2	045 (800) 2444 ※
18	” 瀬谷福祉保健センター	” 瀬谷区二ツ橋町190	045 (367) 5744 ※
19	横浜市 衛生 研 究 所	” 磯子区滝頭1-2-17	045 (754) 9800
—	川崎市健康福祉局健康部疾病対策課	川崎市川崎区宮本町1	044 (200) 2441
20	川崎市 川崎区役所保健福祉センター	” 川崎区東田町8	044 (201) 3113 ※
21	” 幸区役所保健福祉センター	” 幸区戸手2-12-11	044 (522) 7315
22	” 中原区役所保健福祉センター	” 中原区小杉町3-245	044 (744) 3113 ※
23	” 高津区役所保健福祉センター	” 高津区下作延274-2	044 (861) 3113 ※
24	” 宮前区役所保健福祉センター	” 宮前区宮前平2-20-5	044 (856) 3113 ※



分布図 番号	機 関 名	所 在 地	電 話
25	川崎市 多摩区役所保健福祉センター	川崎市多摩区登戸 1775 - 1	044 (935) 3113 ※
26	" 麻生区役所保健福祉センター	" 麻生区万福寺 1 - 5 - 1	044 (965) 5100 ※
27	川崎市 衛生研究所	" 川崎区大島 5 - 13 - 10	044 (244) 4985
28	横須賀市 保健所	横須賀市西逸見町 1 - 38 - 11	046 (822) 4300
29	横須賀市 衛生試験所	" 米が浜通 2 - 7	046 (822) 4057
30	相模原市 保健所	相模原市富士見 6 - 1 - 1	042 (769) 8346 ※
31	相模原市 衛生試験所	" 富士見 6 - 5 - 8	042 (769) 8348 ※
-	神奈川県衛生部保健予防課	横浜市中区日本大通 1	045 (210) 5117 ※
32	神奈川県 平塚保健福祉事務所	平塚市豊原町 6 - 21	0463 (32) 0130
33	" 鎌倉保健福祉事務所	鎌倉市由比ヶ浜 2 - 16 - 13	0467 (24) 3900
34	" 藤沢保健福祉事務所	藤沢市鵠沼石上 2 - 7 - 1	0466 (26) 2111 ※
35	" 茅ヶ崎保健福祉事務所	茅ヶ崎市茅ヶ崎 1 - 8 - 7	0467 (85) 1171
36	" 大和保健福祉事務所	大和市中央 1 - 5 - 26	046 (261) 2948
37	" 小田原保健福祉事務所	小田原市荻窪 350 - 1	0465 (32) 8000 ※
38	" 三崎保健福祉事務所	三浦市三崎町六合 32	046 (882) 6811 ※
39	" 秦野保健福祉事務所	秦野市曾屋 2 - 9 - 9	0463 (82) 1428
40	" 厚木保健福祉事務所	厚木市水引 2 - 3 - 1	046 (224) 1111 ※
41	" 足柄上保健福祉事務所	足柄上郡開成町吉田島 2489 - 2	0465 (83) 5111 ※
42	" 津久井保健福祉事務所	津久井郡津久井町中野 937 - 2	042 (784) 1111 ※
43	神奈川県 衛生研究所	茅ヶ崎市下町屋 1 - 3 - 1	0467 (83) 4400
44	横浜 検 疫 所	横浜市中区海岸通 1 - 1	045 (201) 4456
45	東京 検 疫 所 川 崎 支 所	川崎市川崎区千鳥町 23 - 1	044 (277) 1856
46	横浜 検 疫 所 横 須 賀 出 張 所	横須賀市田浦港町 1 - 49	046 (861) 6650
47	横浜 検 疫 所 三 崎 出 張 所	三浦市向ヶ崎 8 - 48	046 (881) 3805
48	輸入食品・検疫検査センター	横浜市金沢区長浜 107 - 8	045 (701) 9502
49	横浜市立市民病院	" 保土ヶ谷区岡沢町 56	045 (331) 1961

分布区 番号	機 関 名	所 在 地	電 話
50	川 崎 市 立 川 崎 病 院	川崎市川崎区新川通 12 - 1	044 (233) 5521
51	横 須 賀 市 立 市 民 病 院	横須賀市長坂 1 - 3 - 2	046 (856) 3136
52	藤 沢 市 民 病 院	藤沢市藤沢 2 - 6 - 1	0466 (25) 3111
53	平 塚 市 民 病 院	平塚市南原 1 - 19 - 1	0463 (32) 0015
54	相 模 原 協 同 病 院	相模原市橋本 2 - 8 - 18	042 (772) 4291
55	厚 木 市 立 病 院	厚木市水引 1 - 16 - 36	046 (221) 1570
56	神 奈 川 県 立 足 柄 上 病 院	足柄上郡松田町松田惣領 866 - 1	0465 (83) 0351

平成14年 神奈川県感染症

平成16年3月 発行

発行者 神奈川県感染症情報センター

(神奈川県衛生研究所)

印刷所 有限会社 関内印刷



資源を大切に

この本は 再生紙(古紙70%含有)を使用しています



神奈川県

衛生研究所

茅ヶ崎市下町屋1-3-1 〒253-0087 電話(0467)83-4400